

フィールドレポーター

掲 示 板

2003 年度第 1 号 通巻 25 号(5 月)



宮本 真二(滋賀県琵琶湖博物館)

もう新年度当初とはいえない時期になりましたが、この 4 月からフィールドレポーター(以下 FR)を担当させていただくことになりました学芸員の宮本京二と申します、専門とする領域は、自然地理学・環境考古学です。(詳細は先のご案内を参照ください)。

FR を担当させていただくようになって、率直な感想は？との問いには、「よくもここまで・・・」と表現するでしょう。それほどスタッフのみなさんの熱意、いや情熱に圧倒される日々です。

また宮本に変わって、新しさは？との問いに対しては、いまだ具体的な答えを持っていない状態ですが、FR 制度の良さをさらに、高める努力でしょうか。

最近では、せちがらい情報ばかりが耳にはいってきます。でも交流室にいて、みなさんの姿勢を拝見すると、「癒し」にも似たキモチになります。30 歳をこえたからではないでしょうが、そのように感じています。

8 月にはご存知のとおり、伊吹の交流会をバスでと企画しています。わたしも今からたいへんたのしみにしています。みなさんも、ぜひご参加いただき、主体的かつ積極的にご活動いただければ、とてもうれしく思います。

FR の副担当は、わが琵琶湖博物館がほこるユニーク学芸員の前畑政善(魚類生態学)さんです。わたしが頼りないときは、前畑さんにすがってください。

それでは、よろしくおねがいいたします。わたしもワクワク、楽しみです。

フィールドレポーター 6・7 月の予定をお知らせします。

6 月 7 日(土) 定例会: 於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~

6 月 21 日(土) 定例会: 於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~

7 月 5 日(土) 定例会: 於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~

7 月 19 日(土) 定例会: 於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~

上記のほか、プロジェクト会合や交流会へ向けての準備作業などを予定。

極く稀に、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

8 月 23 日(土) 交流会: 於: 伊吹山文化資料館(未定)

「琵琶湖と周水域の人間の暮らしと水との関わり」牧野厚史さん(地域社会学)



3月2日のシンポジウムの討論会で名司会ぶりを発揮されました牧野厚史さんを覚えておられると思います。牧野さんは地域社会学がご専門と云うことですが、琵琶湖博物館と地域社会学がどんな繋がりがあるのかお伺いしたくて、FR スタッフ歴1年の新米がインタビューをお願いいたしましたら、ご多忙の中お引き受けいただきました。

なにしろ初めてです。どのような結果になりますやら、不安一杯で面会いたしました。

<まづご専門の研究テーマについてお聞きしました>

「琵琶湖と周水域の人間の暮らしと水の関わり」がテーマです。現在は守山市の「木の浜地区」人々の過去から暮らしぶりについて研究されています。

木の浜地区は農業が主体の村ですが漁業も行っていた。家庭で食する「おかずとり」を目的として、個人ではなく、村の人々で魚捕りをしてきた。漁業をする場所は田んぼの水路や内湖である。これらの場所は村が管理している。このような村の人々が作る社会組織の役割を研究しておられます。

牧野さんのご研究によりますと、日本人は社会組織をしっかり作ることが世界の中でもうまくて、中でも滋賀県の人々は組織作りがしっかりしているのだそうです。例えば水路の管理でも割と簡単に組織を作ってしまうそうです。

それで木の浜の組織作りの研究成果を今あちこちで問題になっている、「山の手入れが行き届かない」、「水路手入れが行き届かない」地域が全国あちこちにあるが、それら暮らしの組織の問題解決になるヒントに生かせたらと考えておられます。

ご専門のことが少し判りかけてきたように思います。また、改めて博物館のC展示室で勉強して見ようと思いました。

<どんな風に研究を進められるかをお聞きしました。>

現地に出かけて聞き取り調査が研究主体だそうです。研究室の仕事が主体ではない。ここに牧野さんの「こだわり」を感じました。数例ご説明していただきましたが、紙面の都合上2例ご紹介します。

- 1, 圃場整備事業の例では、曲がりくねった田が直線的になり、水路も真直ぐに引かれ実に生産性が上がっていると一般に考えられています。しかし現地で良く聞いてみると必ずしもそうでもなく、水路の水が減ってきたり、生産性も言われている程上がつてないし、周囲が丸裸になって昔の風景が懐かしいとか悩んでいる人々がいる。しかしこのような事柄は取り上げてもらえない。これら固有の問題点、理由を聞き取って、社会学的、民俗学的に、あくまでも人間中心の問題とし

てとらえ研究をしておられます。

2、自然再生への取り組みが始まっているが、その中心は自然科学の分野になるが、人間の関わりを考えた再生、そこに住む人々の生活環境の再生を考える必要があるのではないか。そのためには村作りから再生を考えること大切だと。そこで人々がどんな暮らしをしてきたか、人々の気持ちがどうか、出来上がっている社会組織がどう考えるか、を聞き取り調査し調べていくことが大切な仕事と考えている。と説明される。

< 仕事から話題を変えて、少年時代のこと、ご趣味などについてお聞きしました >

少年時代は兵庫県明石市で、ため池の多いところに住んでおられました。ため池で、魚を捕ったりして遊んでおられたそうです。植物の観察が好きで、将来は植物学が勉強したいと考えておられたそうです。植物好きの少年がなぜか今社会学に進んでしまい、いまでは植物の名前も忘れがちだと謙遜されました。

ご趣味は「研究」、と書かないでくださいとおっしゃっていました。それでは何ですかと質問しましたら、「ドライブにでかけること。隣に奥様をのせて」と少し照れておっしゃいました。また、時々は若い人達とカラオケにも行かれるそうです。若い人の歌は少し苦手だそうです。機会があれば誘って見られてはいかがでしょうか。

< フィールドレポート(FR)活動についてご見をお聞きしました >

研究の中心は地域に出かけて、フィールドから得られる情報であり、研究室の中だけでは限られている。FR の情報は研究に有益なフィールドの情報です。これかこれからもドシドシ情報を発信して下さいと励まされました。

皆さん努力して充実した情報を集め、発信しましょう。

< 将来の夢についてお聞きしました >

琵琶湖の周水域、「木の浜」が現在の研究場所ですが、この琵琶湖の地区の人々の暮らしの問題を掘り下げ、その研究成果をグローバルに広げ、広く世界に発信できればと考えている。と目を大きくして語られました。頼もしく感じました。

< あとが >

インタビューするのがご専門で、逆にインタビューされるのは初めてと、緊張されたご様子でした。こちらも緊張してしまいました。下手なインタビューにも丁寧にお答えいただきました。兵庫県から滋賀県へと新快速の走る範囲しか住まれたことがないそうで、根っからの関西人。話に興が乗ってこられると、「そうやったらえやないか、、、」と調子が出てこられます。

是非皆さんの家の近くや博物館で出会ったら気楽に声をかけて下さいとのこと。きっと楽しい話が聞けると思います。

牧野さん、お忙しい中下手なインタビューにお付き合いいただきまして有難うございました。



「フィールドレポーター掲示板」に関する アンケートの回答と今後について

FR 掲示板は毎年、年度替りに発行している「フィールドレポーター募集」のチラシに掲載していますように、滋賀県内の自然や暮らしについての情報を広く皆さんから提供していただく事から始まります。

それらをまとめて発信し共有することによって新たな発見や、自分の周りとの比較、そして再認識乃至は自己の教養、知識の向上に一役買ってもらおうという大きな目的と役割(使命感)を持っています。

そのような観点から投稿していただいた原稿は、ほぼ 100% 近くは掲載してきましたが、先に実施しました「2002 年度年度末フィールドレポーターアンケート」の FR 掲示板関連の回答からご意見、ご希望などを勘案して今後の FR 掲示板に反映させたいと考えています。(アンケート回答数 47 から抜粋)

- 4. 今年度発行の掲示板について感想、意見を聞かせてください

おもしろかった、楽しかった……7

学芸員紹介シリーズがよかった……3

活字にしたら用紙節約になる

手書きの味が捨てがたい……2

いろいろな体験から感動が伝わってくる……2

短くていい多くの人の投稿を読みたい

素人だからやさしく

専門的でわかりにくい……3

知饒に乏しくとも近況報告のような、気楽に書ける雰囲気ほしい

落書きが多い、

勝手に原稿を手直ししないで

同一人の投稿が多すぎる、

量が多い、難しい事が多い、

概略、以上のように忌憚の無い回答を頂きました。その結果から当面は次のような方針で望みたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

- 1) 1 回あたりの発行ページ数をある程度制限して読みやすくします。
- 2) 投稿の内容や点数は自由ですが、発行ページ数が多くなる時は一人/複数の掲載を制限する事がありますのでご了承ください。(次回発行までに一人あたり 3 点以上投稿される時は優先順位を付してください)
- 3) ワープロ原稿は、なるべくフォントサイズは 12P でお願いします。
- 4) 手書きの原稿大歓迎です。そのまま掲載を原則としていますが紙面の都合上、活字にすることがありますが一切修正する事はありません。(但し、楽しく読んで頂くため空白にイラストの挿入などを工夫しています)
- 5) フィールドレポーターは問口の広い情報を共有する素人集団でもあります。たくさんの方からの気軽な投稿を歓迎しています。(編集スタッフ)

「庭を訪れた蝶の調査」中間結果

本年度第1回のフィールドレポーター調査「庭を訪れた蝶の調査」が始まって、早1.5ヶ月を経過いたしました。気温も上がり、蝶たちの活動も活発になってきましたが、皆様の身のまわりには、どんな蝶が見られますか？

4月末現在で、16人の皆さんから、延べ50件のアンケート回答を頂きました。回答頂いた50件についての中間集計結果を報告させていただきますので、参考にして頂き、更なる多くの皆様からのご回答をお願い致します。

1. 飛来した蝶の種類

シロチョウ類	27(モンシロチョウ 16)
アゲハ類	13(ナミアゲハ 7)
シジミチョウ類	8(ベニシジミ 4)
タテハチョウ類	5(ヒョウモン類 2)
ジャノメチョウ類	1
その他	1

2. 天候

晴	44
曇	4
雨	2

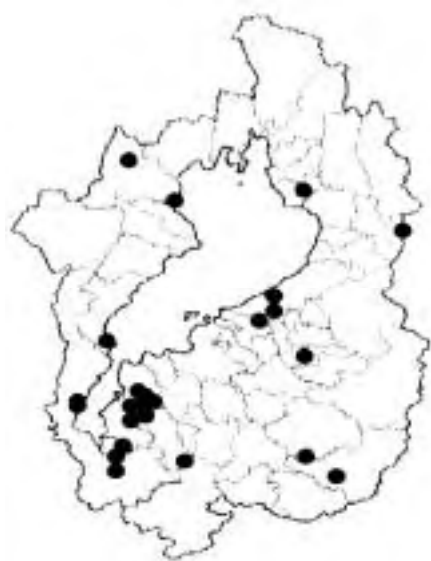
3. 飛来した場所

庭	16
畑	14
その他	14

4. 飛来した植物

菜の花類	14
その他	15

5. 調査地点(4月末現在)



6. 要約

4月末現在では、モンシロチョウ、ナミアゲハの飛来が主なもので、ベニシジミなども出始めております。今年の初見日で最も早かったのは、シロチョウ類の3月10日でした。

天候は晴天時の観察が殆どであります。曇、雨の日にも蝶の飛来が見られております。今後雨の日にも積極的に観察し下ください。

飛来した場所、植物については、蝶は飛び回っているために特定がなかなか難しいようです。

標本の作成に関しては、「蝶の捕獲がなかなか難しい」自然保護の観点から「標本作成は反対などのご意見が寄せられております。飛び回っていて、正確な蝶の名前がわからない場合は、類別名又は不明としてご回答ください。

今後梅雨期から夏に向けて、また種類の違った蝶たちが出現し、身のまわりを豊かにしてくれるものと思います。より多くの皆様からの情報提供をお願い致します。

森 擴之 (プロジェクトリーダー)

表 題 [春型のアゲハ]

投稿日 [030407]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

チョウの調査に加えて下さい。 本日(Apr/07/2003 12:30)自宅の庭で夏型のナミアゲハを見ました。 満開の桜(ソメイヨシノ)の樹冠から降りてきたようです。 スズメの群れにつつき回されて道路を隔てた向かいの家に舞い込み、反対側に回り込んだのですが多分スズメに食われたらしく採取出来ませんでした。

- * 追跡の途中でセセリの仲間を見かけたような気がします。白髪頭を振り乱し、押っ取り捕虫網で駆け回る姿は御近所の目にはどう映りますことやら。 アブラナ科を十字花植物、ミカン科を柑橘類と云いたくなるのは年のせいでしょうか？

観察場所 彦根市稲部町 メッシュコード 滋賀県 30 5236-6145

日 時 2003 年 4 月 7 日 12:30

環 境 自宅の庭

良く知られた蝶の食草・吸蜜植物として、自宅には、

アブラナ科 : チンゲンサイ・ワサビ(路地・水の無い庭地栽培)→アゲハ、モンシロチョウ、スジグロチョウ、キチョウ

セリ科 : セリ、ミツバ、パセリ→キアゲハ

スミレ科 : 園芸種のニオイスマレ、スマレ、タチツボスマレ→ツマグロヒョウモン

マメ科 : キヌサヤエンドウ・ネムノキ→ウラナミシジミ、アオスジアゲハ、ナミアゲハ、キアゲハ

ミカン科 : サンショウ→アゲハ、クロアゲハ

キク科 : フキ、タンポポ類→ウスバシロチョウ、スジグロチョウ、キアゲハ、ルリシジミ

バラ科 : サクラ(ソメイヨシノ)、ナワシロイチゴ、リンゴ、ウメ(園芸種・紅梅)
→ナミアゲハ、キアゲハ

自宅の周囲には、

クスノキ科 : クスノキ(約 50m 離れて)→アオスジアゲハ、があります。

表 題 [蝶の調査に一寸したアイデア]

投稿日 「030412」

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

以下はコストパフォーマンス重視のアイデアです。

「三角紙」を作る為に A5 サイズ等の紙を切り分けるのは少々手間がかかりますが、量産には百元ショップで購入した「メモ用紙」が最適なようです。サイズ葉書大で三角に折ればそのまま使えます。材質は普通の紙ですからプラスチックシートに水分や湿気を綴じ込めて腐敗を早めたりすることはないと思います。

大型・厚めの使用済みの封筒の隅から、直角二等辺三角形に切り取った「三角形の袋」を「三角紙」の容器にするとピッタリと収まります。下に国示市販のビデオソフトの薄いスチロー口の外宿が「蝶を入れた三角紙」を潰さずにザック等に入れて運ぶ為に使えます。

昆虫は系統分類上は「哺乳類」と同等のひとつの「綱」ですが、その中の「種」の数はとんでもなく多く、研究者・マニア向けの「図鑑」は高価すぎ、初心者には難解・繁雑すぎます。そこで、書店を回って手頃なものを探してきました。

- * 「ポケット版学研の図鑑 1 昆虫」(本体価格¥960+税)
が持ち歩きにも手軽で、便利かと思います。

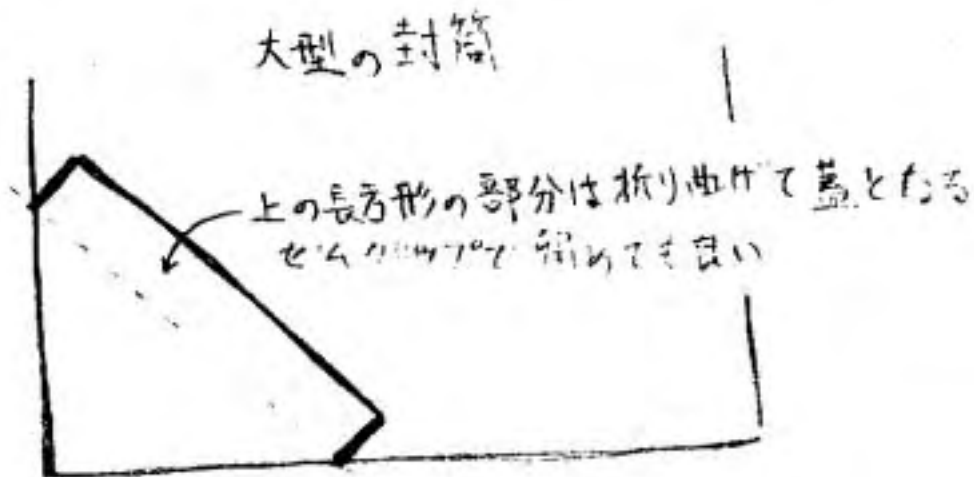


表 題 「思い出の中のアゲハ(ナミナゲハ)」

投稿日 [030412]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

半世紀近くも前の、私の高検生時代のことです。

生物学の先生はあだなを「酢蛸」、授業に身を入れないでいると、文字通りの「教鞭」が頭頂骨に刺激を与えに飛んできてくることもありましたが、教科書は無しで、参考書として、かなり高度な500ページ程のものがつかわれていました。(多分、当時の高校の標準的なスタイルだったと思います。)私は生物部にも入っており生物学は楽しい時間でもありました。

ある時、先生・生徒というより親分・子分関係で「校庭のカラタチの生け垣を手入れする」ということになりました。カラタチには沢山の大きなアゲハ(ナミアゲハ)の幼虫文字通り蚕食していました。手入れの為に枝葉を揺らすと突然幼虫の頭(?顔)から赤紅色の柔らかい角のようなものが現れ、強烈な刺激臭が漂いました。

イガグリ頭が八方に飛びのきました。その時、酢蛸の声が！！「良く嗅いでみる、レモンシトロン匂いだ！！」

落ち着いて嗅いでみると、坊主頭からしたたる汗の匂いを忘れさせる爽やかな香りでした。

皆さんもナミアゲハの幼虫を見つけたら、その頭を小突いて香りを嗅いでみて下さい。

表 題 【蝶々の標本採取はむずかしい???】

投稿日 [0305161]

名 前 [草津市 古谷 善彦]

4月末から5月初旬にかけて、生活圏内で蝶々の調査をして見た。

まずは、100円ショップへ行って蝶の採取を目的に網を購入、柄の長さは思ったより長く120cmあり網の直径20cmあまり、深さは30cmあまりあって、これなら採れるだろうと早速、知人の畑へ直行。ここにはエンドウが植えてあって早くからモンシロチョウが居た事を如っていたからだ。

晴天の中、予想通り数匹の蝶が舞っていた。ところが、止まるどころか飛び方が速くてとても編みに入ってくれず、まるで蝶に遊ばれているようだ。

しかし、本音はこの初夏のひと時を謳歌している短命の蝶をわざわざ追っかけて殺す事も無いだろう...と云うやさしい心遣いがあったのである。

それからはデジカメに収める事にした。拡大すれば同定可能と思う。



表 題【どこにでもある風景の簡単な報告 その１】

投稿日【０３０４０９】

名 前 【今津町 角井】

５３３６ - ２０２３八王子川支流の支流、１９９４年初めて現地に入った。
２０００年に行った時、エン堤ができていた。９７年× ２ ９８年 × ２であると記録されている。

山の奥で人々が知らない間に悪事を働くとは、多くの人は知らないまま。



表 題【マキノにおける立ち枯れに着いて簡単な報告】

投稿日【00409】

名前【今津町 角井】

5336-2023 立枯れは県北部だけではなくアイバノにも進行している。 酸性雨、酸性雪が原因と考えられるが、具体的な対策はとれていない。

スウェーデンなどでは、石灰をヘリコプターで散布している映像を見たが、日本でも早く行動をしなければいけないと考える。

山は荒れていて、ゴミも放下する人間も居る。



表 題 【どこにでもある風景の簡単な報告 その2】

投稿日 【030410】

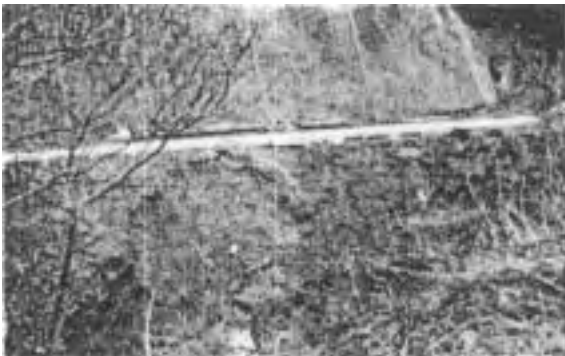
名 前【今津町 角井】

5335-1728 治山工事という看板を取れと言いたい。

源流部から流出した土砂は、下流部を埋める。

できるだけ山に入って、今なにが行われているか確認しなければならない。

現在の自然がどれだけの人間を養うことができるのか生活のためには、何をしてもいいわけではないはずだ。



大吉寺跡の手洗鉢の『いもり』再び確認

030409

野洲市 まことちゃん

4月6日(日)晴今度は早く出かける事ができた。登山口となる浅井町野瀬の県史跡の寂寥山大吉寺[じゃくりゅうざんだいきちじ]門前の駐車場出発は9時30分。山の名は『天』吉寺山なのに寺の名は『大』吉寺だ。その昔、大吉寺の前身を天吉寺と称したことにあるそうだが、大吉寺の名前はすでに平安末期の『吾妻鏡』に見られる(平凡社『滋賀県の地名』より)。

2日にわたった雨も止み、曇のち晴れの予報が早送りバージョンとなり、この時間には青空になった。登山道に入ると谷風が肌寒い位だ。例によって愛犬との山行である。白い花をつけたミヤマカタバミ、ピンクの花をつけたイワカガミの群落が見られた。昨年夏とは違い草もなく踏み跡もほぼ分かり問題の手洗鉢(前回手水鉢と書いたがいささか不適切な表現だった)まで40分で登った。鉢の中は落ち葉や枯れ草で一杯のため、やむを得ず枯れ枝を使つての大掃除。水はたちまちにごってしまった。このとき大きいのを1匹、中くらいのを1匹確認した。各2,3回見たがその都度鉢に戻したので濁った水では同一の個体か否かは確認できず、大中各1匹としか言えない。ここから数分で本堂跡だ。人里から1時間も登った標高660mもある山奥に寺を建てた昔の人はすごい。小屋をかけるのと違うのだから、柱の材料などの大きい用材をどのようにして用意したのか、生活するのに水をどのようにしたのかなど興味を引く。

ここよりさらに峰をさして約1時間。既に手洗体より上は花をつけた野草は何も見られない。頂上の直前で凹地にわずかに残雪が認められた。山頂2等三角点(標高918.5m)に着くとすぐ、石標にかぶさった笹や枯れ草を取り除き、カメラの準備にかかる。振り向くと愛犬は既に石標の脇にお座りをしてポーズをとつていた。急いで三脚とタイマーをセットして登頂証拠写真をパチリッ。たった一人と一匹で残雪輝く伊吹山地の山々を眺めながら早めのお昼となった。(他にやることがないと必然的にこうなる。)食後には県地図とメッシュマップを広げ次の山行に思いを馳せる。下山は携帯ラジオでのど自慢を聞きながらゆっくりと滑らぬように…。手洗鉢はまだ濁っていたため、更なる確認はできなかった。結局最後まで誰にも会わない山行となりました。つぎにどなたか登られることがありましたら、手洗鉢の中を『♪ そーっと覗いて見てご覧』下さい。イモリたちが『♪ みんなでお遊戯している』かも知れませんよ。



表 題「ここほれワンワン」

投稿日[030409]

名 前[彦根市 加 固 啓英]

農道を散歩中犬が、多分ネズミの類がモグラのトンネルをリフォーム、リユーズして棲み家をしていると思われる地面を猛烈な勢いで掘り始めました。今日はいつもより大きめに掘っております。犬は興奮してフガフガと鼻息荒く大量の土くれを噴水のように跳ね上げ続けております。鼻先が、目が、耳が、土に隠れました。終には肩甲骨まで地下に没しました。穴は10Lのバケツほどとなりボーリングのボールほどの干し草のような巣材の固まりがほうり出されました。巣材の大部分は良く乾いており、ふっくらしていますが、中にやや硬い一握りほどの、湿った固まりがありました。多分この固まりはトンネルの居住者のトイレでしょう。巣材の一部は犬がバラバラにしたり食べたりしてしまいました。

(大の散歩 Apr/06/2003 8:06~)

この巣材を持参しますので、このトンネルの現在の居住者が何者か調べて頂けないでしょうか。

表 題「近ごろの子供達」

投稿日[030409]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

妻が学習塾を開いているため、私にも小さな友達が出来ました。私の年代(1939 年生まれ)の子供達は「ジャガイモ似」「カボチャ似」等、総じてあまり洒落た顔はなかったように思いますが、今の子供達は「目元涼やか、両目の間はやや離れ気味」「鼻筋は通り」「頬、顎は小さい」全員がアニメの美少年・美少女風です。そして硬い食べ物は嫌いなようです。

そのお母さん世代は、いわゆる「小顔」が多く、唇を閉じての呼吸が出来ずに口呼吸している人を見かけます。口呼吸は免疫力低下などで問題視されていますが、鼻濁音を発音出来ないことと唇を閉じられないことや口呼吸の習慣とは関係ないでしょうか。

一流スポーツマンにはしっかりした顎の持ち主が多いように見受けられます。

子供達がチンゲンサイの種蒔きを手伝ってくれました。発芽の跡にはモヤシの山が出来ていました。メダカの餌やりも手伝ってくれました。その餌の量はイルカも満腹するほどでした。」

表 題 [わが家の桜の紹介]

投稿日[030410]

名 前[彦根市 加 固 啓英]

無価値で変な植物数々あれど、わが家で常識人に良いと認めてもらえる植物は、いずれも二階の屋根より高い、子供達から「トトロの樹」と呼ばれる「ハクモクレン」と「サクラ(ソメイヨシノ)」だけです。

サクラは現在の「アヤハディオ」が「アサヒ」と云われていたころ、太さが鉛筆ほどの苗を買い、自転車で提げてきたものです。

今は、地上 35cm の幹回りが 116cm の大きさでは住宅地内一番の桜です。

「桜」については色々な事がいわれます。

*「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」

この言葉は広く浸透しすぎてはいませんか？ なるほど切り口や材は腐りやすいようですが再生力は抜群です。傍芽、不定芽、不定根がやたらに生長します。

切り口の中の材が少しでも腐食質のようになり、湿り気を帯びると不定根が「ウロ(樹洞)」の内側に急速に生長することや、不定芽が他の大枝の配置や日照に関わりなく「暴れ枝」に生長しやすいのもサクラの特徴にも思えます。

馬鹿は承知です。しかし今年も道路側の枝は伐らなければなりません。

* 「桜の元に狂気が棲む」

異議なし。私が住んでいます。

* 「庭に桜を植えるとドラ息子がつ」

これも真実です。私の息子は、アメリカの砂漠で消息を断ったことがあります。

後で「携帯電話ぐらい無いのか」と聞くと「そんな物は株屋のオッチャンの持ち物だ」この息子が格闘技の K-1 で鼻の骨を折り、「ほっといても治る」と自然治癒。

「月に群雲、花に風」と云いますが、私は長年の間、相当の強風でも「風でサクラの花弁が散る」は嘘で、散るべき時がくれば散る「仕組み」があるものと思っていましたが、地上に花茎が付いて落ちている多数のサクラを見つけました。

これは

花茎に離層のようなものがあり、散るべき仕組みに従って散ったのでしょうか？

風で散ったのでしょうか？

野鳥や昆虫などによる食害なのでしょうか？

表 題 【シロバナタンポポ雑感】

投稿日【030410】

名 前【野洲町 まことちゃん】

1 年前に H 市の K さんに誘われて FR となつての初仕事(?)はタンポポ調査だった。
毎日の仕事の道中(野洲・彦根間往復)に車道脇に気(目?)を配り、マップのメッシュがダブらないように、なおかつ見落とさぬよう…。帰宅してからの犬の散歩でも同様に。さらに休日の山行でもメッシュマップを携行。連休には石鎚・剣・大山と百名山行脚でもタンポポを見れば止まって確認した。驚いたのは石鎚・剣・大山とも登山口付近で見たのはいずれもセイヨウタンポポだけだった事だ。特に剣山の登山口となる大剣神社の参道石段脇は一面セイヨウタンポポの花畑だった。このように約 1 ケ月にわたり、屋外にあってはタンポポ一色の私だつたのに、シロバナタンポポは一本も見なかったのである。

そしてこの 3 月 18 日、仕事の道中に安土城址東側の池の東岸に若草の緑の中にポツンとある白いものを見た。ゴミと思っていたが、翌日には数が増えていた。3 日目さらに増えていたので車を止めて確認したら、中心部が黄色で周辺部が白いタンポポだった。なんとなく色が褪せたもののように感じた。それから毎日見ていると、黄色のものも咲き始め数が増えてきた。3 月 30 日、K さんを訪問するとき同所に止まり調べたら、なんと白と黄色の数の比率が逆転していた。また黄色が全開しているのにシロバナタンポポは 8 割方が開き切っていないし、まだしぼんだままのものもある。2・3 本手折ってから K さん宅へ。FR 談義に花が咲きさらに K さんの散歩コースを彼のガイドで一周。見かけた野草や野鳥も詳しい解説のお陰で、大変勉強になった。

最大の疑問は、安土城址のポイントは去年の調査のときも何回か止まって調べたが、シロバナタンポポは 1 本も見なかったことだ。(実は私はこれまでシロバナタンポポを見たことがないのだ。)私の見た最も広い群生した場所であるのに。それなのになぜ今年はたくさんのシロバナタンポポが咲いたのだろう。昨年と違うところは、昨年は調査を開始したときは、同所は既にタンポポは満開状態だった。今回は咲く前からその場所を見ていた。場所は違うがキバナタンポポは数は極めて少ないものの冬でも見られた。これらのことから次の疑問がわいた。ご存じの方、教えてください。

シロバナタンポポの開花時期はキバナより早く始まり速く終わるのでは？

シロバナタンポポの開花時刻はキバナより遅いのでは？

シロバナタンポポの同一株の中では色のむらはないのか？



シロバナタンポポ



セイヨウタンポポ

表 題【 名前を教えてください 】

投稿日【030415】お名前【大津(市)町村 門脇きみ子】

4月14日 自宅庭で よもぎの葉についている 小さな金色の虫も
見つけました。 体の輪郭は 透明で その中に金の部分か
あります

体長 7mm くらいです。
幅 5mm



金色が珍しく思いました。

実物を同封しますので 名前を教えてください

学芸員さんの回答

ハムシ科の仲間で、ジンガサハムシという昆虫です。形が陣笠のようなので、この名前がついています。非常に形がおもしろく、色もきれいな昆虫なので、年に何回かこの昆虫の問い合わせがあります。分布は広く、日本全国、中国、台湾、ベトナム、インドに分布しています。ヒルガオを食草としています。

昨年5月6日、この昆虫の話題が中日新聞にミニコラムとして写真入りで掲載されました。タイトルは「十一面観音が導いた？金色の虫」です。以下がその掲載内容です。

国宝十一面観音が安置されている高月町渡岸寺の観音堂床面に金色に光るこの虫がいるのを拝観者が見つけた。寺の関係者は初めてみる虫に「観音様が導いたのかも」と不思議がっている。県立琵琶湖博物館の八尋克郎主任学芸員によると、体長約7mm、黄褐色で周縁部が透明、背中が金色に光り、ハムシ科のジンガサハムシかその仲間と確認した。この虫は、日本に広く分布するが、形が小さく、初めてみた人からは「珍しい虫を見つけた」と同館に時折、問い合わせがあるという。観音堂で仏像の案内をしている井上勇さんは観音さまの近くに光り輝く虫が飛んでくるなんて何か楽しいですね。

この昆虫を初めてみた人は驚きと感動を隠せないようです。私もその一人でした。

門脇きみ子様できれば大津市のどこで(大字)採集されたのか、教えてください。一貴重な情報となります。

八尋 克郎(主任学芸員)

〒525-0001 滋賀県草津市下物町 1091

滋賀県立琵琶湖博物館

分類研究室

yahiro@lbm.go.jp(Katsurou YAHIRO)

旧草津川と身近な畑を散歩

投稿日 2003 04 25

草津市 橋本峯治

今年は桜の花が例年並に咲いたのですが、どうしても前の年と比較してしまい遅くまで楽しめたように感じます。

ここ 2,3 日雨ばかり、今日は少し晴れ間が出来たので、近くを散歩してみました。

フィールドレポーターに入るまでは、草津川を散歩しても桜が満開で綺麗だなあ、もう桜も散って葉桜、このような感じで。大きい木ばかり見て歩いていたのですが、今年からは小さなものにも少しずつ、気が付く様になりました。

それは去年のタンポポ、今年の蝶、これらの資料を頂いたお陰で、身近でこんなに見るものがあるのかなあと思いながら今まで自転車で走っていた道を歩かずには居られなくなりました。

昨年調べてべたタンポポ調査の時は 4 月 10 日には桜が散っていたし、タンポポも沢山咲いていたのですが、今年は今がタンポポの最盛期です。

タンポポの分布も少し変わっていました。昨年あまり咲いてなかった所に今年は多く咲いている場所も見受けました。

今年のテーマ蝶、

モンシロチョウを見初めたのは 4 月 6 日で 1 匹とんでいました。その後畑に少しずつ来るようになりましたが、ここ数日は雨のためか姿が見えなかったのですが、今日少しの晴れ間を見て沢山飛んできました。今日の蝶はつがいが多くメスの後をオスが追っているようでした。

菜の花や、えんどう豆に飛んできては、その途中で二匹がもつれ合っている光景をよくみかけました。

今の所モンシロチョウと、キイチョウは見るのですがスジクロチョウも見ているかも知れません。なぜならまだ捕獲した事がなく、近くまで行ってじっと見ている所です。

これからが色々なチョウがでてくるでしょう。頑張って筆集します。

今まで興味がなかったことがフィールドレポーターのスタッフから発信されてくる資料で、こんなに楽しい事を教えてもらい有難うございます。

表 題 [気になる樹 その1 ソメイヨシノ]

投稿日[20030501]

名 前 [彦根 加 固 啓英]

桜の季節に湖北一周サイクリングをすると、余りにも多くの桜並木があり、もう少し河川敷や堤防の、自然樹形に近い放置林などにも目を向けても良いように思いますが、県の生物環境アドバイザーを引き受けた関係で「儀によって四校桜の助太刀を？」する立場となりました。注意して見るとサクラにも、曰く因縁・故事来歴・健康問題から近所付き合い・家庭の事情と複雑な問題があるようです。

1 園芸品種の代表ソメイヨシノは「寿命が短い」(80 年程)と言われますが本当でしょうか

どの本を見ても「江戸末期(または明治初頭)に江戸のはずれの染井村(現在の豊島区駒込)の植木屋さんより広まった」とされていますが、明治元年(1868)より現在(2003)までは高々145年です。山林中に自生する野生・実生のサクラとは異なりソメイヨシノは、ほとんど全てが接ぎ木され、人里に移植されたものであり、この負担も大きいと思います。人里にある為、戦災・火災・道路拡幅・土地争いなどの人の俗世間の憂いを背負い込まれ、根鉢の容積も水分や肥料も十分に与えられず、自動車に根元を轢き固められ、電線や高架線の都合で樹冠を切り詰められ、毎年の花見時には、必ず酔っ払いの大集団に取り囲まれ、枝を折られ、音痴カラオケを聞かされ、ゴミの山に埋もれるのですから、目出度く天寿を真っ当出来る確率は非常に低いのでは無いでしょうか。

2 ソメイヨシノは完成された「種」でしょうか

どの樹木の本にもソメイヨシノは「オオシマザクラとエドヒカンザクラの交配種」とあり、「伊豆半島にはごく近似のものが自生している」ともあります。

素人が素直に考えると、オオシマザクラとエドヒカンザクラの多数の交配種の雑多な形質のものの中から選んだ一株か数株を人が代々栄養繁殖を続けたもので、突然変異が無ければあるいは世界中のソメイヨシノは全て遺伝情報が同じ(クローン的)かも知れないのです。

3 ソメイヨシノを見ていると、他の樹木をあまり良く見ていない、からかも知れませんが、他とはちょっと違うと思うことが有ります。どうも生物の種としては「淘汰」や周囲との「切薩琢磨」の人生？経験不足に思えます。

不定芽・不定根がやたらにのさばり、不逞芽・不貞根とでも呼びたくなります。

樹冠の梢や太い枝の先端にダメージを受けると不定芽がいきり立ったように伸長し、ちまち全体の樹形との調和のない暴れ枝となるように見えます。太い枝の切り口は樹洞になりやすく、少し湿った腐植質が溜まると不定根が樹洞の内側に発根・伸長します。全体としての生長の調和に欠けるのです。

4 「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」の言葉があまりにも広く知れ渡り、適切な手入れを怠る口実になっています。テングス病や腐朽の進みそうな枯れ枝を切ることをためらわせ手遅れにしているのです。わが家のソメイヨシノは増築やカーポート建設の度に重機で幹に近い太さの枝を折られたり、道にはみ出した大枝を切り詰められたりしていますが、毎年花を楽しませてくれます。

5 ソメイヨシノの桜並木の中に毛色の変った木があれば、多分それはオオシマザクラです。これは、接ぎ穂のソメイヨシノが枯れて、台木の傍芽(ひこばえ)に取って代わられたのです。この葉の塩漬けは桜餅を包むのに使われています。

6 愛知川右岸の河川敷(メッシュマップ 30 5236-6134)に、上にはソメイヨシノ、根元から出た太枝からは見慣れぬ花が咲く木があります。根元からのものは多分台木のズミではないかと思います。

台木と接ぎ穂が共に健康に生長することは稀だと思います。多分接ぎ穂だった上の幹から伸びた不定根が地中に届いて養分を供給しているのだと思います。

根元が近付きにくいのですが、その内調べて見ます。

7 ソメイヨシノは自家受粉は出来ないのでしょうか？すると複数のソメイヨシノ間でも種子は出来ないのでしょうか？

わが家のソメイヨシノの下に置いたプランターに実生のサクラと思われる芽が3本程発芽しましたので、育ててみます。あるいは、やんごとなきサクラの御落胤(異種のサクラの花粉)によるものかも知れません。蜂や蝶が良く飛来しますがサクラは虫媒花なのでしょうか？

8 近くの荒神山や曽根沼緑地には毎年沢山の实生が発芽するサクラ(種は不明)が有りますが、すぐに跡形もなく全部かれてしまいます。ある樹木の本に、親の樹木に異存している病虫害や、親木に水や肥料を奪われることで次世代が育ちにくいことを「負の遺産」と表現していましたが、これは広く通じる言葉でしょうか？

9 私の家のソメイヨシノから高取り木した苗が近くの空き地に植えてあり、もう7~8年は生きているとおもいます。接ぎ木でないと開花までの年数以外に不利な点は有るのでしょうか？

***済みませんが、布谷さんをお願いします。上記の？の答えと、文中の誤りの訂正をして頂きたいのです。いつもお手数をお掛けして申し訳ありません。



表 題 『「畑の棚田」の田植え』

投稿日 「030517」

名 前 「守山市 津田 國史」

5月11日、高鳴町の鳴川の源流近くにある畑集落の棚田で田植えをしました。

畑の棚田が「日本の棚田百選」に選ばれていることは知っていましたが、実際に見たことはなく、行ってみたい所としてマークしていた所でした。

「たんぼの生き物」調査の仲間、遠藤さんが100m²のオーナーで、田植えの参加者を募っておられるが、良かったら行きませんか、古谷さんからのメールに、チャンスととびつき、わたしの仲間にもFAXしたら、二つ返事で決まりました。

当日は朝から小雨模様、畑集落の入り口で、車はそちらに駐車してくださいと行く手を阻まれ、こりゃ相当歩かされそう、雨の中傘差して登るのはちょっとと思ってたら、「バスに乗ってください」と整理の方、ほう！バスが送ってくれるんだ！と喜び、私たち4名がマイクロバスに腰を下ろしたら、すぐ発車。なんと村の集会所までピストン輸送だ。

あとから来た人達も同じだ、村が(高島町の)この田植えに懸ける思いを知らされた。町長の挨拶があり、村の役員の説明のあと、まづ手始めに小芋を植えることになり、用意されている畝に、50cm 間隔に開けられた穴に種芋を一個づつ置いていく。植えるのではなくそこに置いていくだけだ。

私たちの割り当ての田んぼは、A 区画の13番だ、集落の中をうねる坂道を役員の後について登る。手入れの行き届いた家々、それぞれの敷地の南端を石でもってひな壇を構成した集落は小雨のなかで静かだ。

集落の中ほどから伸びる畦道を右に回りこむとき、左の田んぼはもう苗が植わっているのが足許の1メートル下に見えるが、右は頭より高いところが田んぼの水面で、植付けが済んでいるのか判らない。若草に覆われた土手がゆるやかな曲線を描くなかにスカンポがひととき大きく伸びをしている。上の田んぼの脇を流れてきた水は右側の石組みのところで一旦小さなよどみを作り、畦に穿たれた小さいトンネルで水平に左に流れて下の田んぼの脇を、その下の田んぼに向かって落ちていって



A-13は今回の区画ではいちばん集落寄りのたんぼだった。田植えは長靴でとの思いは甘かった、長靴では足を捕られるのだ。ここで私たちのグループは大きな過ちをおかしていたのだ。よろけたり、動き回ったものだから、折角村の人達がつけておいてくださった植付けの目安の縦筋を踏みつけて消し、おまけに水面を濁したため、踏みつけてないところまで見えなくしていることに全く気付かず、右往左往していたのだ。

やってきた村の小母さんに言われて初めてそのことに気付いたときはすでに私たちの区画は泥水に汚染され、畦の曲線に副って付けられた優雅な線は求める術もなく、私たち 5 名、我流の線を思い思いに描くこととなってしまった。

そしてもうひとつ、水平に均された面は私たちが無残に踏み荒らしているのでそこに苗を植えても、保持してくれるしっかりした土ではなく、三分粥程度の泥水に近い土でそこに苗を挿しても、苗は泥水の中を泳いでいる。しかるべく硬めの土を寄せ集めて平らにしてからというペナルティを課せられた。



そんな覚束ない田植えの様子でも徐になるのか、あちこちの畦から、高見から沢山のカメラが私たちを狙っていて、小雨の棚田はひととき活気に包まれていた。

あと少しというところで、苗が足りなくなり、隣のグループから少し分けてもらった、これは、村の人がこれで充分と見和もって苗を用意されているはずなのに、私たちのグループでは必要以上に本数を多くしたか、間隔を細かくしたのではないかと思う。

最初に村の小母さんに手本を見せてもらったのに、それを守れなかったからではと思う、他のグループはみなきれいな曲線を描いているのに、私たちのところだけはジグザグの不規則模様となって、これで成長した稲になった時、手入れ出来るのか気がかったが、あとは村の方に任すことにして、汚れた足の土を勢いよく流れ落ちてくる側溝の山水で洗って、集落の方が用意してくださっている美味しい握り飯と味噌汁に舌鼓を打っていた。

この畑集落の佇まいは、近江の地にこんな美しいところがあります、これが山村の昔からの農業の姿ですと、わたしに四季折々に訪れてみたい強い印象を与えてくれました。



表 題 『春休みの一日、孫たちと』

投稿日 『030415』

名 前 『志賀町 尾形 勇』

春休み埼玉から来た孫四人(五年、三年、一年、二歳)三年生は男、他は女)朝が来るといつも悩む、さて、今日は何処へ連れて行ってやろうかと思案、そんな時子供たちの会話三年の坊主がブラックバスがどうしたとか、言っているのをふと耳にした。

そうだいい考えがついた、今日は釣に連れて行こう。 2 年前の夏にも一度行ったことがある近江舞子へ。 おりしも県では明日四月一日から県条例で外来魚ブラックバスやブルーギル等のキャッチ&リリースの禁止令が発足されることもあり、チビ等にこの事を教えてやる好機と思い早速話してやるとみんな大喜びだ、車でほぼ三十分ばかり近江舞子に着く。

朝十時ごろまで大気はヒンヤリとして冷たい、以前に釣った場所舞子の内湖は水が冷たそうだ。釣道具貸し店の主人が言う、内湖は水が冷たくて魚が泳いでいないかもしれない、釣れぬ時はすぐ近くびわ湖側の舟留めの小港の方でやつて見てはと教えてくれた。

やはり内湖は全然釣れない、場所を小港に移して始めたが道具か(小エビの餌さに小針)腕が悪いのか、なかなか釣れない、近くで幾人かの若もの達がどんどん釣り上げているのが、なんともうらやましい、孫たちもそろそろ飽きてきたようだ、かれこれ半時間あまり辛抱していたところ、孫(坊主)がついに釣り上げた、10 センチばかりの小魚だがブルーギルだ(F. レポーター外来魚の勉強が役立つ)。

それをきっかけに長女、次女も釣れだし、三人とも釣れるは、釣れるは、糸を垂らすと直ぐだ(まさしく入れ食い)傍にいる私は魚の取り外しや、餌づけで目まぐるしく大奮闘？

近くで釣っていた、青年も手助けしてくれながら孫達に言っていることがまたいい“坊や釣った魚は全部外来魚だから、全部お家にもって返って犬猫の餌さか畑の肥料にしるよ”と

小一時間ばかりの間になんと、三十匹余り殆どブルーギル、なかにブラックバス三匹。

本日の魚釣りは大成功だった。 孫らもいい印象を残して埼玉に戻ったようだ。

後日、電話をかけてきた、また行くと・・・・。



フィールドレポータースタッフから一言

桜の花から新緑へと、自然は人の世の動きに関係なく、巡ってきます。

そして、人間社会の動きと云えば不況だ、リストラだと云われ続けていますが、地球上では過去に例を見ない不安な出来事が多すぎると思いませんか。

大きな出来事は、米英によるイラク攻撃が終結して大勢としてはフセイン独裁政権が崩壊し国民の自由権は回復したようですが、未だに大量破壊兵器は発見できないまま、問髪を入れず核保有を表明した国もあって日本への核爆弾着弾も否定できない相互不信が有事法制の制定を急いでいるようですね。

又、昨年 11 月中国広東省で初めて感染者が確認された SARS(新型肺炎)は中国では社会的混乱を招き、台湾でも感染者が急増して日ごとに死者も増えていると報道されています。原因究明と防御策の確立が早いのか、感染拡大が早いのか、そして日本や、他の国への影響はどうなっていくのでしょうか。

さて、フィールドレポーターの今年度第 1 回調査は「庭を訪れた蝶の欄査」です。目的は「身の回りの自然」を皆で調べてみようという事ですから、庭に限らずとにかく、いっ、どこで、どんな種類の蝶を見たかなど、今回のアンケート項目は極く簡単です(同定が困難かも知れませんが標本あれば尚可)。

調査期間は 7 月 31 日までですが、まだ日があると云わずにどんどん見つけて送ってください。ひょっとすると新種が発見できるかも知れませんヨ。



旧草津川堤防にて

前号で伊吹山文化資料館へ下見を兼ねた見学会の感想特集を掲載しましたが、今度の交流会は、8 月 23 日(土)滋賀県北部のこの伊吹山文化資料館で地域の方たちを含めて行う事に決まりました。詳細はこれから詰めることになりますが、今回は行きやすいように琵琶湖博物館発のバスを出して頂ける事になりましたので多数ご参加ください。(詳細は決まりましたらお知らせします)

平成 15 年 5 月 17 日

担当は古谷でした

フィールドレポーター

掲 示 板

2003 年度 第 2 号通巻 26 号 (7 月)



宮本 真二 (滋賀立琵琶湖博物館)

今日この日(030714)は、いまだ梅雨の最中です、雨を楽しむ心境にはまだ年齢という蓄積が足りない日々を送っております。

フィールドレポーターのみなさまはいかがお過ごしでしょうか？ ガマの調査も始まり、ご多忙のことと存じます。

琵琶湖博物館も夏休み前のこの時期は、毎年恒例の企画展示(7月19日～『外来生物』)の準備作業などで、あわただしい空気が充満しています。フィールドレポーター調査についてもすこし展示されますので、ぜひ琵琶湖博物館までいらしてください。

いよいよ近づいて参りました夏の交流会(8月23日の伊吹山文化資料館)。
最終段階の調整にはいっています。この掲示板がお手元に届く直後くらいにご案内を発送いたしますので、ぜひご参加ください。

フィールドレポーター8.9 つきの予定をお知らせします。

8 月 2 日(土)	定例会:	於:	琵琶湖博物館 交流室	13:30 ~
8 月 16 日(土)	定例会:	於:	琵琶湖博物館 交流室	13:30 ~
8 月 23 日(土)	交流会:	於:	伊吹山文化資料館	13:00 ~
9 月 6 日(土)	定例会:	於:	琵琶湖博物館 交流室	13:30 ~
9 月 20 日(土)	定例会:	於:	琵琶湖博物館 交流室	13:30 ~

極稀に、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

初めての方もお気軽にお越しください。

右上の写真は木の枝に植えつけられたモリアオガエルの卵のうです。

ガ マ 調 査 速 報 7 . 1 9

今年はよく降りましたが、そろそろ梅雨が開ける気配です。

皆さん、もうガマ類をご覧になりましたか？ ガマはすでに茶色い穂となって、まさにアメリカン
ドッグ。ヒメガマはオレンジ色の花期を終えようとしています。これから花をつけるのはコガマで
すが、聞くところによると、滋賀県にコガマは大変少ないそうです。梅雨が開けて咲き出すガマ類
を見たら、どうぞ注意深く観察してください。

その時、生育の悪い「小さなガマ」を「コガマ」に間違えやすいので気をつけましょう。
ガマとコガマの区別で一番大事なポイントは“葉の細さ”。「コガマ」の葉幅は 0.5～0.8cm(どんな
に大きくても 1cmまで)ですが、「小さなガマ」は 1cm以上あるはずです。本当は花粉の状態で
区別しますが、顕微鏡がないと見られないので、花の時期と葉幅が頼りです。もしコガマらしきも
のを見つけたら、是非お知らせください。

7月10日現在ガマ19通、ヒメガマ5通、「ガマは見られない」1通の調査票が届いています。予
想外は、2種以上のガマ類が混じる場所が案外多いことです。ガマの報告をした場所に、新たに
ヒメガマが出ていたというのもありました。その場合は訂正・追加を明記して、追加種の調査票を
送ってください。調査票や返信封筒が足りない時は、お知らせくださればお送りします。



雨 の 中 の 観 察 会

7月5日(土)、降ったりやんだりの雨の中、大津市瀬田で観察会を行ないました。集まったのは
11人。ちょっと寂しいけど、わからない事がすぐに聞ける人数です。初めは「どれがガマ？」と
言っていた人も、特徴や見分け方を聞きながら3ヶ所廻るうちに、「花は出てないけどこれはヒメガ
マ！そっちの葉が薄いのはガマ！」と、見分けられるようになりました(でも、葉しか見られない地点
では、葉だけで同定は危険。花が咲くのを待ちましょう)。

また、ガマ類の生育場所や増え方、水辺の植物の陣取り合戦などについては、専門的な立場
から布谷知夫さんに教えていただきました。

午後は場所を博物館に移し、顕微鏡でミクロの世界を観察です。穂の中にぎっしり詰まった雌花

を1個取り出すと、タンポポの綿毛のよう。めしべに糸がくっただけの妙な花でした。注目の花粉は、ガマが4個つつ合着しているのに対し、ヒメガマは1個つつばらばらです。 どうして4個がくっつかねばならないのか不思議でした。

観察会に参加すると調査が楽しくなります。次回は是非ご参加ください。



ガマ」の観察会に参加して生育中のガマと対面、生育環境、葉や茎の違い、花の大きさなど実物での説明に種の判定はこれでバッチリ。花に触ったのは初めて。(古谷善彦さん)

がまミニ知識

蒲黄(ほうおう)

ガマといえば昔話「いなばの白うさぎ」で有名ですね。ワニに皮をはがされたウサギが大国主神(おおくにぬしのみこと)に助けられるというお話です。

その中で、ウサギはガマにくるまって治癒しますが、今も使われる漢方薬に「蒲黄」があります。イソラムネチンを含み、止血作用や利尿作用があるそうです。「蒲黄」とはガマの花粉のこと。つまり科学的に考えると、白ウサギの傷を治すにはよくいわれる「ガマの穂綿にくるまる」のではなく、「ガマの花粉にくるまる」ほうが有効です。

ところで、この話しの元になった『古事記』には「～即取其水門之蒲黄、敷散而撮転其上者～」(すぐに河口の蒲の花を取り、敷詰めて其の上に横たわり転がれば)とあります。また、平安初期の薬物書『本草和名』に「蒲黄」が載っていて、和名は「カマノハナ」と書かれています。古代から蒲の花粉が薬として用いられていたことがわかります。

蒲の観察会に参加して

投稿日 03,07,10

草津市 橋本

私は、今回初めて野外観察会(蒲)に参加しました。小雨の降る中JR瀬田駅に10時集合、今年に入ってご無沙汰ばかりしている私にとって次から次と久々にお目にかかる、顔、顔、顔に嬉しい限りでした。参加者は12名5台の車に分乗し瀬田体育館の池、びわこ文化公園2箇所、合計3箇所を回りました。

博物館からは学芸員の布谷先生が同行され、蒲の案内役は前田さんがして下さいました。私は蒲と言えばあのアメリカンドックしか思い起せません。最初着いた瀬田体育館の池では蒲を探すのに戸惑いました。蒲らしき絵は何処にも見渡りません。

案内役の前田さんの集合合図で池の淵に行きますと、ススキの葉っぱのような葉のなかに直径1cm、長さ12cm、程のらくだ色をしたピロード状の膚の蒲を紹介していただきました。こんな蒲、初めて、わたしのかんそうでした。

さすが案内役の前田さん、蒲についての知識は相当なもの、ヒメガマについて丁寧に説明して頂き、初参加の私にとっては大変勉強に成りました、次にびわこ文化ゾーン内、公園のなかにいまでも工事中の公園があり、表道路に沿った側に元々から水が流れてと思われる湿地帯があり、そこには沢山の蒲が生育していました。この蒲は私の知っている蒲で、アメリカンドックがついているような黒茶色の直径3cm、長さ15cm程の蒲が沢山あり、その近くにもヒメガマが少しありました。

ここでも前田さんのガイド宜しくガマ、コガマ、ヒメガマの見分け方を詳しくおそわり楽しい一時を過ごさせてもらいました。

最後に近代美術館、県立図書館の裏側にある池の所に、まだ花が咲いていない蒲の群生を紹介していただき、ここはこれからの観察場所で今後の生育が楽しみな場所です。フィールドレポーターの皆さん、図書館に御出でのときは一度、観察してください。

案内役の前田さんに蒲の季語について質問され戸惑ったわたしです。早速歳時記を広げて見ますと。

蒲の季語は夏です。蒲の芽。蒲の花等々、蒲の穂わたは秋季です。



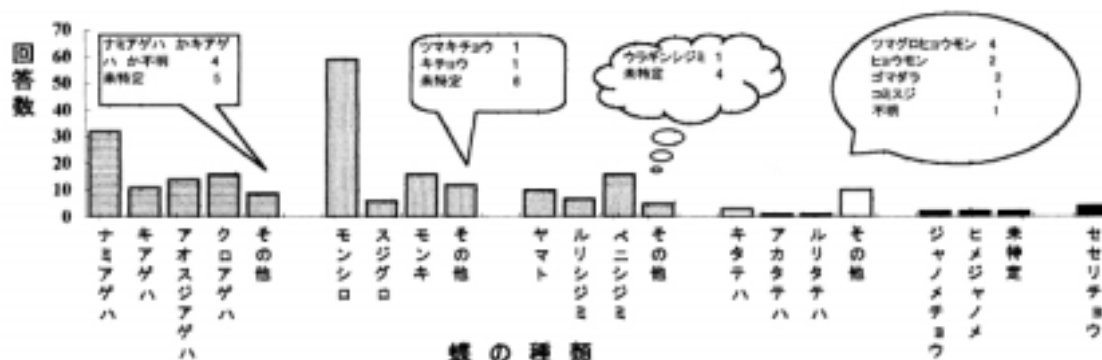
「庭を訪れた蝶の調査」中間結果一 3

プロジェクトリーダー: 森 擴之

祇園祭の時期を迎え、そろそろ梅雨明けかなと思われる今日この頃ですが、皆さんの「身近の蝶」のご機嫌は如何でしょうか？

多くの皆様にご協力を頂いております「蝶の調査」も大詰めを迎えました。「がま」の調査もはじまり、何かと忙しく感じられるかと思いますが、今しばらくの間、がまを調べるついでに、ちょうちょにも、ちょっと目をとめて下さい。

6月末現在の中間集計の一部をお知らせいたしますので、ご高覧ください。



なお、本調査に関して、折りに触れてアドバイスを頂いております、琵琶湖博物館学芸員の八尋さんから有益なるコメントを頂いておりますので、八尋さんのご了解を得て、その一部を下記ご紹介させていただきます。

『今までの調査と比べて湖北地方のデータが結構あります。湖北地方に蝶の根強いファンがおられるのでしょうか。これから多くの地域からの報告を期待しています。蝶の種類は、予想された身近な普通種の蝶が多く報告されているようです。ツマグロヒョウモンは、現在はあちこちで見かけることのできる普通種の蝶ですが、これだけ増えたのは、5～6年ぐらい前からのようです。こんな蝶がこんな所にいるのかという「おや」と思うような蝶の報告は今のところあまりないようですが、これから蝶の調査が進み、報告が増えてくれば、他の種類の蝶の報告も増えてくるのかもしれません。これから身近な蝶の調査報告をよろしく願いいたします。身近な蝶の他にも、滋賀県版のレッドデータブック、『滋賀県で大切にすべき野生生物 2000年版目録』にあがっている希少種オオウラギンヒョウモン、シルビアシジミ、ウラナミジャノメ、オオムラサキ、ウラジロミドリシジミ、キバネセセリ、ギフチョウ、クロシジミ、キマダラルリツバメ、ギンイチモンセセリ、クモガタヒョウモン、ゴイシシジミ、ヘリグロチャバネセセリ、ミヤマカラスシジミが発見されればおもしろいですね。また、昔はこの蝶は見かけたけど、最近は見なくなったとか、逆に最近はこの蝶は増えたとか、など身近な蝶の移り変わりの報告をいただきますと、身近な環境の変化が分かるのではないのでしょうか。琵琶湖のまわりでは、ここ数年、本来は南に生息している蝶であるナガサキアゲハ、ツマグロヒョウモン、イシガケチョウが記録されており、地球温暖化の影響で北上したのではないかとされています。最近、博物館の学芸員の楠岡さんが博物館のまわりでナガサキアゲハを見つけられており、その標本は博物館に収蔵されています。』

表 題 [オサムシのトラップのゲーム、その他]

投稿日 [010327]

名 前 [加 固 啓 英]

彦根市の荒神山(メッシュコード 5236-6165 ~ 75 ~ 6176)に15個のオサムシのトラップを仕掛けておりますが、なかなか目的のオサムシがかかってくれませんが、唯一掛かりました甲虫のマイマイカブリをお届けします。(採取 2001 年 3 月 26 日 周囲の手入れの悪い環境雑木林、アカマツ・コナラ・アオキ・ススダケ?・シダ類[シシガシラ・コシダ・ヒロバヤブソテツ、等] 今後は、種類を絞ろうと思いますが、狭義のオサムシ類を見分けるだけの知識がありません。よって当分は掛かった甲虫をすべてお届けして宜しいでしょうか。この山には、今はまだ現れませんが、暖かくなると広い面積に渡ってハンミョウが見られます。

我が家の犬の糞には夏にセンチコガネかダイコクコガネと云うのでしょうか、やや平たい、前足にギザギザの目立つ甲虫が発生します。もし必要でしたら手に入り次第お届けします。

いずれも昆虫ではないのですが、以下についてお教え下さい。

1. トラップに多数のクモが掛かるのですが、水が溜まっていると全部水死しているのです。状況に即して非常に素早い行動がとれるクモが、どうして書肺が濡れる程モタモタしているのでしょうか。トラップには落ち葉を入れてありますので、クモが逃げ出すか非難するのは容易に思われます。
2. 犬を野外で遊ばせると、ダニの類が付いてきます。付いたばかりは小さくて見つけれませんが、多分産卵の準備か血を吸って11mm程に膨らみます。私の家の庭は山野草が多く、ほとんど手入れをしませんので、野外とあまり変わらないのですが、このダニは庭に住み着いたり繁殖したりする恐れは無いのでしょうか。
3. トラップが何者かに荒らされたり、持ち去られたりします。(多分キツネかタヌキ、歯型のあるトラップを瀬川さんに見て頂いております。)何か上手い対策は無いのでしょうか。(漬物石大の石を乗せようと思いますが、キツネやタヌキなら容易に掘り起こせると思いますので。)



学芸員さんからの回答

専門分野：陸上昆虫学
主任学芸員 八尋克郎さん

昆虫を担当している学芸員で八尋と申します。マイマイカブリ拝受しました。標本にして、出来れば展示にも出したいと思います。滋賀県においてオサムシがトラップで採集されるのは、普通4月に入ってからが多く、3月26日の採集記録はかなり速い記録です。最近の暖かい陽気に誘われ、越冬からさめたのでしょうか。寒い地域では今の時期はまだ崖の斜面、倒木の中で越冬しています。

トラップに掛かったオサムシお送り下さい。同定いたしますが、博物館の展示(C 展示室生き物コレクション)にも滋賀県に分布している全種のオサムシを展示しています。また、地下の収蔵庫には比較標本がたくさん収蔵されていますので調べにこられて下さい。種類の区別がつきにくいオサムシもありますが、特徴を何度か見ているうちに区別がつくようになると思います。やはり、実物を見るのが一番です。

夏に犬の糞に甲虫がくるとのことですが、大きければセンチコガネかオオセンチコガネ、ダイコクコガネの仲間で、小さければエンマコガネの仲間(種類がいっぱいある)でしょう。

さて、ご質問にお答えいたします。

1. トラップの中の落ち葉が地面からどのくらいの高さにあったのかが詳しくわかりませんが、クモはあしが地面にかからない程度の距離があれば、トラップの内壁がつるつるしているのでなかなか外へ逃げ出せません。また、逃げられずにいて、雨などが降って水につかるとダメージを受け溺死します。落ち葉が地面すれすれのところまで来ていればおそらく容易に逃げられたのではないのでしょうか。なお、山中のトラップにはクモと間違いやすいザトウムシ(脚が著しく長く、体が円形なのが特徴)もたまに入ります。
2. ダニには、自由生活性のダニ(地面や浅い土中にいるササラダニ類など)、植物寄生性のダニ(農作物の害虫のハダニ類など)、動物寄生性のダニ(マダニ類など)がいます。犬についているダニは、動物寄生性のダニなので、庭にすみついたりすることはありません。しかし、庭の植物には植物寄生性のダニが住んでいます。ダニは仲間によって多様な生活をしています。

3. トラップが何ものかに持ち去られることはしばしばあります。これは、おっしゃるとおり、中に入っている餌を狙ってのキツネ、タヌキ、イタチのしわざです。また、カラスがつつつくこともあります。これは、カラスがトラップが太陽などに反射した光に反応するからです。対策としては、トラップの餌に唐辛子を混ぜることです。

また、トラップを長いこと置かないで、できるだけ早く回収する(1 日後の回収でも十分にトラップの効果はあります。むしろ長いこと置きすぎると、雨などが降った場合に昆虫が腐ってしまいます)ことも対策の一つです。トラップを1週間ぐらい長いこと置く場合には、トラップの中に入れる餌として(氷)酢酸を薄めたものを入れておくと、誘引と防腐の両方の役目を果たし、また動物の被害にもあわなくて済みます。

(参考となる本の紹介)情報利用室にあります。

ダニについて

『ダニのはなしⅠ,Ⅱ』、江原昭三編著、技報堂

クモについて

『クモのはなしⅠ,Ⅱ』、梅谷献二

昆虫採集について

『昆虫採集学』、平嶋義宏編著、九州大学出版会



表 題 [このごろ道端ではやるもの]

投稿日 [20030504]

名 前 [彦根 加 固 啓英]

5年ほど前に、同年配(60歳前後)の友人二人と湖北一周サイクリングをしましたが、その時彦根市周辺ではあまり見当たらなかったムラサキケマン *Corydalis incisa*を湖西・湖北辺りで良く見かけ、自然環境の違いによるものかと思っていました。ところが、その翌年ごろから彦根でもチラホラ見受けられるようになり、その後は非常に早さで空き地や手薄なニッチを埋め尽くして繁茂しました。しかし二年ほどで衰退し、今は少数が細々と野草の間に残っているだけです。

そのすぐ後に、和名・ホトケノザ *Lamium amplexicaule* (春の七草のホトケノザは別種のキク科のコオニタビラコ *Lapsana apogonoides*) が大繁茂し、これも2年程で衰退したように思えます。

今年になって河原や畑の隅などに、小人のデモ隊の大集団の様な、外来種のヒメオドリコソウ *Lamium purpureum*を見かけます。

まるで誰かが自然界のファッショントレンドを誘導しているかのようで、この後はどうなるのでしょうか。

JR 路線(毎年草が刈られる)に近接する河川敷や、住宅地の空き地で、在来種のタンポポを多く見かけます。これは私の行動範囲だけの事でしょうか。

又、私の住む住宅地(JR 稲枝駅の東 30 5236-6145)では、元来セイヨウタンポポは稀なのですが、道路のアスファルトと排水溝の継ぎ目の隙間に生えているものを片端から調べましたが、種子の見られたものは全てアカミタンポポでした。

これは、ここだけの状態なのでしょうか。皆さんも身近な場所に注意していただきたいのです。

追 伸

- * 犬の散歩かたがた、主に JR 稲枝駅の東方面、住宅地や耕地、琵琶湖畔・文禄川河口、宇曾川左岸・JR鉄橋周辺、愛知川右岸・葉枝見橋周辺、愛知川右岸・栗見橋下流・荒神山・曾根沼緑地などを・野鳥や蝶や野草などを見ながら徘徊しております。
又、常識人からは相手にもされない、アホらしい事を数多く手掛けています。

- * 彦根市の哺乳動物調査に加わっています。彦根市の哺乳動物について何か情報をお持ちの方が居られましたら、聞き取り調査に協力頂けないでしょうか。
対象は「ネズミ」「モグラ」から「クマ」「シカ」まで、外来種の「ヌートリア」「アライグマ」等も含み、死骸・糞・足跡・その他の棲息跡、又聞きもの、も含まれます。

- * フィールドレポーター間の、顔の見える横の付き合いがあっても良いと思いますので御用とお急ぎのない、お近くのフィールドレポーターさん、宜しかったら声を掛けてください。

〒521-1113 彦根市稲部町 270-8

Te1&Fax0749-43-2576

加 固 啓英(カコ ヨシヒデ)

無職 64 歳

表 題 [気になる樹 その2 タラノキ]

投稿日 [20030505]

名 前 [彦根 加国 啓英]

7 年ほど前、荒神山の道路整備の為、引き抜かれ、捨てられていた長さ 15cm ほどのタラノキ *Aralia elata* を持ち帰り庭に植えました。

次ぎの年は目だった生長もしなかったのですが3年目には突然猛烈に生長し、アレヨアレヨと見守る内に3.5m 程となり、一見「目出度、目出度のタラノキ様よ ? 枝も茂るし、葉も茂る」状態となりました。

冬枯れの後に見ると、不覚にも枝と思っていたのは特大の複葉で、天に向かって刺だらけの柱が一本立っているだけでした。年毎に次ぎ次ぎと根際から生えてくるので、タラノメ(正しくはタラノキノメ?)を食べましたが、言い伝えられる様に、同じ所から生える芽を 3 回つむと幹まで枯れました。

普通の樹木ですと、相当大幅に切り詰めても待機していた不定芽が、空いた空間を先を争ってこれ幸いと埋め尽くすのですが、タラノキの不定芽は早々に茶色く枯れてしまい、樹冠や枝先のダメージが命取りになるように見受けられます。但し、そう心配しなくても、次ぎの年には周囲の根から沢山の若木が生えてくる様です。

Apr/20/2003 に地上 115 cm で切り詰めましたが、切り口の直径は約 60mm 年輪は 6 筋で心材と辺材の間にはっきりした黒い筋がありました。高さはおそらく 5m はあったと思います。これを切り詰めるのは、かなり恐ろしい作業でした。幹は軍手でも持ちにくい刺だらけで、隣家に倒れ込まないように気をを使うと、その刺が顔を狙って迫ってくるのです。

タラノメというよりは枝葉に近いような部分を天麩羅にしましたが、見かけによらず軟らかく美味しく食べられました。

ところでタラノキは樹木なのでしょうか草なのでしょうか。

学名が *Aralia* の物を列記すると

Aralia elata タラノキ、*A. globosa* ミヤマウド、*A. cordata* ウド、等が挙げられます。これらは草のように見えますが、タラノキには年輪もあり「独活の大木」の言葉もあることから、今回は樹木ということにしておきましょう。

お手数お掛けしますが、布谷さんに、草か木か、草本・木本の定義についてお教え頂ければ大変有り難いのですが...(本にある、無味乾燥な説明より布谷さんに伺った内容のほうが格段に印象に残るのです。)

子供の日のひととき

03,05,08

草津 橋本

5月5日子供の日、近所の畑でトンボ網を持った子供が蝶を追っかけている姿を見かけました。エンド豆の花、ジャガイモ畑、葱坊主の畑に、モンシロチョウが沢山飛び交うのを夢中になって追っかける姿を見て、これは地元の子供では無いと思いました。

子供に尋ねてみると、大阪からおじいちゃんの所へ来たそうで、3年生と1年生の兄弟でした。私も仲間に入れてもらい、フィールドレポーターから送って下さった蝶の図鑑を持ち出し、二人に説明しながら蝶の種類を見せていると、初めはモンシロチョウしか見っから無かったのが時間が経つにつれ、いろいろの蝶が見つかりました。

キチョウは色が黄色いので直ぐ分かりますが、モンシロチョウと、スジクロチョウは捕まえてみなければ見分けがつきません。近くにみかんの木がありキアゲハやナミアゲハが飛んでいるのを捕まえてくれました。図鑑の絵を見ては、蝶の斑点とか、色、おおきさを見て確認しては逃がしてあげます。私の家にバラの木がありそこにアオスジアゲハとクロアゲハがやってきました。

小さい蝶が見つからないと言うと、パンジー、カーネーション、ミヤコワスレらの花壇のなかにヤマトシジミやベニシジミが飛んできているのを見つけてくれました。

暫らくしてエンド豆のところでルリシジミ捕まえたと走ってきてくれるし、約1時間程で沢山の蝶を観察する事ができました。

一人で観察するよりも、たとえ小さな仲間とともに観察できた事は、私にも又子供にも、近くでこんなロマンを味わえた事に満足の一時です。

又図鑑を見ることで、蝶を追っかけている時より、正確に名前を知ったことに知識と自信が生まれたと思いました。



題 名 [タンポポについて教えて下さい]

投稿日 [030513]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

タンポポを育てています。少々気取って名札に学名を添えたのですが、ケンサキタンポポ *Taraxacum* ???? だけが素人向けの本では調べが付きません。あるいは、他にも和名があるのかも知れないのですが、どなたかこの辺の事情、又はこの小種名がお解りでしたらお教え下さい。
御近所のタンポポ事情と覚書

* アカミタンポポ(キレハタンポポ) *Taraxacum laevigatum*

(私の住む「南稲部町」の外来種は全てこの種でした。道路のアスファルトと家庭排水の溝の縁との間からも生えています。)

* セイヨウタンポポ *T. officinale*

(上記「南稲部町」と道路一つ隔てた「金田町」にも、荒神山 30 5236-6175 にも、愛知川右岸(30 5236-6134 及びその下流)にも見られます。)

* シロバナタンポポ *T. albidum*

(どこでも目につきます。)

* ケンサキタンポポ *T. ????*

(JR 稲枝駅の西側では、昔からの農道一筋だけに群落となっています。)

* カンサイタンポポ *T. japonicum*

(現在までに確認した上記以外の花の黄色い在来種は、全てこの種でした。)

JR 琵琶湖線と接する近所の空き地の在来種は、全てほぼこの種でした。)

トウカイタンポポ(ヒロハタンポポ) *T. longepedunculatum*

エゾタンポポ *T. hondoense*

(これを、タンポポ(和名)としている本もある。)

ミヤマタンポポ *T. alpicola*

カントウタンポポ *T. platycarpum*

(ヒロハタンポポとエゾタンポポの交雑種と考えられる。)

(日本野生植物館小学館)

* は自宅周辺で採取出来るもの。 PET ボトルを鉢として栽培中。

Taraxacum : ペルシヤ語 ta1kh chakok (苦い野菜)

英 名 : dandelion ← フランス語 dent de lion (ライオンの歯)

中国名 : (今) ポポチン=婆婆丁

(昔) チンポポ=丁 婆婆、

この時代に日本へ伝えられた(タンポポ)のではないか ? 与謝野 寛

題 名 「モドキネスについて」

投稿日 [030517]

名 前 [彦根市 加岡 啓英]

このところイグノーベル賞の話題が良く取り上げられますが、お遊びの域を越えた中々高度な内容のようです。この真似は一寸難しいでしょうが、ギネス記録の真似なら出来そうに思えますので、「ギネス」と「モドキ」の合成語の「モドキネス」とでも呼ぶ「滋賀県の自然の珍記録」を収録しませんか？

定義は

1. 滋賀県内の「物」「環境」「現象」で、
2. 滋賀県に在住、通学・通勤、通過する人が、面白いと思い、
3. 数量として比較の出来る全ての物と事柄、

とします。

当然の事ですが、その事実を裏付けるもの(サンプルの送付、写真、測定値の立会い者の氏名、等)が必要です。

又、最初に「面白い」と思い、最初に「登録手続き」をした人は、インチキをしない限り、必ずその「最初の記録保持者」としての記録が残ることとなります。

この企画が成り立つかどうか、解りませんが、先例として「タンポポの花茎」をお届けします。

サンプル 1 タンポポの花茎 1. 長さ 74.0cm

採取 May/15/2003 彦根市稲部町 305236-6145JR 稲枝駅南西

サンプル 2 タンポポの花茎 2. 長さ 79.0cm

採取 May/15/2003 彦根市稲枝町 305236-6135JR 稲枝駅北東

サンプル 3 タンポポの花茎 3. 長さ 92.0cm

採取 May/15/2003 彦根市稲枝町 305236-6135JR 稲枝駅北東

*残念ですがサンプルを犬が食い切ってしまった為、客観的な長さの証明が出来ません。(参考記録)

何やかにやと思いつくのですが「口さき男」の域を出ません。そこで実行力のある緻密な脳みその持ち主にスタッフとして参加して頂けたらフィールドレポーターの企画が、より充実すると思います。

月に 1~2 回、博物館に集まってワイワイガヤガヤと「雑談」と「遊び」と「作業」を同時進行させるのは、「仕事」とは異なり、とても楽しい事です。

みなさんもフィールドレポータースタッフに参加して見ませんか。

標高千メートルの県境尾根に産卵するヒキガエルを見た

030608

野洲町 まことちゃん

4月28日(月)晴 休暇を取っての山行だ。目指すピークは県最北の千メートル峰・上谷山(標高1197)。県最北の集落余呉町中河内から東へ県道を高時川沿いに一路針川廃村跡に。高時川の源流の一つは椿坂峠から中河内(つまり真北)に向かって流れ、それから東へ進みながら他の流れを糾合しつつ徐々に南へとその向きを変えていることをこの日知ったのである。

廃村跡と思われる猫の額ほどの平地に一は草が繁り、往時の面影はない。橋のたもとの空き地に車を止める。先客がいるようだ。なんと袖ヶ浦ナンバーだ。急いで支度をして、針川沿いの林道を進む。まずは川中美幸を思い出すような二輪草が群れを成してお出迎え。よく見ると一輪しかないものは陰に隠れたようにもう一輪小さな花をつけていた。また三輪のものもいくつも見られた。林道終点から送電線の真下で山に取り付いた。巡視路らしく、踏み跡もよく分かる。山の道は愛犬が先導してくれる。犬の目の高さからは、かすかな踏み跡の窪みもよく分かるようだ。黄色い可憐な花はミヤマキンバイだろうか。薄紫の花はスマレだろうが種類は私には(勉強不足のため)分からない。この赤い実は何だろう。ポケット図鑑がほしい。

ようやく尾根上部に近づいて来た。送電線の鉄塔の下で一息入れて地図を広げていたら、かすかにチリンチリソと熊よけ用鈴の音が…。音はとぎれとぎれにしか鳴らず、なかなか近づいて来ない。ようやく姿を現した人物はなんと捕虫網をもっていった。この人が先客だったのだ。わずかの話を交わして別れた。じきに県境尾根に差しかかり東進する。この辺りは立派な巡視路と言う感じだ。ところどころの窪みには名残雪があり、その付近にはフキノトウが見られる。この尾根の標高は千メートルだから平地との温度差は約5度と言ったところか。尾根を横切る位置に鉄塔があるが、尾根道はここまでだ。この先は、福井県側への下りとなる。1時前だし、ここで昼飯にしよう。携帯ラジオを聞きながらおにぎりを頬張り2万5千図を広げる。犬にもご褒美を忘れない。実に頼りになる『ワンナビ』だ。

腹ごしらえが済み尾根道を探す。鉄塔の脇に目印のテープを見つけ尾根を少し進んだが、藪がひどく踏み跡も見えない。犬も全く進もうとしない。周辺を探るがやはり見つからない。本に『そこから先は藪に閉ざされている。』とある通りだ。この鉄塔から三角点まで約3キロメートル、残雪期でもこの往復に約3時間かかるとされているから、藪となればさらに困難が予想される。などともっともらしい言い訳を並べて前進を断念し、鉄塔下で写真をパチリ。直ちに帰路に就く。3等三角点の辺りで水音がした。目をやると、なんとヒキガエルが大きく体を揺さぶりながら産卵をしているではないか。急いでカメラの用意をしたが、ヒキガエルはいち早く泥水の中に姿を隠して



しまった。この水たまりの深さは約10センチしかない。水が干上がる前に蝦蟇の姿に成れるのだろうか。それにしてもあの大量の寒天質に包まれた卵は、親の体内ではどのようなになっているのだろうか。産卵と同時に水を取り込んで急膨張するのだろうか。でなければ説明がつかないではないか。卵を後にして帰路を急ぐ。下りかけで蝶を見かけた。二匹が戯れるように乱舞しながら行き来している。アカタテハのようだが近づけば逃げるし確認できなかった。捕虫網の人は蝶を取りにこの尾根に登って来たのだろうか。このとき初めて「あの人は博物館の人かもしれない。」という考えが頭をよぎったのである。

表 題 【シロバナタンポポその後】

投稿日 【20030610】

名 前【中主



町・Y】

シロバナタンポポは、真っ白いものや、中が黄色っぽいと思うものなど、ひと花ひと花見え方、感じ方が違うように思います。あそこに咲いていたのはふっくらしていたのに、今日のこの花はずいぶん優しげだなあと思ったりもします。ふしぎ、ふしぎで、タンポポにくる虫たちにライバル出現と思われるくらい通ってみました。

観察地は、どこも農作業に深くかわりがあり、草刈や野焼きなどのため、昨ひまでの群生地が今日は一株も見られないと言うことも幾度があり、ずっと同じ場所で観察できたところは一箇所ありません。一ヶ月半後に再び観察地となったところが何カ所があります。下記のうち、花の見られるところ 2,3 箇所を観察しました。

観察地(中主町)	5236-5022	農道脇	シロバナのみ群生
	5236-5022	集落内車道脇	キバナ帰化種と混在
	5236-5022	川の土手斜面	キバナ帰化種と混在
	5236-5032	川の土手斜面	シロバナのみ群生
	5236-5032	田んぼのスロープ	シロバナのみ群生
	5236-5030	駐車場脇	キバナ帰化種と混在

調査方法は、行き当たりばったり。参考になるようなタンポポの本も見ず、調査方法も知らず、どうしてだろうで開花日数と花のようすを調べ、なぜだろうで開花している花の花数を数え、あれあれと思えばめしべ、おしべ、花粉の色を見て回り、おやおやと思えばじっと花とにらめっこ。なんとも心もとないながら、次のよう思いました。

開花の時期

今年になって初めて見に行ったのは、2月13日。後に群生地となるところ 2,3 箇所で 2～4 株の開花が見られ、ワタ毛らしきものもありました。3月14日も2月とほぼ同じ。3月27日には、どこも 10 株以上の開花があり、このころから一斉に咲き出し、4月中旬までが花の盛りのようです。20日を過ぎると徐々に咲く数が少なくなり、5月に入ると群生地により差はあるものの、6～7株の開花、3～4株の開花と少なくなっています。

花のようす

同じ一株に咲く花でも、一日目開花のもので、外側の花がぱっと開いたものは真っ白で清楚。2日目の花は中が黄色っぽく、すべての花が開いたものは、中心部のめしべが嬉しそうで満面の笑みを思わせます。

中が黄色っぽく見える花で、2月、3月、4月初旬の花は、黄色と言うよりオレンジ色にさえ思えるのですが。

5月に見る花は、押しなべてどれも白いように見え、一回り小さく華奢な立ち姿。めしべの色がかなり薄い黄色をしているように思います。

同じ所に咲くタンポポでも、2月の花はかなり中が黄色っぽく、5月の花はおおむね白いように思い、草刈り後に咲き出す花は特に白いと思います。

ひとつの花の花数を数えてみると、3月下旬から4月初旬、シロバナタンポポが最もよく咲いているところは、 100 ± 10 前後と安定しているが、5月の花は群生地により90前後、70前後、50前後とかなりばらつきがあります。29,37,38で数え終わったものもありました。

(中が黄色っぽい、白いは、咲く時期、開花日数、花数、花粉の色や量に関係があるのかな。それとも、白いと思うタンポポは別のものなのかな。2,3,4,5月の花を並べて比べられるといいのに。)

	開花1日目、外側 1列が開いたとき	開花2日目、外から 約3列目まで開花	すべて開花
花の断面略図			
2月3月4月初旬 私の見えかた	まっ白	中が黄色っぽい	中が黄色っぽい ほうが多い
4月下旬 私の見えかた	まっ白	中が黄色っぽい	花により見えかたが いろいろ
5月 私の見えかた	まっ白	花により見えかたが いろいろ	シロバナタンポポ

3月14日、車道脇で見たシロバナタンポポは、寒さのためか花びらがベージュ色にくすみ、とけそうになった痛々しい花がいくつかありました。



開花の時刻

午前7:30分ごろ、キバナは開花していますが、シロバナは閉じているものや、少しふくらみだしたものなど、さあ、今からと言うところでしょうか。お天気がよければ午前8時過ぎから午後3時頃まで開花しています。

表 題 【どこにでもある風景の簡単な報告 その3】

投稿日 【030613】

名 前 【今津町 角井】

ビワコルールによってブルーギル、やブラックバスの駆除が、始まりましたが、在来種の駆除も始まったようです。

大きな台風、地震が来ませんように、湖西域に天罰が下りませんように。



5336-1043 生来川



5336-0092 石田川



5336-0060 天川

表 題 【どこにでもある風景の簡単な報告 その4】

投稿日 【030621】

名 前 【今津町 角井】

メッシュマップ 5335-1708

イワナの住処が2つ消えた。ピワコ条例は在来種を保護しないのか。

様々の人達がピワコの復活を願って活動している時に地元の人間がその願いに反する行動を取る。

幅一メートルもない小川にコンクリートの壁を作る。自分たちの都合のいい生物だけの土地、水場、阻止しなければならない。



荒谷川支流



表 題 :変なによろによろ虫

投稿日:030703

大津市 門脇 きみ子

家の庭に今まで見たことのない変な虫がいました。

色は明るい黄土色、細長く体長 40cm ほど、平べったく幅は 2 mm ~ 5 mm で進むために伸縮して太くなったり細くなったりします。

表面からねばねばした体液を分泌して、這った後にナメクジが這った後のような光った粘液を残します。

頭の部分は、最も平たく左右に広がった形状をしていて上下に振りながら進みます。

木切れで引っかけて持ち上げると、絡まってぐちゃぐちゃになったので、そのまま置いておくと、早く地面に潜ろうとしてか自分で切れてしまいました。頭の部分は全長の 1/3、尻尾の部分は 2/3 ぐらいの 2 匹になり、それぞれが問題なく生きています。

写真は、土に潜っていた頭の部分を掘り出して水で洗って平らなところに持ってきて写したものと、尻尾の部分を最初に置いた場所で写したものです。

頭の部分を元いた土のあるところに戻すとすぐに頭から土に潜って行きました。

尻尾の部分も頭が付いていた方を先頭に土中に潜ろうと努力しているようでした。

本当の頭がないのでかなり手間取っていましたが、そのうち完全に潜ってしまいました。

本当に変な虫です。これは何でしょうか？ 教えて下さい。



フィールドレポータースタッフからの一言

今年の梅雨は例年になく雨の日が多く、ウンザリしていた人も多かったと思います。この2～3日は晴れ間も見えていますが、入梅後の日照時間は全国的に平年に比べ半分以上でこの日照不足が農作物へ影響して、すでに夏野菜の生育が遅れていると報じられています。寒い時期は寒く、暑い時期は暑く、降る時期は降り、照る時期は照る...と本来の自然の現象が結果として一番望ましいことです。

暗い出来事の多い昨今、明るい話題はプロ野球阪神タイガース、この勢いはファンであるのに係わりなく選手の好プレーに感心させられます。この成果は監督の指導、采配もさることながらまさしく選手のやる気でしょう。

今年度第1回フィールドレポーターちょうさの「庭を訪れた蝶」は締切日が今月末となっています。昨今まだまだ見掛けますが意識して見ていると随分蝶に出会えたのではないのでしょうか。



第2回調査「ガマ(蒲)を探そう」が始まりました。

調査に関する一書はすでにお手元に届いていると思いますが、7月5日(土)には雨の中観察会が行われました。案外身近なところにあるかも知れません。気をつけて早速ガマを探しに出かけてみてください。

「夏の定例会」8月23日(土) 伊吹山文化資料館の詳細が決まりました。

@ lbn FR 担当の宮本さんには多大のお世話をお掛けしました。

定例会のあとは周辺の自由観光や拝観などの時間が設定されているようです。この機会に県北部地方の見聞を広げられてはいかがでしょうか。

おことわり...今号の「学芸員紹介シリーズ」は都合により休みます。

平成 15 年 7 月 19 日

担当は 古谷でした

フィールドレポーター 掲 示 板



2003 年度第 3 号通巻第 27 号(9 月)

宮本 真二(滋賀県立琵琶湖博物館)

冷夏といえ、今の時点(8月31日)は猛暑です。長い地球環境変遷史からいえば、今年の冷夏もどのように「記録」されるのか、と思いつつ日常生活をすごしています。

夏は、いろいろいそがしいですね、我が琵琶湖博物館も、ある意味、いちばん多忙な時期です。夏休みですから。

フィールドレポーターという制度にとって、8月23日の「交流会」の試みは、すこし新しいものでした。伊吹町の文化資料館さんをお願いして、交流会を持ちました。一言で私の感想を表現しますと、「たいへん、勉強になりました」、です。この勉強の意味は、博物館という場に関わる人々の熱意と実力と、です。実力は、力量と表現してもいいと思います。そのように感じました。

これを足場にして、来年も「新しいこと」を思案中です。でも、上記の「力量」は、関わる人々の力です。それは学芸員でないことは事実です。

フィールドレポーターのメールアドレスが出来ました。詳しいことはこの号の中に掲載しています。情報交換など、みなさんのご活用を期待しています。

フィールドレポーター10月、11月の予定をお知らせします。

10月4日(土)定例会:	於:琵琶湖博物館交流室	13:30~
10月18日(土)定例会:	於:琵琶湖博物館交流室	13:30~
10月31日(金)調査締切日	「ガマ(蒲)を探そう」調査期間終了	
11月1日(土)定例会:	於:琵琶湖博物館交流室	13:30~
11月15日(土)定例会:	於:琵琶湖博物館交流室	13:30~

稀に、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

【フィールドレポーター専用 e メールアドレスが開設】

交流室のパソコンが増設されました。

情報化時代に対応して行きたいと、かねて希望しておりましたフィールドレポーターの情報交換に供する e メールアドレスが実現し、このほど送受信できるようになりました。フィールドレポーターの声と活動が博物館に認められたのでしょうか？

これで、フィールドレポーターのみなさんの交流の場が一段と身近になりました。 どしどし情報を交換しましょう。

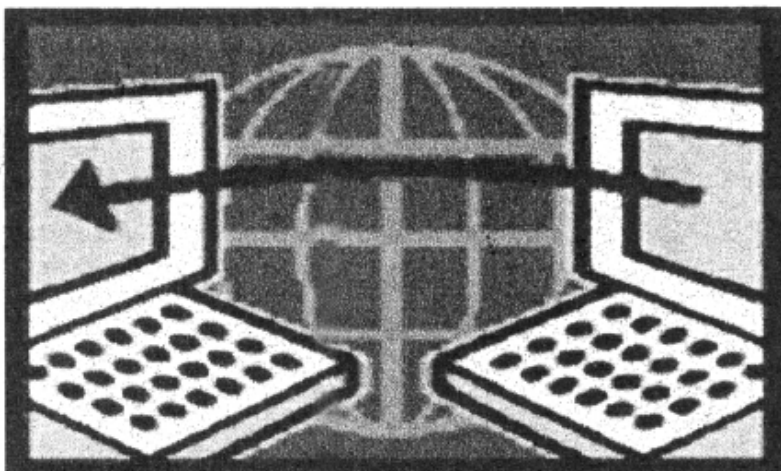
但し、生まれたばかりの交流手段なので、活用方法や詳細なきまりなどについてはまだありません。 良案を検討して逐次お知らせしたいと思います。 ご意見、ご要望などもお寄せください。

まずは、フィールドレポーター掲示板へメールで投稿することが出来ますので、表題、投稿日、名前を入力して、本文を書き込んで送信してください。

ワードなど、添付ファイルで送信して下さる場合の形式は従来どおりですが、基本的には A4 用紙で、余白はなるべく左、左ともに 30 mm、フォントサイズは 12P で入力して送信していただきますと、編集し直さなくてもそのまま掲載することができます。

なお、写真、イラスト挿入なども大いに歓迎しますが、ご承知のとおり掲示板はカラー印刷ではありませんので念のため。

e メールアドレスは freporter@lbm.go.jp です



フィールドレポータースタッフより

「庭を訪れた蝶の調査」終了

プロジェクト・リーダー 森 擴之

2003-9-20

今年の夏は雨が多く、8 月にはいっても梅雨が長引いているのかと思われる天候が続いたかと思えば、9 月入って一変連日 30 を越す真夏日が続き、虫たちも戸惑っているのではないかと思います。 それでも、今年も夜になるとアオマツムシの大合唱が聞かれるようになりました。

4 月から 7 月まで 4 ヶ月間にわたり、多くのレポーターの皆さんのご協力をいただき、実施してきました「庭を訪れた蝶の調査」も終了いたしました。

最終的に 53 名のレポーターの皆さんから、延べ数にして 370 件の報告をいただき、添付して頂いた写真 46 枚、お送り頂いた標本 31 件となりました。

調査開始当初、お送り頂いた標本に関しては、同定会を予定いたしておりましたが、お送り頂いた標本数も僅かでありますことならびに標本の状態が必ずしも良好とはいえませんが、同定会は中止いたします。 ご了解ください。

調査結果は現在集計中でありますので、まとめ次第、レポーター便りにて、報告させていただきます。

ところで下の写真は調査期間中に撮影したものです。 A 列が蝶の幼虫、B 列はさなぎ、C 列が成虫です。 それぞれの親子関係はランダムに配置してあります。 正しい親子関係を推定して見て下さい。 (正解は次号)

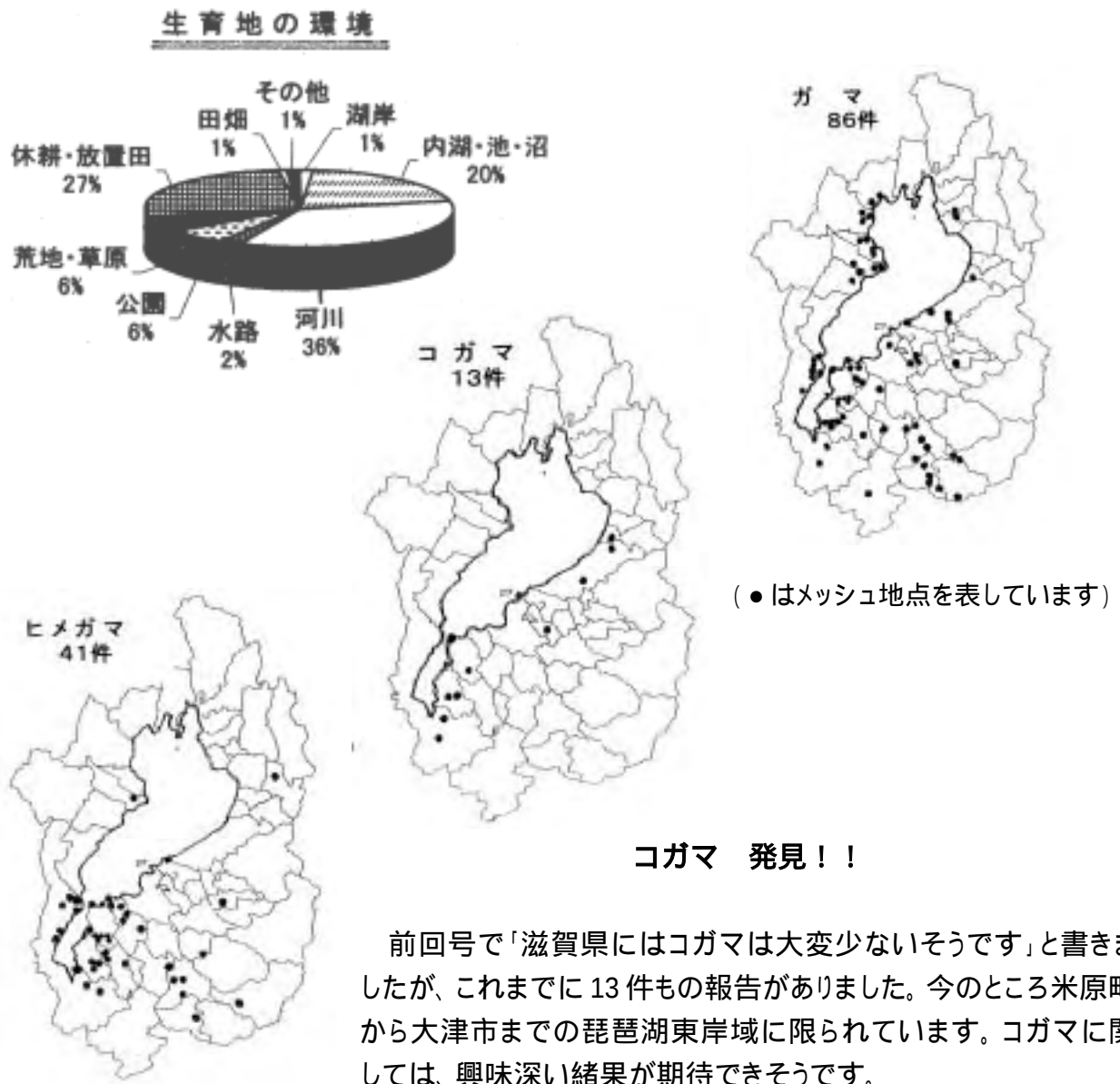




ガマ調査速報 9・20

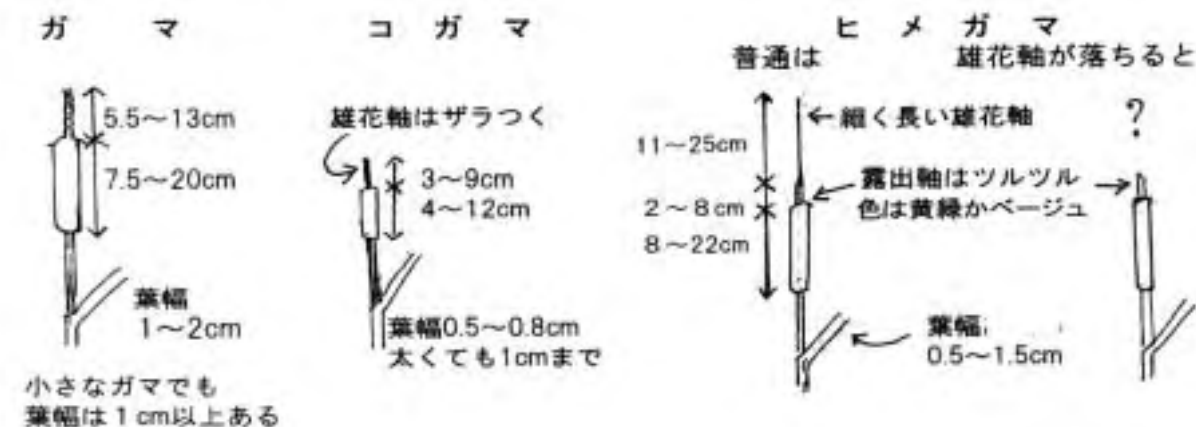
まるで夏がひと月遅れて来たような暑さですが、いかがお過ごしでしょうか。「ガマを探そう」調査も、期間の半ばを過ぎました。初めは『なじみの薄い植物をうまく見つけてもらえるだろうか』と心配しましたが、9月4日現在「生えていた」140件、「見当たらない」24件の報告をいただいております。気をつけて見ると、ガマは結構あちこちに生えているようです。

ガマ類が生えていた場所 【中間報告】



秋になって種の見分けが難しい！！

遅く(7月頃)に花をつけたガマは、穂が小さく葉幅も細めで、コガマでは?と迷います。ヒメガマは雄花群の軸が折れ落ちていて、葉が細いためにコガマと間違いそうです。これからの観察は「葉幅が太いか、細いか」「雄花群が付いていた軸か、雄花群と雌花群を隔てていた露出軸か」に注意して観るとよいでしょう。



質問コーナー

Q 「蒲生郡」或いは万葉の時代の「蒲生野」の“蒲”は、ガマのことでしょうか? (井上弘司さん)

A 蒲生野は、天智天皇が5月5日の端午の行事に薬獵(男は薬用にする雄鹿を猟り、女は薬草を摘む)をした場所として有名です。このことが書かれた『日本書紀』には、他所に「蒲生河」の名前もみえ、蒲生という地名はかなり古くからおったことがわかります。

さて質問に関して、『滋賀県の地名』(平凡社)には「郡名は植物の蒲が生える地であったことに由来する」と書かれていますが、残念ながらガマが生えていたかどうかを記した史料は見つかりませんでした。

前号の「蒲黄(まおう)」の項で明らかなように、“蒲”が植物のガマを指すのは確かだと思います。ただ、調べた限りでは、「蒲生野」はガマが生えるような湿地帯でなく、水利が悪いために農地開発が遅れ、原野が広がる場所だったようです。

*万葉の蒲生野は「雪野山(八日市市西端)の北東に広がる平地一帯」とする説が有力。

お出かけ先での報告もたくさんあり、各地の様子から、自然や社会状況が見え始めてきました。気になるのは八目市~日野にかけての旧蒲生郡と、湖北地域です。期間は10月末までです。涼しくなったら、観察にお出かけください。

(文 前田 雅子)

フィールドレポーター交流会特集

今年度第2回交流会が、去る8月23日(土)に湖北地方の伊吹文化資料館で行われました。琵琶湖博物館から3人の先生方とフィールドレポーター14人の合計17人が参加、伊吹文化資料館からは学芸員、友の会会員の方々7人にお世話頂きました。

そして、交流会に参加されたフィールドレポーターの方々から、感想を寄せて頂くことが出来ました。その感想文のすべてをここに掲載して、参加できなかったフィールドレポーターのみなさんにも雰囲気味わって頂きたいと思います。

また、この感想文を読まれまして次回の交流会への参加に興味を持っていただければ幸いです。



フィールドレポーター交流会に参加して

030910

守山市 北側 忠次

8月23日(土)夏らしい快晴の空の下、県のバスが琵琶湖博物館を出発した。時間に余裕があるのとのごとで、運転手さんのご好意で、伊吹町までは西の湖、伊庭内湖、彦根城内、醒ヶ井地蔵川を經由して下さいました。そのおかげで、大中の干拓地が湖面の水位より低いことが実感できました。短い時間ではありましたが醒ヶ井では、白い花が満開のバイカモや水槽で飼育中のハリオを観察できました。

伊吹山文化資料館において現在では使用されなくなった古い民具や農機具がよく整備され、今でも動かせる状態で展示されていた。その使い方の説明も友の会の皆さんが実際にその器具を使用しながら説明されるので、とても理解しやすかったです。

友の会会員の方に高齢者が多いので、この友の会の活動をどのように次の世代に引き継ぐのかが、気がかりとなりました。

特に植物を見るのが好きな私にとりましては、伊吹山の植物が多数紹介されているので、大変参考になりました。また、牧野富太郎氏が植物調査のため、この地に長期滞在されたときに書かれた書などが展示されており、感慨深かったです。

とにかく、有意義で楽しい一日を過ごすことが出来ました。次回も是非とも交流会に参加したいと思います。

館外 交流会に参加して（8 / 23 バスにて）

野洲町 大町 千恵子

びわ湖博物館午前 9 時出発、途中、国道沿いの休耕田で現在観察中の小ガマを発見したり、米原町醒ヶ井で清らかな湧水で育つバイカモを見ながら目的地伊吹町立伊吹山文化資料館に到着。

資料館と言えば大体、物品が並べて陳列してあるだけの様に思っていたが、当館は、学校の統廃合で学校としての役目を終えた建物を活用し、ボランティアの方々の手により古民具の展示や、当地の伝統行を人形等で再現してありました。

ボランティアの皆さんが、館の運営にも積極的に参加され、来館者に、展示品の説明や、昔の遊びを子ども達に教えておられるそうです。皆さんとても生き生きと、活動されていました。

でも、伊吹地方にだけあったと言うめずらしい石臼を作る方や、麻の撒物を織る人が、今ではもうおいでにならないとか、伝承していく難しさもお話されていました。

私達の活動も報告され和やかな交流会になりました。

私は、昔は何処にでもいた動物や、植物が段々隅に追いやられていく姿を、リポートしていましたが、もう一步踏み込んで自然を考える大切さを身に着けたいと、この交流会に参加させてもらい、元気を貰った気が致しました。

伊吹山文化資料館の職員の方々、ボランティアの皆様有難うございました。

以上



話しには聞いていましたが、伊吹山文化資料館の収集品のほとんどが民具であることに改めて驚きました。

よくもこれだけ集められたものだ。 かつてこの伊吹の家々で日常使われ、生活の用品としていつも手元に在った品々が所狭しと並び、ひしめいている様を実際にこの眼で見たとき、わたしは有り難い、これでわたしの記憶を取り戻せる場所が出来たと快哉を叫んでいたのです。

野洲川の下流の地で育ったわたしの家に在った道具、親父が畑仕事で使っていた物、その効用を教えられた物、夜なべにお袋が手にしていた針仕事の道具、地下(じげ)の作業で集まった男たちが手にしていた物、田植え、草取り、稲刈りなどに使っていた物、杣師の人達が樹を伐る時に使っていた物など、わたしが子供の頃に目にし、また実際に使った物など、あの子供の日のすべてがいまわたしの前にそっくりそのまま在るではないか。これは稀有なところだ、近江の農村に生を受け、成人して老境に入るまでこの地から離れたことのないわたしが、じぶんの存在を確認できる拠り所となるところだと思いました。

どのようにしてこれらの民具がここに集まり保存されたのか、学芸員の高橋さんをはじめ、伊吹山文化資料館友の会のみなさんから、その経緯、過程をお聞きして、この伊吹の方々であったればこそ、これだけのものを守って頂けたのだとの思いを強くしていました。

これだけ多くの民具のそれぞれの使い方を、いま的確に説明できる方はもうそんなに多くは居られないのではとの思いがよぎり、その手立てとしてなにがあるのか考えさせられていました。ひとつの民具について、それに詳しい方の情報を集める・その方々にその民具を実際に使っていただき、動かして話してもらう・それを写真・VTR・テープなどに収めることなど、記録することが必要不可欠ではないかと考えていました。

そのための予算がとれない場合、ではどうするか？ ここに伊吹山文化資料館友の会の存在に期待がかかり、これまでそうであったように、会員の方々の叡智とパワーがそれを可能にして、収集保存の最後の仕上げとしての記録が完了するのではないかと考えていました。若い世代にはすでにこれらの民具は、異国のアンティークな品と同等に見えているのではないか、ならばどんな風にしてそれを使い、それによって出来たものはなにか、などの検証が出来る場であって欲しい。伊吹山文化資料館がそういう場所になる日の近いことを願いながら、帰りのバスから伊吹の山頂にかかる雲を眺めていました。

伊吹山文化資料館の交流会に参加して

03.09.16

草津市 山崎 千晶

8月23日、フィールドレポーターの館外交流会としては三回目となる(三島池野鳥観察会・五個荘町へちま交流会に続く)今回は、滋賀県の最高峰、伊吹山 1377.3m の懷に抱かれ、豊かな自然に恵まれた春照(すいじょう)の廃校を利用した伊吹山文化資料館での、総数 24 名による交流会でした。

フィールドレポーターとしては初めてのバスによる移動で、西ノ湖・大中遺跡・牛糞堆肥・葦・水・車・伊庭内湖・愛知川・平野と護岸堤・滋賀の景観・天井川・彦根城・ヒメガマの生育適地・醒ヶ井・バイカモ・天野川の蛍・山室湿原(鷺草・鶉章・笹百合・モウセンゴケ・ハッチョウトンボ)などなどの案内と説明に、ふだんの行楽ではまず体験できない、琵琶湖博物館ならではの知的収穫に、一同とても豊かな気分を満たされていました。

伊吹山文化資料館のテーマは伊吹山地と山麓の自然と文化」。友の会に登録されている 25 名の方と学芸員さんによって、資料展示・管理・調査・収集・文化伝承や学習支援の活動をなされていました。

昼食後に館内の展示を見学、展示は遺跡・民具・風習・文化・自然といろいろの分野にわたって多くの資料がわり、その中でかつて伊吹の特産品であった石臼の実物に触れ、その原石の切り出しから、完成品にいたるまでの製造工程を目にして、今はめったに見られない石臼の伊吹産の石臼は材料を落す穴が四角であることなどを、初めて知りました。

戦前・戦後を体験された「資料館友の会」の方々の解説や、活動内容をまとめられた年報から、私の知らなかった、この地方にどっしり根を据えて生活しておられたひとびとの知恵の素晴らしさを感じていました。

短い時間では全ての展示内容の隅々までは目が届かず、なんども来てもっともっと、伊吹のあれこれを知りたい所です。

帰りには「ミルクファーム伊吹」で、そのボリュームたっぷりのアイスクリームに、みなさんとこれはお買い得品だとにんまり、満たされたひと時でした。

ついで、三島池野鳥観察館に立ち寄り、米原インターより帰路につきました。

楽しくて盛りだくさん、すごく得した気分の日でした。

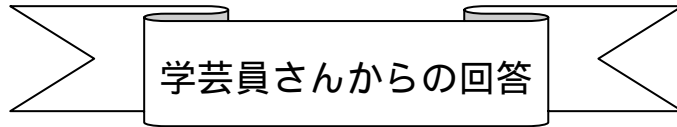
伊吹山文化資料館の皆様と、交流会の計画に携わって下さった方々にあらためてお礼を申し上げます。

表 題【 黄色い首の鳥の名は？ 】

投稿日【0307 29】お名前【大津市町村 N. H】

7月26日前の青田にコサギが2羽飛んできました。水の抜かれた田んぼで何を食べているのか、長い首を出たり引っ込んだり、しばらくして湖の方へ飛んていきました。同封の写真のサギの名前を教えて頂きたくて、これを書いています。7月1日、ひどい雨の中、4羽のサギ2組が飛んできました。1組は確かにコサギでした。もう1組のサギは首が黄色で手元の図鑑では判りませんでした。随分長い時間羽を休めていたのか、田んぼに下りたのはほんの数分間の時間でした。





専門分野:鳥類学
亀田 佳代子さん

【黄色い首の鳥の名は？】

こんにちは。博物館の亀田です。

首の黄色いサギの名前ですが、「アマサギ」です。

お写真では、木にとまっている 2 羽と、田んぼから頭を出している 1 羽がそうですね。飛んでいる鳥の種類は、ちょっとわかりませんでした。

アマサギは、日本でよく見られるいわゆる「シラサギ」の中では、唯一、繁殖期に頭から首にかけてオレンジ色に変わるサギです。夏鳥で、他のサギに比べると、少し乾燥した場所を好み、昆虫やカエルなどをよく食べます。田んぼでトラクターの後ろをついて歩いているシラサギがいたら、このアマサギであることが多いですね。

英名は「Cattle Egret」=「ウシサギ」といって、ウシなどの大型の動物について歩くことからこういう名前がついています。なぜトラクターやウシについて歩くのかというと、トラクターが土をおこしたり、動物が歩いたりすることで、地面から飛び出したバツタなどの動物を食べるためといわれています。動物の場合は、アマサギが動物そのものに乗っていることも多く、動物にたかるハエなどの昆虫も餌としています。

亀田 佳代子 Kayoko KAMEDA

滋賀県立琵琶湖博物館	Lake Biwa Museum
〒525-0001	Orshimo1091, Kusatsu
滋賀県草津市下物町 1091	Shiga 525-0001, Japan
Tel. 077-568-4811	Tel. +81-77-568-4811
Fax 077-568-4850	Fax +81-77-568-4850
kameda@lbn.go.jp	http://www.lbn.go.jp

表 題 [気になる樹 その2 タラノキ]

投稿日 [20030505]

名 前 [彦根 加固 啓英]

7年ほど前、荒神山の道路整備の為、引き抜かれ、捨てられていた長さ 15cm ほどのタラノキ *Aralia elata* を持ち帰り庭に植えました。

次ぎの年は目だった生長もしなかったのですが3年目には突然猛烈に生長し、アレヨアレヨと見守る内に 3.5m 程となり、一見「目出度、目出度のタラノキ様よ、？ 枝も茂るし、葉も茂る」状態となりました。

冬枯れの後に見ると、不覚にも枝と思っていたのは特大の複葉で、天に向かって刺だらけの柱が一本立っているだけでした。 年毎に次ぎ次ぎと根際から生えてくるので、タラノメ(正しくはタラノキノメ?)を食べましたが、言い伝えられる様に、同じ所から生える芽を 3 回つむと幹まで枯れました。

普通の樹木ですと、相当大幅に切り詰めても待機していた不定芽が、空いた空間を先を争ってこれ幸いと埋め尽くすのですが、タラノキの不定芽は早々に茶色く枯れてしまい、樹冠や枝先のダメージが命取りになるように見受けられます。 但し、そう心配しなくても、次ぎの年には周囲の根から沢山の若木が生えてくる様です。

Apr/20/2003 に地上 115 cm で切り詰めましたが、切り口の直径は約 60 mm 年輪は 6 筋で心材と辺材の間にはっきりした黒い筋がありました。 高さはおそらく 5m はあったと思います。これを切り詰めるのは、かなり恐ろしい作業でした。 幹は軍手でも持ちにくい刺だらけで、隣家に倒れ込まないように気を使うと、その刺が顔を狙って迫ってくるのです。

タラノメというよりは枝葉に近いような部分を天麩羅にしましたが、見かけによらず軟らかく美味しく食べられました。

ところでタラノキは樹木なのでしょうか草なのでしょうか。

学名が *Aralia* の物を列記すると

Aralia elata タラノキ、*A. glabra* ミヤマウド、*A. cordata* ウド等が挙げられます。 これらは草のように見えますが、タラノキには年輪もあり「独活の大木」の言葉もあることから、今回は樹木ということとたしておきましょう。

お手数お掛けしますが、布谷さんに、草か木か、草本・木本の定義についてお教え頂ければ大変有り難いのですが...(本にある、無味乾燥な説明より布谷さんに伺った内容のほうが格段に印象に残るのです)。

木と草の違い

「気になる木タラノキ」について

残念ながらこればかりは無味乾燥な返事しか出来ないのですが、木と草の区別は簡単で、「肥大成長するものが木、しないものが草」ということになります。

実はこれは木と草の定義を説明しているだけなのです。草本では細胞分裂をして生長する部分は茎の先端だけしかなく、伸長成長はしますが、肥大成長はしません。つまり背は高くなりますが、太ることはしません。木本では樹皮の下全体に細胞分裂をする層(形成層)がありますので、肥大生長と伸長成長の両方をします。肥木生長するということは、四季の変化のある日本では年輪ができるということです。タラノキに年輪があって、毎年太ってきたということは、タラノキは木本であるということです。

木か草かというのは、なかなかわかりにくいところがありあす。タケはどちらか、というのは結構問題になりますが、この定義からすると、タケは地上に出てきたタケの太さが、大きくなったタケの本さで、それ以上は太らないので、草ということになります。ヤシの仲間も、肥大生長はしないので、固くて背は高いですが、草本ということになります。

本当に問題なのは、例えば菊のように年輪ができてしまうものです。キクは本質的には木なのでしょう。栽培しているキクでも霜に当てないで育ててやると何年も生長し続けているのを経験された方は多いでしょう。コウヤボウキなどは背は小さいですが、地上部は2年間生育して、明らかに(本当はぜんぜん明らかではないのですが)太りますので、木です。ツル植物にはよくわからないものがあります。クズは明らかに肥大成長をしています。クズは木です。もちろんフジも木。植物図鑑で保育社や平凡社のように、草本編と木本編とが分かれているものがありますが、調べてみると見解が異なるものがあります。やはりなかなか難しいことです。(布谷)



木の本 萩原信介・高橋登志夫 福音館書店 より



表 題 「今年はコウガイビルの当たり年？」

投稿日 「030806」

「大津市日吉台 有田 重彦」

掲示板通巻 26 号に、門脇さんが前報 25 号のジンガサハムシに続いて『へんなによろによろむし』のことを投稿されていました。

金色のジンガサハムシについては、私も偶然見つけたので写真を撮って今回投稿しましたが、「へんなによろによろむし」についても、6 月 7 日に畑を掘り起こしたときとジャガイモを掘り起こした 7 月 17 日、土の中に黄土色の細いミスジコウガイビルを合計 5 匹見つけたので写真を撮りました。忙しくて今あわててまとめたところですが、昨年秋にも自宅でクロイロコウガイビルを見つけ、掲示板に投稿しました。

黄土色のコウガイビルは写真のように三本の縦筋が頭部から背中についているのでミスジコウガイビルと思われ、半円形の頭部幅は 5 ミリほどですが長さは 25 センチから 75 センチのものまでいました。門脇さんが見つけたコウガイビルは、何色か分かりませんがクロイロではないように思われます。また背中に 3 本の筋があるようなのでミスジのほうでしょうか。

写真 1.

ミスジコウガイビルの
頭部(1 目 1 ミリ)。
円形部先端に視細胞
の黒点が不規則に点
在するがこの倍率では
見えない。



75 センチのヤツは、しっぽをつまんで身長計測後、土を入れた径 10 センチほどの丸いプラスチックのケニスにもつれた状態で入れたのですが、30 分ほどして見ると背中を見せてもつれは解消され平面的な一塊になっていました。畑で見つけたときも平面的な一塊でした。

博物館の楠岡さんに拡大鏡で調べてもらおうと、半円形の頭部先端に沿って黒点が点在しており(写真の 8 倍拡大では判らない)、目がないコウガイビルの頭部に視細胞という原始的な目のある事が確認できました。

口は腹にあるとのことなので、餌のカタツムリの代わりにナメクジを入れてみたのですが、一寸意識したのか頭を逃げるように振った後すぐ無関心状態になりました。ナメクジは餌と認識しないのか捕食状態の観察は失敗でした。

夏休みになり孫に庭の竹落葉の掃除をさせていたら「これミズ？」と聞くのでみるとこれが長さ 7 センテくらいのクロイロコウガイビル、しかも同じ大きさのものがもう 1 匹見つかりました。去年秋に見つけた 15 センチ級に続いて 3 匹、我が家の庭にはコウガイビルの巣でもあるのでしょうか。家の土地は丘陵地帯を平らにした大規模造成地なので、その原土の生き残りか、あるいは竹、はらんなどの移植時に、根土にまぎれこんできたものなののでしょうか。それにしても 10 数年たつて見つかるのが腑に落ちませんが。

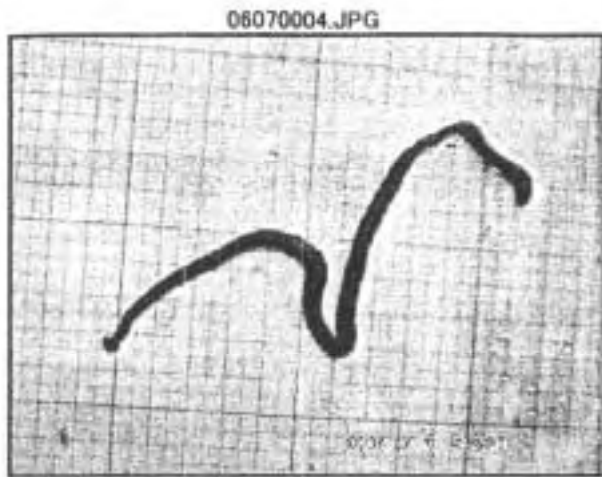


写真2. 全体写真(全長約 20 センチ)

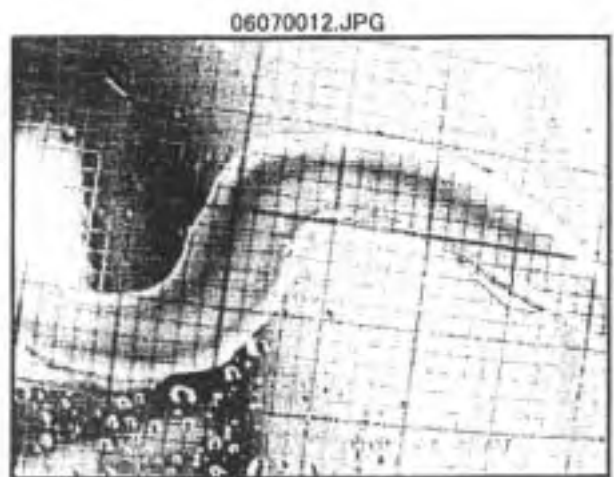


写真3. 裏から見た腹部:口は見えない

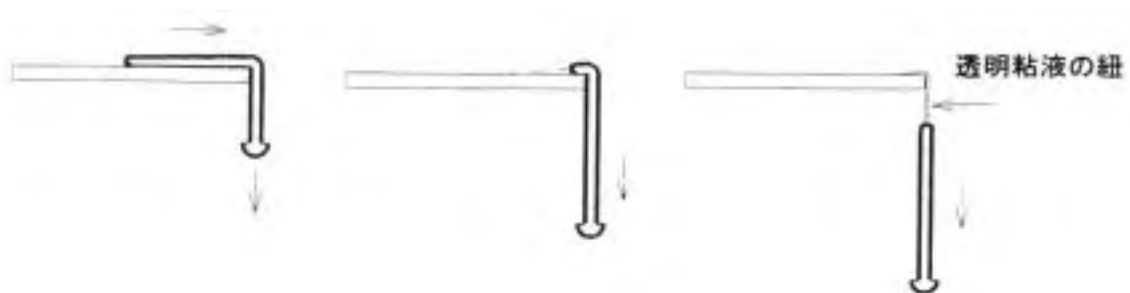
このコウガイビルでは粘液降下の実験をやってみました。 時計皿の上に果せると端に向かって直進し、端に来ても躊躇なく頭のほうから 90 度折れ曲がって降下を始め、あと少しになっても同じペースで降下し、転落かと思った瞬間、直径で0.5ミリから1ミリという感じの透明な釣り糸状の紐で時計皿から尻尾まで繋がっていました。 紐はどんどん伸びていって自分の体長と同じくらいの時、尻尾部分が急に細くなって切断、落下してしまいました。 粘液がなくなると反転してよじ登るそうですが、それは失敗したことになるのでしょうか。

記録写真を撮るために再実験を後日と思っていたのですが、容器の雨水漏れで死なせてしまいました。 もう一匹は、ハランの茂みに放してあり、またの機会と思っています。

門脇さんは自切実験をやられたことになりましたが、尻尾のほうは再生したのでしょうか。 結果が判ると楽しいですね。

博物館の大塚さんもコウガイビルをちょくちょく見られるそうですが、今年の異常天気は異常な生き物(?)を異常繁殖させているめでしょうか。

コウガイビルの粘液降下実験説明図



- (1) ガラス板の端に来ると そのままの速度で 垂直降下
- (2) 落下寸前まで降下が 続く 粘液紐が出来 始めているようだ
- (3) 落下の瞬間透明粘液 の紐でぶら下がり 紐が伸びて降下する

専門分野:生物多様性学

マーク・ジョセフ・グライガーさん

【コウガイビル見つけました】

前号 7 月発行の 2003 年度第 2 号に掲載しました大津市の門脇きみ子さん投稿の表題【へんな
によろによろ虫】の中で、これは何でしょうか?教えて下さい...とありましたが、グライガーさんから以
下のような回答を頂きました。原文をそのまま貼り付けます。おおまかなことは理解できますが、
普通の英和辞典には出てこない専門用語もあるように思いますので、そのへんは楽しみながら訳
してみてください。

From: Miss Miyuki Kawakatsu

To: GRYGIER Mark J.

Dear Dr. Grygier

Thank you for the copy of Ms. Kadowaki's short note on a
Bipaliid specimen taken from the Field Reporter, no. 36. according
To the observation of the collector, it is a vely long-sized
Animal (40cm long and 2-5mm wide) that having a yellowish
Coloration. Judging from the photograph of a living specimen, the
Animal has longitudinal stripe(s?). Patterns on the head plate and
“neck” cannot be clarified from the copied photograph.....

1). Bipalium kewense is usually more small than the specimen from
Otsu in question. Moreover, this cosmopolitan species has a limited
Distribution ranges in Japan....

2). Bipalium multilineatum is also more small than Otsu specimen.

3). Bipalium nobile Kawakatsu et Makino. 1982, attained 100cm or
more in length when elongated. This species is now found in
various areas in Japan. It is highly probable that the Otsu
specimen may be B.nobile..

表 題 「我が家にも金色のジンガサハムシが」

投稿日「030723」

「大津市日吉台 有田 重彦」

前回の通巻 25 号掲示板に、大津市の門脇さんが金色の小さな虫を見つけたとの記事があり、主任学芸員の八尋さんから、ハムシ科のジンガサハムシまたはその仲間という鑑定コメントが寄せられていました。

ところが 7 月 11 日、我が家の勝手口の床上に金色に光るものがあるので、小さなボタンかなと思って指先でつまもうとしたのですが、半球形の天道虫みたいに指先では沿ってしまい、紙の端ですくって取り上げた次第です。

よく見ると、四本の手足がついた孵化したての亀の子そっくりの金色模様が、陣笠状の透明な甲羅(甲羅の端のほうは平らになっていて陣笠の形を想像させる)に描かれているのにまずびっくり。続いて陣笠の端から手足と触覚が出てきて歩き出したのにまたびっくり、次にシャーレに入れて裏を見ると六本の半透明の手足と 10 節からなる触覚、それに頭の黒く大きな複眼、そして亀の甲部分が胴体からなる昆虫で、四本の亀の手足は透明の甲羅に黒っぽく塗装されているだけの擬態らしいことにさらにびっくり、最後は天道虫のように羽を広げて飛び出す始末に最後のびっくりでした。

門脇さんは手書きで虫の特独を分かり易く絵にされていましたが、デジカメで接写した写真は下のとおりです(カラーですと光を反射する金色が見事です)。

シャーレの中で数日様手を見たのですが、我が家の庭には、その食草とされるヒルガオは植えてないので、桜(この葉は好物とする虫が多くて葉っぱは虫食い痕が沢山あります)、葡萄、紫露草、トマトの葉っぱ、それに蜂蜜とバナナを与えてみましたが、みなそっぽでした。7 月 16 日、八尋さんに引き継いでもらったのですが、まだ元気でシャーレの中を時々元気に歩き回っていたので、どれかを少し齧っているのかも知れませんが、糞が見えないのが気になります。

この虫は木の本観音のお堂でも見つかったそうですが、その赤みがかった、くすんだ金色は、何百年も前の木製仏俱に貼られた古い金箔を連想させるので、なんとなく、高貴な虫、有難い虫との思いがします。仏像を保護色にしている虫というのは考え過ぎでしょうか。

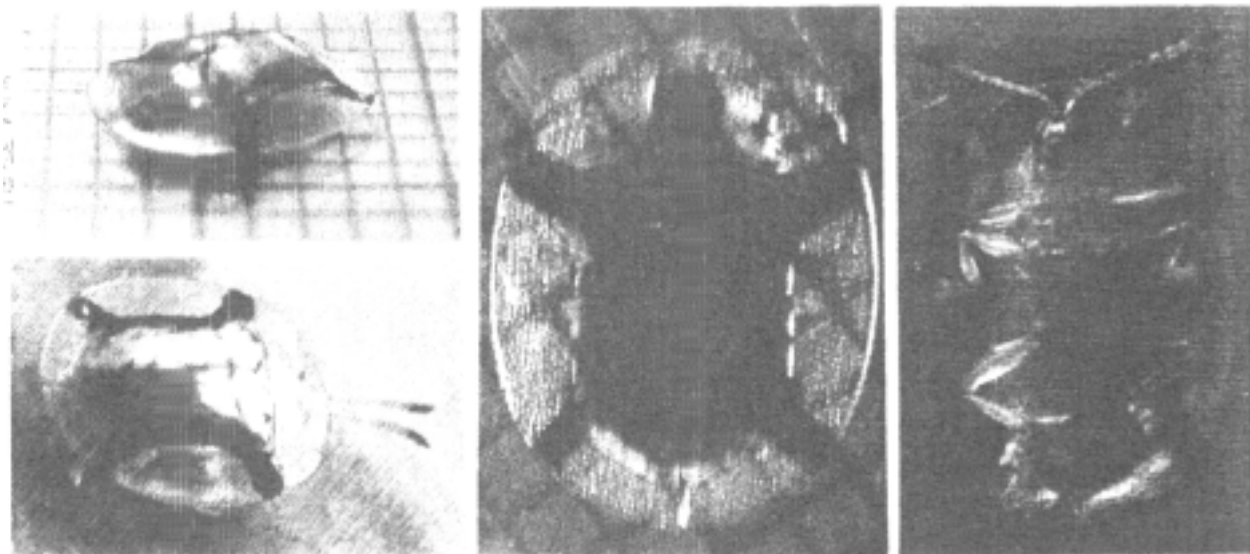


表 題 [2003 年・今年の稲作は]

投稿日 [030820]

名 前 [加固 啓英]

昨年収穫の種籾を不用意に使用してしまい、2000 年収穫の古い種籾から苗を育て、ようとしたが発芽しませんでした。 種子はタイムカプセル的に安定したものかと思っていましたが、稲作の経験のある人に聞きますと、種籾は以外にセンシティブで保管には相応の注意が必要だそうです。 今年は何じめて稲作農家で余った苗を頂いて育てることになりました。(ササニシキだそうです。 以前のは、落ち穂を種籾として代を重ねた為、種は不明でした)。

縄文末期には既に水田稲作は行われていたとされています。文字も暦も温度計も空調もなかった時代に、代々絶やすことなく稲作を続けて来た縄文人には現代は忘れ去られたアルゴリズムの様なものがあつたのでしょうか。 私が縄文人でしたら間違いなく餓死していた筈です。

昨年までの発泡スチロールのトロ箱水田から、押し入れ用の衣装ケース水田に変えました。水深も深くなりましたのでオタマジャクシ、メダカその他の小魚、タニシ等も入れ、にぎやかになりました。 筋力で空を飛べる事は非常に有利ですね。 他の動物が連続しない飛び地のニッチに移動するのは命懸けの大旅行の筈ですが、上空から鳥瞰し狙いを付けて、アメンボウ等は飛来し、トンボ等は産卵にやって来るのですから。

生き物を放した為「中干し」が出来なくなっていました。そのせいか、「雨降りや低温が続いたせいか、苗作りに精を出さなかったせいか、初めて枇(シイナ)が発生してしまいました。 穂は出ていますが、かなり稲が倒れ掛かっています。 やはり中干しの「稲の根に湯を入れる」働きは大したものです。



表 題 [乾電池が再生出来ました]

投稿日 [030912]

名 前 [加 固 啓英.]

乾電池の再生は琵琶湖や生物環境に関係あるかどうか？ → 投稿の趣旨に沿うかどうかは分かりませんが、「風力と桶製造界の景気動向」程の関連は有りそうなので投稿、します。私は「電気音痴」なので、電気に明るい方の追試や理論付けをお願いしたいと思います（発生するリスクについては補償・安全保証は出来ません）。

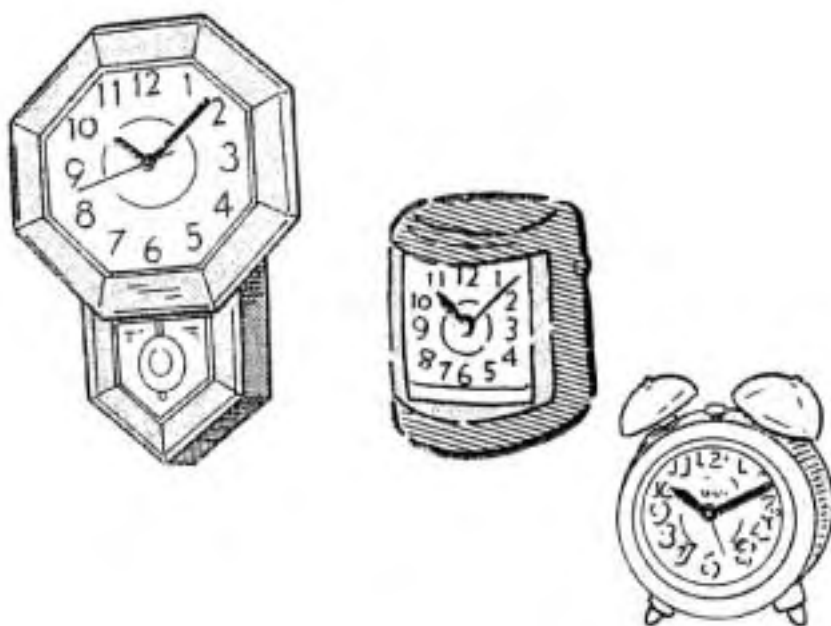
掛け時計等で、小電力・長期間をかけて放電しつくした乾電池は、インターバルをとり十分に休ませても起電力の回復は、ほとんど見込めません。

テレビのスイッチを on、off するとブラウン管のガラス面に静電気(電子か正孔かは不明)が溜まります。しかしガラスは良導体ではないので、これに触れてもたいした電気ショックは感じられません。しかしガラス面に料理用アルミホイルをセロハンテープで張り付け、これに触れると強烈なショックを受けます。

十 の掛け時計(クォーツでない電動式)で放電しつくした乾電池のマイナス極側(突起の本い平面側)を の帯電したアルミホイルに、ゆっくりと近づけて触れさせることを繰り返すと電池の起電方が回復するのです。

乾電池のプラス極側で同様にしたのは、どうも壊れてしまったようで、アルミホイルに溜まっていたのは電子だったのでしょくか？

こうして全く動かなくなり、電池を取り出し、時計の接触部を磨いて再度入れ直しても動かなかった掛け時計の電池をこの方法で再生したもので、現在まで4ヵ月の間、狂いもなく時を刻んでいます。



有意義な一日：「伊吹山文化資料館との交流会」に参加して

草津市 椋島 昭紘

残暑が厳しい8月23日、フィールドレポーター(FR)の交流会に参加しました。

「伊吹山文化資料館」まで、県のバスに乗って、琵琶湖博物館から出発いたしました。このバスの利用については何かと制約があると聞いておりましたから少し不安がありました。FR 担当の宮本さんのご気遣いもあり、運転手の方がとても親切で、道中のこともよくご存知で、西の湖辺りの観光案内までしていただき、退屈することも無しに目的地に着きました。

伊吹山文化資料館は伊吹町の活性化事業の中で、廃校になった春照小学校分校を活用する事業から出発したそうです。春照(スイジョウ)は伊吹町の中で一番大きい集落で、分校の名は大きい集落には違和感がありました。

資料館を作るにあたり、町内方中心のボランティアで友の会の組織をつくれ、その方々が中心になって展示内容企画、展示品の持ち込み、展示作業を担当されたそうです。

平成10年3月開館され、開館に努力されたメンバーが今度は友の会として現在も運営にも協力なさっている、まさに町民の方に支えられている資料館です。

今回の交流会には、この友の会の方は文化財講座に参加しておられて活動なさっています。会員25名の中から会長さんを始め7名の方が交流会に参加していただきました。

FRの活動報告、友の会の活動報告を交換し、館内の案内を一緒に説明を受けながら回りました。その雑談中でご苦労話も伺いましたが、総じて自分の子供を育てているというような温かみが感じられました。

FR活動についても意見交換しましたが、FRの活動内容については関心を持っていただきましたが、博物館からの距離が離れていることで、関心までも遠のくのかなと感じました。ぜひ、FRに参加して湖東北の情報発信を、お頭いいました。

やはり、各地での交流会を開催することは、今回のような別の団体で活動されている方々に、FR活動を知っていただくことで、県下広くの方がFRに参加していただくためにも、大切なことと感じました。

今回準備していただきました、スタッフの方、FR担当の宮本さん、バスの運転手さんどうもありがとうございました。

興味を持つ

平成 15 年 9 月 9 日火曜日

大住光生・大住純子

FR になり夫婦で初の夏「伊吹山文化資料館」交流会また琵琶湖博物館 FR の方々との交流、現在何にでも興味を示したことは行動することと考え知識無くも行動する事により多方面にわたる物の見方、考え方が出来るのではないかと、積極的に参加させていただきました。

往路走行車中宮本学芸員の近江(滋賀県)の歴史的地形、地層の解説、特に各河川が天井川になっているのは世界でも珍しい、人々は洪水との戦いではないかとの解説は今までの見方、考え方を一篇された。

ガマグループの前田さんの得意即妙な解説、説明参加 FR の観察力(車中から目的のガマを見つける)の鋭さにはビックリ農家にはすぐ根を張り蔓延る、困る植物と解釈した。

伊吹文化資料館との交流会ではボランティアの会長の「和」「協調」を大切に話された説得力ある話し、小学校 3 年生の年間授業の中に組み込まれ、ボランティアの方々が当地の各資料、各種伝統行事等を伝承されている。伊吹山の保護に関しては 20~30 年位前より伊吹山の笹を刈り虎姫高校の先生に草木の種(毒草は極力自然のまま)採取の指導を受け山に種まきをしてきたとの話しは自然を維持する難しさを感じた。妻はいつの頃から伊吹山に草木が在るのか尋ね「氷河期」位では妻の「体」硬直してビックリ年代を考えられない様子でした(自宅に帰り資料で調べて言葉です)。

妻は麻の織物に興味を示し質問当地域でも伊吹町だけは男女共に正装は夏冬共に下肢は麻の筒袴のような袴、上半身は紺かすりの木綿を着用する何故かは分からず。前々より古老に聞き取り調査をしたいと思っている。醒ヶ井の地蔵川源流湧水の鮮烈さバイカモ藻の美しさ、ハリヨの生命力の強さ地元の人々の自然を維持する姿勢を感じました。再度 4 日後共に伊吹山山頂駐車場まで車で行き上記の思いを感じながら「興味を示したら行動」を实践探索致しました。各お役の方々本当に目を覚まさせていただきました有り難う御座いました。

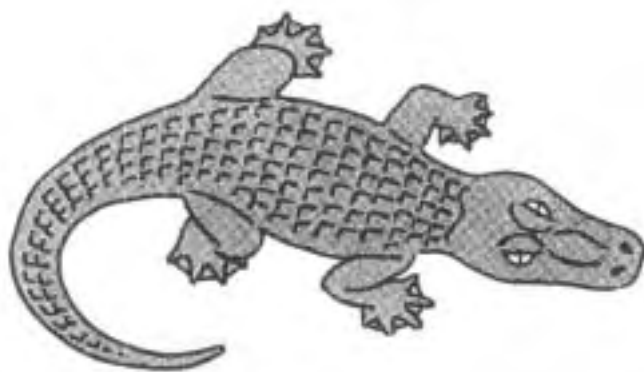


フィールドレポータースタッフからの一言

今年の夏は長雨、低温の影響で水泳場や山を始め屋外レジャーの利用者は例年に比べて少なく、映画館や屋内の施設などにシフトしたという、異常な夏の一面が報じられていましたが、9月は時期遅れの夏で暑いですね。

琵琶湖博物館では企画展、つれてこられた生き物たち「外来生物」が開催されていますが、身近な琵琶湖のブラックバス問題を始め、在来種が外来種に追いやられる現状、生き物の歴史や原産地、自然と生態系の保存の重要性など、私たち一人ひとりが関心を持ちそして、守らなければならない多くの事を教えられます。

昨今、捨てられたペットと思われる外来動物が頻繁に発見されている現状に、飼育していた人はその行為について真剣に考え直して欲しいと思います。



フィールドレポーター調査は今年度第2回調査「ガマ(蒲)を探そう」を実施中です。交流室の回答用紙入れをちょっと覗いて見たところたくさんの回答が届いていました。まだ、調査期間中ですがどれくらいの地域で「生えていた」の回答があるのでしょうか。締め切りまでまだ日があります。秋の涼しい日にでも探索してみませんか。

8月23日伊吹山文化資料館で開催の「フィールドレポーター交流会」に参加されたみなさんは湖北でのひと時を、それぞれの感覚で堪能されたようですね。

早々に、感想文をお寄せいただき有難うございました。

最後になりましたが親切な県の送迎バスの運転手さん、交流会場の伊吹山文化資料館関係のみなさま、同行していただいた博物館学芸員さんを始め、お世話になりましたみなさまに厚く御礼申し上げます。

担当は古谷でした

フィールドレポーター

掲示板



2003 年度第 4 号 通第 28 号(12 月)

宮本 真二(滋賀県立琵琶湖博物館)

早いもので、この掲示板は今年最後です。

いかがお過ごしでしょうか

今年のフィールドレポーターは、夏の交流会や 11 月のひとはくフェスティバルへの参加など、従来とはすこし違った活動を行いました。この活動の評価については、また時間を掛けて考えないといけないでしょうが、マンネリというものを避けるためには、新しい事はとても大切だと考えます。したがって、今年の活動は、新しさにおいては充分な一年ではなかったでしょうか？

11 月初旬にあるボランティア団体からの依頼で、災害に関するシンポジウムを企画し実施しました。最近では、都会に限らず田舎でも人と人の関係が希薄であることが指摘されていますが、この希薄さからの克服においても、ボランティア的な集まりとしての、我がフィールドレポーターもじゅうぶん可能性があるのではと感じています。でも、変えないといけないところは、よい意味で変えないといけないでしょうが...

私のように、故郷を捨て、巡り巡って近江に住み始めたモノにとって、日常生活の中で土地の人との交流はとても少ないです。子供が住むすぶ関係でもそうです。

このような意味において、フィールドレポーターの集まりもいいもんだ、と思えるようになったのは、どうやら歳のせいではなさそうです。

すこし早いですが良いお年をお迎えください。また、来年もよろしくお願いいたします。

フィールドレポーター12月・1月の予定をお知らせします。

12 月 6 日(土)	定例会:掲示板発行予定	於: 琵琶湖博物館交流室 13:00 ~
12 月 20 日(土)	定例会:	於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~
1 月 10 日(土)	定例会:	於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~
1 月 24 日(土)	定例会:	於: 琵琶湖博物館交流室 13:30 ~

稀に、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

「趣味の延長が仕事になった人間」 中井 克樹 さん(魚類生態学)

守山市 森 擴之



今回の学芸員紹介では、昨年度のアンケート型調査「ため池を調べよう」で終始ご指導いただきました、中井さんにご登場いただきました。

中井さんは大阪豊中の産で、物心ついたときには箕面や能勢の山々で捕虫網を振り回して、虫を追っかけまわしておられたとのこと。その後、幼稚園の時、ご両親に連れられて、南紀白浜の海岸を訪れ、そこでタカラガイを拾ったことから、貝にも興味を持ち始め、以後だんだんと陸棲の貝に染まっていかれた。

学生時代には比叡山麓のカツムリの変異を研究対象とされる一方アフリカ・タンガニカ湖に丸1年潜り続け、魚の繁殖生態について研究されました。

琵琶湖博物館では開館以前の平成4年以来、外来生物のカワヒバリガイ、オオクチバス、ブルーギルなどの繁殖や生態の研究を継続されておられます。

ご本人も「趣味の延長が仕事になった人間」とおっしゃっておられる通り、ご専門に關連して頼まれたら断れないご性格で、中井さんのデスクは執筆中の論文原稿やら依頼された投稿原稿の山で、ノートパソコン1台を置く場所もない状態で、どこで原稿を書かれるのか、インタビューの私には不思議の一語としか言いようがありません。

そんな仕事一途の中井さんですが、大津の自宅に帰られると、三姉妹のよきパパであります。

そんなわけで、今回のインタビューも時間を割いて頂くのもままならず、僅か5分程度しか時間を取れず、以降はメール・インタビューとさせて頂きました。

Q 幼い頃特に魅力を感じておられた蛾はなんでしたか？

子供に人気のある甲虫や蝶ではなく、蛾でした。 美しさに惹かれたからなのですが、そのきっかけを紹介します。

黄色の地に朱色と薄墨の模様を面相筆で細密に描いたような鮮やかな模様。翅(はね)を開いても4センチに満たない「スジベニコケガ」という小型のヒトリガ科の蛾です。



私が小学校3年か4年のとき、場所は大阪北部、能勢妙見山の黒滝道、小さな祠の灯りに飛来したと思われるメスでした。

その後、他にも美しい蛾がいろいろといることを知り、またその美しさも鮮やかな原色系だけでなく、

茶色や灰色といった地味なものでありながら、ワビ・サビにも通じるしっとりした美しさにも魅せられるようになりました。

そのワビ・サビ志向が、陸貝の美しさに心躍らせる素地となったのではないかと思います。

Q カタツムリの変異あるいはタンガニーカ湖の湖中での逸話がありましたら、ご披露ください。

「逸話」かどうかは人様に判断していただくとして、カタツムリに関する印象深い経験はいろいろとありますが、もっとも思い出深いものをご紹介します。

● 1980 年の秋、徳島県高越(こうつ)山でのこと

この山は日本最大のカタツムリ、アワマイマイの最大個体(殻径 6 km)の確認地としてよく知られたところ。乗り始めて間もない 250 cc のオフロードバイクで 11 月に出かけました。淡路島で低速の大型車を登坂車線を使って追い抜いたところ、生まれて初めて警官に止められる体験をしました。(幸い切符は切られずに済みましたが。)

高越山は以前車で連れてて行ってもらった時には、林道が極端な悪路で途中で引き返した経験があり、オフロードバイクなら何とかかなろうということで挑戦したところ、難なく山頂直下まで到着できました。寺の裏側で廃材を捨ててある斜面に狙いと定め、地面を掘り瓦礫をひっくり返す作業をひたすら続け、ついに死殻ではありますが巨大なアワマイマイを掘り出したのです。まさかそれほど大きなものが出るとは期待していなかったために、モノサシも持っておらず、即座に大きさはわかりませんでした、どうも 64 mm を超えているのではないかというほどの大物でした。雨が降り出す中、吉野川沿いのユースホテル～といってもお遍路さんだらけの札所のお寺でしたが～に投宿。アワマイマイが 64 mm をはるかに超えていることがわかりました。

さて、問題は帰路。大阪府豊中市の実家まであと 3 km ほどにまで達した地点。青信号でスタートしてゆるやかな下り坂を下ったところで、突然、左手から飛び出してきた自家用車の正面にバイクごと激突。速度は 80 km 近く出ていたこともあり、そのまま 25m ほど前方に飛ばされてしまいました。幸いなことに、着地の際に飛び込み前転のような体勢で両手を最初につきながら背中から道路に“着地”したため、背中に背負っていたザックがクッション代わりとなって、最初についた手の甲を少しすりむいただけで無傷でした。享故現場が偶然にも外科病院の真ん前で、警察が来てすぐに簡単な治療を済ませ、結局フレームの曲がったバイクに警察署まで自分で乗っていくというおまけ付きでした。

この顛末の間じゅう、私は背負っていたザックの中身が心配でした。そこに前

日に掘り当てたアワマイマイの殻を入れていたからです。おまけに大きいので、丈夫なケースに入れることもできていなかったのです。どの段階で中身をのぞいたのかは覚えていませんが、こわごわザックの中をさぐると、いっしょに入れていたカメラはレンズも本体も修復不能なまでにダメージを受けていました。しかし、アワマイマイの殻は殻口のあたりが少し欠けただけで、ほとんど無事でした。

事故は相手方の不注意(おまけに酒気帯びだったらしく、事故直後に運転者を実際の運転者と交替させたフシもある)ということになり、バイクは車体フレームを交換することになりました。車検の際にフレームに番号がないと修理屋に驚かれたこともあります。ぶつかってきた自家用車は廃車となったようです。災難を生き延びたアワマイマイの殻は、接着剤で欠けた箇所を接着してほぼ原型のままの状態に戻すことができました。殻経69mm。私の知るかぎり日本最大のカタツムリは、今も琵琶湖博物館の収蔵庫に眠っています。

Q フィールドレポーターについて、ご感想、期待するものがありましたら。

フィールドレポーター(FR)に長年関わっていただいて、いろいろな調査のベテランになっておられる方々が少なからずおられ、そうした方々がいろいろなFRの活動の屋台骨をささえている、と私は認識しています。

調査のテーマや内容については、まったくの素人の方々が簡単に気軽に参加できるものから、多少敷居の高い本格的なものまで、両方があっていいと思っています。設定するテーマとそのやり方次第では、学術的にもじゅうぶんに評価できる成果が得られることは、田んぼのエビ類調査のデータが論文化されたことでも実証済みです。

もちろん、ここで私は学術的成果を得ることがFR調査の主目的とすべきだと主張しているわけではありません。せっきくの調査なのですから、できるものであれば何らかの形で成果を広く発信することも大切だと思うわけです。その意味で、先般ご協力いただいた「ため池」の調査結果は、もう少し分析を加えて、自然保護関係の雑誌に紹介できるのではないか、考えているところです。

Q 中井さんの論文 or 出版物 2～3 編ご紹介ください。

- ・ 第11回企画展示「外来生物つれてこられた生き物たち」
- ・ 外来種ハンドブック(編集・分担執筆)
- ・ 川と湖沼の侵略者ブラックバス～その生物学と生態系への影響

大変お忙しいところ、有難う御座いました。

以上

表 題 「あなたのお名前何て言うの」

投稿日 「030530」

名 前 「彦根市 加 固 啓英」

和名と学名について分からないことが多く、又、ツキノワグマについて自宅にある本を調べても分からない点が多々ありますので、教えて下さい。

* 私の飛び切り古い原色日本鳥類図鑑(保育社 1956)では、迷鳥のペリカン(英名 *Damatia pelican* がガランチョウと記載されており、専門書ではないのですか、現在のコクチョウ(*Black swan*)をコクハクチョウとよんでいたこともありました。

ピグミーチンパンジー→ボノボ、コビトゾウ→マルミミゾウ、の変頁は誰が行い、どのように発表されたのでしょうか？

ピグミーチンパンジー→ボノボ、は系統分類的な見直しと思いますが、コビトゾウ→マルミミゾウ、は差別用語問題を避ける為でしょうか？

* キノワグマについては。

1. シートン動物誌(紀伊国屋書店 1998 シートン 1860~1946)
アメリカグマ *Ursus americanus* PALLAS 1780
2. 原色日本哺乳類図鑑 保育社 1960)
ニホンツキノワグマ *Selenarctos thibetanus japonicus* SCHLEGEL
3. 世界大百科事典(平凡社 1972)
つきのわぐま *Seienarctos thibetanus* クロクマまたは単にクマともいう。
4. 日本の哺乳類(東海出版 1994)
ツキノワグマ *Ursus thibetanus* G.Cuvier 1829
5. 日本動物大百科 哺乳類 I(平凡社 1996)
ツキノワグマ *Ursus thibetanus* 又は *Selenarctos thibetanus*
6. 日本の哺乳類(学習研究社{学研} 2003)
ニホンツキノワグマ *Ursus thibetanus japonicus*

* 和名、学名ともどれを使うべきなのでしょう？

2. の G.Cuvier *thibetanus japonicus* SCHLEGEL は多分アオガエルのシュレーゲルが、大陸のと少し違う日本のツキノワグマを報告したのだと思いますが *thibetanus* と *japonicus* の間に var とか ssp とかを入れなくても正式の学名の形式なのでしょう？

4. の G.Cuvier はチャールズダーウィン(1809~1882)と論争した、あのキュービエなのでしょう？

* ツキノワグマに限らず毛色の黒いクマ(ナマケグマ、マレーグマ、黒毛系統のヒグマ、アメリカグマ)は胸に白斑のあるものが多いようですが、外国の黒い熊に和名を付ける場合には G.Cuvier 又は *Ursus* についてのみ、地名+ツキノワグマ、になるのでしょうか？

* 学名の意味を知るにはどうしたら良いのでしょうか？ 羅和辞典(研究社)を引いても、引いた単語の 20% しか載っていません。

ラテン語 *Ursus* 1. 雄熊 2. 犬を熊にけしかけること
Seienarctos 《羅和辞典(研究社)に無し》
Thibetanus 《羅和辞典(研究社)に無し》

学芸員さんからの回

加固 啓英さんの質問について

黒田耕平(琵琶湖博物館資料整理職員)

ご質問いただいた事項について可能な限り調査しようとしたしましたが、力及ばず中途半端に終わってしまった部分が多々あります事をご容赦下さい。

(1) 学名について

○学名の構造

生物に学名という形で独自の名称を与えることがスウェーデンの科学者リンネ(Linne)によってはじめられたのはご存じのことと思います。

例をいくつかあげてみますと、次のようになります。

Homo sapiens ヒト

Canis familiaris イヌ

Cervus nippon ニホンジカ

Ginkgo biloba イチョウ

この様に学名の最小構成要素は2語で、1語目が「属名」、2語目が「種小名」をあらわします。これが二語名法や二名法とよばれる原理です。種が違ってまとめるだけの類縁関係があると見なされる物は同じ属にされます。上記にあげたシカの仲間では、他に

Cervus elaphus アカシカ

Cervus unicolor サンバー

などが同じ *Cervus* 属の仲間として、類縁の近いグループにまとめられているのです。

属名と種小名は独立では生物種を意味しません。2つがくみ合わさって初めて一つの種の名前を表すこととなります。日本人の姓・名のようなものと考えれば判りやすいでしょう。しかし氏名と違って、違う種が全く同じ名前を持つことは決して許されません。また、同じ界(動物界、植物界など)の中で類縁のないグループが同じ属を名乗ることも許されません。これらについては厳密なルールが定められています。(実を言うと生物学全体での統一ルールはまだありません。ほとんど同じなのですが、動物、植物、菌類の各分野で独立したルールに従っています。以下は基本的に動物分野の「国際動物命名規約」を元にしていきます)。

「亜種」を規定する場合は、種小名の後に亜種名を続けて書きます。すなわち亜種は三語によって規定されます。ニホンジカを例にとると

<i>Cervus nippon nippon</i>	キュウシュウジカ
<i>Cervus nippon centralis</i>	ホンドジカ
<i>Cervus nippon yesoensis</i>	エゾジカ

となります。亜種は種と違って必ず規定しなければならない分類群ではありませんが、規定する際にはその種を記載する元となった標本(基準標本といいます)が含まれる亜種に種と同じ亜種名をつけなければなりません。*nippon* という亜種名がホンドジカではなくキュウシュウジカなのは、量初に *Cervus nippon* と名付けられたのが九州産の標本と考えられているため。

さらに「亜属」の挿入も認められていますが、その場合必ず丸括弧に入れて属名と種名の間におかなければなりません。ニホンジカは *Cervus* 属の *Sika* 亜属に入れられることがあるので、それも表現しようとする

<i>Cervus(Sika) nippon</i>	ニホンジカ
<i>Cervus(Sika) nippon yesoensis</i>	エゾジカ

となり、動物の学名は最大 4 語で表現されることもあります。

記述する際の書き方についても決められており、属名と亜属名は必ず大文字ではじめなければならない一方、種小名と亜種名は小文字ではじめなければなりません(ただし植物では、固有名詞に由来する種小名は大文字で書くことが認められています。必須ウではありません)。

そして、他とは区別できる字体で記述されるべきであるとされているので、通常は斜体(イタリック)

で印刷されます。斜体以外では下線部をひく方法も時々見られます。

ちなみに同じ文章内で同じ属が何度も続けて出てきて、他の属と誤解する可能性がない場合のみ、二回目以降その属名を頭文字で略記することが許されますが、このときの頭文字も同様の字体です。

また、種の命名者の名前を書くこともあります。この場合、学名の後にカンマなどをつけずに続けて書き、学名の一部でないことを示すために斜体ではなく通常の立体(ローマン)で書かれます。かつては大量に命名した著名な人物は略して書かれることが多かったのですが(Linne が L., Temminck and Schlegel が T&S. など)、今は略さないように勧告されています。

同様に命名された年を書くときもあります。命名者のさらに後にカンマをつけて書くことになっています。

それと、命名者と命名年が丸括弧に囲まれていると、その属名は命名者が名付けたときの属名とは違うことを意味する事になっているのですが、この括弧ルールはあまり厳密に守られていないようです。

これまで説明したことに従って、我々が奈良公園で目にする事ができるシカの学名を以下にいくつか例示します。

Cervus nippon
Cervus nippon Temminck
Cervus Nippon Temminck, 1838
Cervus(Sika) nippon
Cervus(Sika) nippon Temminck
Cervus(Sika) nippon Temminck, 1838
Cervus nippon centralis
Cervus nippon centralis Kishida
Cervus nippon centralis Kishida, 1936
Cervus(Sika) nippon centralis
Cervus(Sika) nippon centralis Kishida
Cervus(Sika) nippon centralis Kishida, 1936



結論からいえば、上記の書き方は全て学名として適切です。しかし最も目にする機会が多いのはやはり簡潔な *Cervus nippon centralis* ではないでしょう「亜属」は分類を取り扱ったりその亜属が重要であったりしない限り、学術論文でもあまり記述されません。



科学のアルバム 「シカのくらし」 増田 辰樹 あかね書房より

表題「あなたのお名前何て言うの」の質問に対して、詳細な回答をいただきました。一度に掲載する事が困難なためと、読んでいただくみなさんのご期待とご想像を含めて、連載とすることにしました。構成のタイトルを次のとおりお知らせしておきます。

- 第 1 回(今号)……学名について
- 第 2 回(次号)……学名の言語
- 第 3 回(次次号)……ツキノワグマの名称について

表 題 「蝶の詞査で、一研究者と遭遇」

投稿日 「03.10.03」

投稿者「志賀町 尾形 勇」

市井の一生物学者/自然に親しみ、こよなく小動物「蝶」の研究をしておられる近所の熱心な御仁を紹介しよう。

ことの始まりは、先ごろ私の住む町内のボランティア活動(町の清掃作業)で出会った近所の星崎 憲夫氏(元京大教授)のこと。

作業が終わって、お茶など飲んでくつろいでいるとき、氏から、博物館では今何を調査研究していますか、と問われ、蝶のことを語りましたところ一度家に見にきませんかとの誘いの言葉ではじまった氏の蝶の話、その語り口からは、かなり長い年月研究を重ねて来ておられることが察せられた、産卵、幼虫、さなぎ、成虫の成育過程のことや、また私の始めて聞く名の蝶々、「ナガサキアゲハ」を最近捕獲したとのことなど、興味尽きず、一見したき蝶でもあり、後日お伺いし続きを聞くこととした。

折角の機会でもあり、昆虫のことなら、博物館は八尋さん、にと事の次第を報告したところ、彼も是非行ってみたいと、急テンポに話がまとまり、9月22日午後星崎氏宅へ

さすがは元大学教授の研究者、尋常な一研究者どころではなかった。幼少時より、トンボと蝶に強い好奇心を持ち研究してきたが、長ずるに及び「蝶」だけに没頭現在もその蝶の研究続行に余念がない。

今もその心意気を示すかのごとき語りの中に、むかし子供のときに捕った珍蝶の標本が保管の失敗(部屋の湿気)でダメにした悔しさを今なお残念がっておられた。

唯今その標本の教 20 箱はくだらずとみる、氏の説明が進むにしたがい順次机上に置かれる箱、その一箱々々にギッシリと種別ごとに見事な蝶の標本が並ぶ。

日本の国蝶オオムラサキ始めナミアゲハ、それに今回主役のナガサキアゲハ、他各種の蝶を見せてもらった。

また、蝶のなかには、今年の冬は暖冬だ、としらせる蝶もいると言われる。

その外いろいろ珍しいことや面白い習性のある話などあり、また机上には小さな止まり木にぶら下がる、一匹のさなぎが今まさに脱皮運動活発で、間もなく羽化する様子が見られたことなど、貴重な見学が出来た。素人の私には、蝶の種類が凄く多いことや生態のさわり位しか、知り得なかったが、同行された、八尋さんはさすが星崎氏との対話もはずんでいたことだし今後も何かと情報交流の機会になったことが幸いでした。

八尋さん当日はどうもご苦労様でした。今後ともなにかと宜しくお願いします。



伊吹山資料館を見学して

2003・9・17

大津市 井門 静夫

昔から人々は、自然の中からまず、土地を耕し、作物を作り出した農耕文明から始まったと言われます通り、その土地風土にマッチした当地独特の生み出した文化があり造られた道具、機械、生活様式に合った(必需品)がそこには、アイデアが活かされている、工夫と努力によって昔使用されていた古い道具機械類が数多く保存、展示がされており、大変感動をしました。

中でも、特に農業に使われた道具類のコーナーには、私は感心と興味があり説明を受けるたびに、昔の人々の労苦と努力が心の中より理解できまして、その場に立ち止まることしばしばでした。

例えば、一つの道具、工具について考えて見ますと石臼(イシウス)にしても、山から人力によって石を切り出してきて、石トウでノミを使い石を円筒形に加工し、真ん中に心棒を入れ、軸として2枚を重ねて、内底には矢線状の溝を掘って仕上げ、今日であれば電動機械があるが昔は全部手造りで、たぶん長い時間を掛けて、苦勞を重ねて一つ一つ仕上げたに違いないし大量生産をするのではなく、真心こめて、一つの製品に仕上げる時間は相当かかったに違いないでしょうし、自然と品物に情熱がこめられ、その道具を使う人も同じ気持ちで大切に使いこなされたと思います。



いついつまでも残る石、材料と言ひ、また、重量があつてこそ豆などが粉にすることができて(回転さすことにより石に切られた溝どうしの中ですりつぶす、そして外部に出て来る)などを考案し、つい今日までは当たり前のように・・・これしかない粉にするにはの精心ひとつで、それを今考えると、とても気が遠くなる程大変な作業である。

私も幼い頃おばにマメの粉を挽く手伝いを何度も体験したことがある。あの時の石臼の回転をさせる力、石と石との摩擦力を利用して、そして、豆を入れるとそれが石と石の間にうまく入ってころがり、わりに軽く回る、あまり早く回転さすと、豆の粉が荒くなってだめ！！フルイに通しても荒ら挽きのため、少ししか仕上げの粉が出来ず再度挽き直し等何度も苦い体験をしました〔おば

に教わりながら)。

なかなか上手に挽いてくれたな...おいしい“ぼたもち”をこれで作ってあげるわね・・・とほめてもらったこと等々、色々と思い出があります。

それと、あのボランティアの方々に心から感謝を致します。

今後共お元気で、子供たち、お孫さんたちに一人でも多く伝えてください。

今どき“核家族”でお話ができなく、もちろん、体験もする機会がない人たちにぜひ、ご説明と体験学習の御指導をお続けてください。今日の機会は、昔の方々のアイデアを基として考案されエネルギーも電気で、オートメーション化、品物さえ入れば、製品が袋詰めされて出て来る世の中ですが、私達年代の人々が使用説明を受けると「うん、なる程な～」となっとく理解ができますが、現在の子供さんたちになると？なんの事かな～？...さっぱりだと思いますが、そこであのボランティアの方々の(年を重ねられ、実際に生活してこられた、そんな道具を使って体験された人々)の説明が、真心がこもって、お顔、態度、言葉づかいと、なんとも表現しがたい程、心の中まで暖まるほのぼのとした味があって、その上落ちつき“時間の空間”を味わせていただきました。私、感謝の気持ちでいっぱいです。

特に、小さいお子様も同じく、あのボランティアの方々のお話、昔の日常生活の道具等、使い方体験を受けたならば、実感がこもり、コミュニケーションが多くとれ、興味を持つだろうと思います。心の優しい子供達に、また道具に対する愛着心が、そして、昔の人々の苦勞が、理解できると考えます。

近年、一般家庭では、新しい道具を買い替えますと、すぐに古い道具はおお方ゴミ扱いとしてしまいがちですが、年代が経つにつれて、よい道具は使用しているうちに愛情がわいてくるものです。子供のころから、資源の大切さを教わることにより、物を大切に、リサイクルに心掛ける気持ちが大切ですね。道具の気持ちになって見ますと、使用者によって有効に活用されたり、されなかったり、粗末にしたりする人がいますが、昔の古い道具によっては磨耗がはげしく、すり減っている様な道具は、それだけ今まで使用頻度が高く、生活に密着していたのだということを感じさせられます。

フル活用して、道具として、生まれ働き続け価値の高いもの、こうして今日、昔の使用状態をそのまま再現されて、手入れの行き届いた製品：道具として見れば大変にしあわせであろうと感じます。最後まで役目を果たして磨かれ、資料館にこうして保存されること、すなわち、製作者はもちろんのこと利用者、保存者の気持ちが一体となって、次世代へと伝えられる昔の歴史を物語る、あかしであると感じます。

今ここに伝えてくれて“ありがとう”の言葉が、心の中より出る様な気がします。お仕事ご苦勞様でしたの気持ちがわき、道具を大切に扱うことが大事かと言う事が良く理解できました。

最後になりましたが、大変まとまりのない文章で失礼します。

表 題 [滋賀県に外来種のガマはないか]

投稿日 [030820]

名 前 [埋め草四郎]

日本の帰化植物(平凡社 2003・03・25 を彦根市立図書館に取り寄せて頂き、その中に、現在フィールドレポーターの調査しているガマ類に外来種のあることが記載されていました。

モウコガマ *Typha laxmannii* LepPech.

[外 観] ヒメガマ *T. domingensis* Pers に似る。(*はヒメガマ)

地下茎は太く横にはう。

茎は高さ 1 ~ 1.3m (*1.5 ~ 3m)

葉は長さ 50 ~ 90 cm

幅 2 ~ 4 mm (*4 ~ 10 mm)

雄花と雌花の間に花の付かない軸の部分がある。(*左に同じ)

雌花の長さ 3 ~ 5 cm (*花穂の長さ 10・30 cm)

焦げ茶色に熟す (*白っぽい褐色に熟す)

[原産地] 中国東北部 ~ ヨーロッパ

[現在の分布] 北海道、千葉県、神奈川県、兵庫県

[渡来] 角野康郎・著 1994 水草図鑑の示唆

確実な報告は折目・大場 1996 千葉県植物誌資料 9:55-56 の千葉県芝山町解っている移動経路は兵庫県南部の池より千葉県、神奈川県、などヘトンボ池の造成植物と共に持ち込まれたと考えられる。

フィールドレポーターがヒメガマ風の花穂と葉を採取して調べることで、滋賀県への移入の有無が確認出来ると思います。

瀬戸内が「二四の瞳」なら滋賀県はフィールドレポーターの「二六〇の目ん玉!」ですから分布とか移入の調査については得意技になるのではないのでしょうか。

セアカコケグモ(兵庫・大阪・三重)尻尾の長い交雑猿(和歌山)南米由来の猛烈なアリ(岡山?)など近県に迫った物について、知識と体制を整えた上での調査をしてみませんか?

表 題【赤米の観察】

投稿日【030917】お名前【守山 市町村 高田 節子】

9/16(火) 守山市下之郷町の実験水田で行なわれた赤米観覧会へ行ってきました。
 その下には下之郷遺跡があり、お米も発掘されました。
 そこには赤米3種類(種子島、対馬、岡山)が並べて試験栽培されています。
 赤米3種類とも穂はたれ垂れてなく、その上すべて長い芒がついているので、
 麦に似ているなあと思いました。又すべて、背丈は白米よりずっと高く、なかでも
 種子島は特に高く、目の前に穂が見えたのでびっくりしました。
 長い芒はそれぞれきれいな色でした。籾の色は皆黄緑色でした。そのうち
 色が変化していくそうです。
 種子島は、どこを見ても赤味がないので、これも赤米なのかと不思議に思いました。
 外見上の色は関係ないそうです。出た玄米はちゃんと赤味を帯びているそうです。
 赤米は種皮の細胞に赤い色素がたまっており、その種皮が最後まで残っているため
 赤味を帯びた玄米となるのだそうです。しかし、精米すると赤味は糠へ入って
 しまうので、赤味を残そうと思えば、五分づきか七分づきにしないとダメだと
 言われました。

今まで普通のお米もくわしく見たことがなかったため赤米の穂をそれぞれ
 なかめでは感心ばかりしておりました。そして、これからは普通のお米も
 観察していきたいなあと思いました。



	種子島	対馬	岡山
芒の色	白色	鮮明な赤紫色	対馬より薄い赤紫色
籾の色	緑色	赤紫色	赤紫色
籾の色(1/4)	黄緑色	黄緑色	黄緑色
↓ その後変化の色	黄褐色	赤褐色	赤褐色
		淡赤褐色	黄褐色

道路工事現場の鉱物について(照会)

1. 氏名 京 美季男 フィールドレポーター

2. 調査場所 甲斐町岩室

土山町大沢との境界に近接

第2名神 甲斐-土山架橋工事南詰付近

メッシュコード: 5236-3211

メッシュマップの11の朱文字のすぐ左上の小さな尾根

3. 調査月日 平成15年10月11日(土)

4. 天気 晴れ時々曇り。

5. 環境

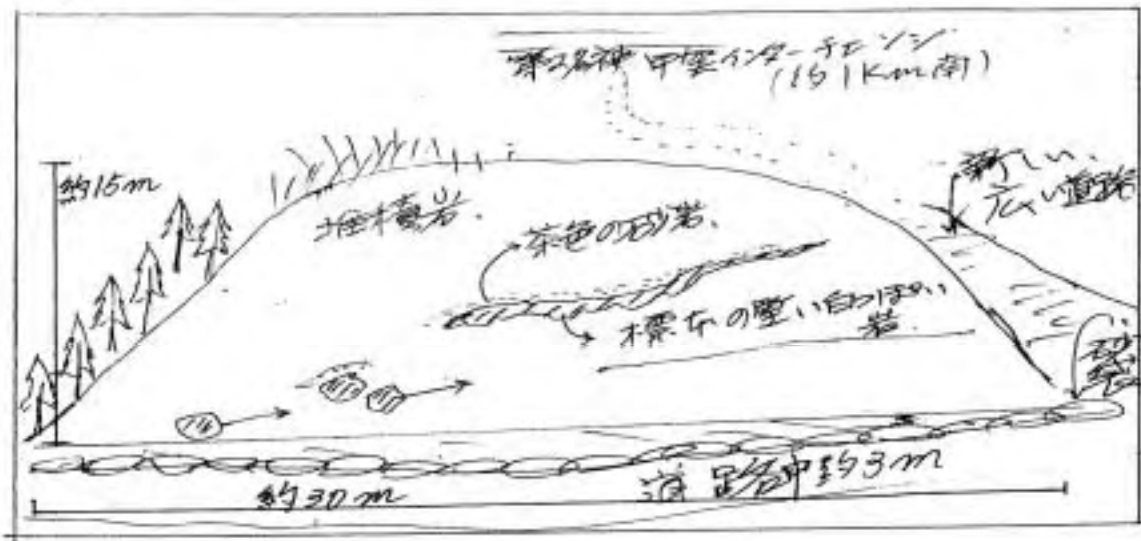
岩室-北土山線道路に突出した低い
尾根の掘削断面。

小さな貝の化石を含む堆積岩の斜面で、
工事は、路面養生のため、現在、行なわれて
いない。

6.
採取
標本



7. 化石と思われる鉱物の埋蔵断面図



火山灰なのか、化石なのか、その知識はありません。しかし、巨大な動物の化石のようにも見えます。

先ほど預かったフィールドレポーターさんから送られてきたものは、高橋さんにも見てもらったところ、やはりカキの化石(殻の破片)でした。

岩室のあたりで第二名神工事現場あたりですので、場所的には古琵琶湖層群と鮎河層群の境界付近でも、産出するものがカキで、それに付着する砂などをみても鮎河層群のものと思われます。

送っていただいた崖のスケッチ見ると、とぎれた薄い層状(レンズ状とも)に送っていただいたカキの化石が入っているということですから、おそらくこれはカキ床(カキが集まっているところ)と思われます。この化石が生きていた当時のあたりは、海岸付近でカキが密集するような場所だったのでしょう。

-----里口 保文-----

滋賀県立琵琶湖博物館 525-0001 草津市下物町 1091

企画展示『外来生物 つれてこられた生き物たち』開催中！

Tel:077-568-4828(研究室)、077-568-4811(代表)

Fax:077-568-4850, E-mail: satoguti@lbn.go.jp

<http://www.lbn.go.jp/satoguti/>

(里口の個人で管理するページ)

-----SATOGUCHI, Yasufumi-----

表 題 「どこにでもある風景の簡単な報告 その5」

投稿日 [031102]

名 前 [今津町 角井 俊明]

メッシュ番号 5335-1767～57 から 400m 程上流においてまた治水と言う名の工事が始まった。滋賀森林管理署(旧大津営林署)の計画だそうです。

一帯はたしか水源涵養保安林でなかったか。ナラの立ち枯れ、酸性雨、酸性雪、の対策が任務で優秀な森林を創ることこそ本来の仕事であるべき事。

美的センスに欠ける設計者によるコンクリート構造物、センスのない業者による施工、メッシュ番号 5335-1747～46 から 200m 程上流に存在したえん堤が上流域の度々の工事より発生する土砂によって?埋没してしまっている。

誇り高い土木関係者ならばこの様を見て自決するところだが、そんなうわさを聞いたことがない。メッシュ番号 5335-1746～36 から 500 mm程上流、例年並の気候のはずが崩壊した。役人、土建屋の高笑いが聞こえて来そうだ。

金銭目的で行われているだろう一連の工事では、周囲の事象など無視されている。

工事現場への取り付け道路の設置、川を寸断し、発生土砂で川を埋める等。

確か野坂山地はオオサンショウウオの生息地ではなかったか? 築につかまった個体の写真を見たことがある(工事等で生息地から追い出されたか、1960 年代頃の物)

近年、茶屋川でオオサンショウウオの生息調査が行われた。(新しいダムの建設中止を目指して)未確認だったけれど。

希少生物の力を借りて馬鹿げた行為を中止させる有効な方法かも。

ニホンカモシカについて天然記念物あるにもかかわらずその死体を川でよく見かけるし、人里に近い林道でよく見掛けるようになった。先日林道でカモシカを轢殺する寸前だった。カモシカのような孤高の生き物を頻繁に見ることが出来るということは、山奥で何か異変が起こっているにちがいない。

淀川水系流域委員会の嘉田 由希子という人が、「河川レンジャー」の創設の事に言及されていたが(湖川山も守るのでレンジャーだけでいいと思うのですが)レンジャーの仕事を補助するための人々を養成する講座を琵琶湖博物館でやってほしい。

C.W.ニコル氏を何回か招いて講演してもらおう。 題は「森から未来をみる」で NHK 人間講座で放送されたものだが、進むべき道を示しているように思う。



メッシュ番号
5335-1767



メッシュ番号
5335-1747



メッシュ番号
5335-1746

表 題 「今年もへちまで」

投稿日 「031203」

名 前 「大津市 渡辺 康子」

今年もへちまが採れました。畑に青々と垂れ下がるへちまを見て、「これ あのへちまですか？」と聞かれた時は、思わず「はい あのへちまです。」と言って笑い合いました。懐かしく記憶に残っているのでしょうか。今年は3名の方から欲しいと言われうれしかったです。しかし、まだへちま水を作った事ありません。茎の太さ水のやり方 肥料の具合教えてください。来年も又作りたいと思っています。 以上です よろしくお願いします。

「ひとはくフェスティバル'03」に参加して

03・11・15 志賀町 尾形 勇

兵庫県三田市で昨年に続き「ひとはくフェスティバル'03」が開催されることとなり、琵琶湖博物館にも誘いが掛かった。(今年は一般募集はせず主催者側で選出した団体の50組)

今回はフィールドレポーターだけ参加(去年は、はしかけグループと共参)出展することとなり展示品目はどんぐり や しいのみ など木の実に、 蝶々各種、へちまの三品を選んで出すこととなった。他にクイズ当て用、蝶々の絵のワッペン 200 個とへちまの種も希望者向けに用意した。



開催は 11 月 3 日に行われた。

昨年同様総括学芸員前畑さんの運転で公用車で行ってもらえることとなり、同車にははしかけグループから多才な優れた助っ人の矢原さんと私、それに前日に津田さん等が積み込んでおられた展示品の数点、

車は午前 8 時館出発名神、中国、両高速を走行する、ベテラン運転の前畑さん快適スピードで急行、開催地深田公園会場に 9 時半にはもう到着した。会場には前夜の出展団体交流会から出席されていた、前田さん、山崎さん、津田さん、森さん、高田さん、等が待っておられ、さっそく車の荷を下ろし 4 階の展示室へと運搬する。



展示室の入り口に立てた「琵琶湖博物館フィールド・レポーターの「自然と遊ぼう」の見出しの立て看板これが今回同行の矢原さんの腕による素晴らしい出来栄えの絵だ

= 可愛いキャラクターの、蝶々やトンボ、どんぐり、小鳥、ナマズ、リスなど、そして「自然を大切に・…」のキャッチフレーズ =

この看板で子供の眼を惹いたことはたしか・・はたして、展示品が並べ終わるころには、もう看板を見て待っていた少年、少女、幼児親子づれがどっと入室してきて、たちまち室は満杯となってしまった。

蝶のコーナーでは、七種類の蝶の幼虫、さなぎ、成虫、の三つ作ったモデルを机上にバラバラに置き蝶の種類別に三つを繋ぐクイズこれなかなか工夫をこらしたもので子供の人気を集めていたこと、また



室の中ほどから奥にかけてはどんぐりなど木の实 5 種類を各ケースに入れて置き、その隣に工作机を 3 台並べて、少年たちがそれぞれ好みの木の实をもって土作台の上で木め実を削って笛やコマをつくる楽しみこれまた大いに受けていた。

私も津田さんからわか仕込みで習ったコマや笛の作り方で何とか少年たちの要求に応えて、どちらも 3-4 個と少女の宝船作りを手伝ってやれたことで自分も楽しんだことでした。なにわともここでは道具各種、ナイフ、錐、サンドペーパー、電気ドリルなどの使い方は子供の良い体験になったことでしょう。

今日はわれわれ全員が子供等の対応に忙殺され昼食も同室片隅で巻きずし、コーヒー、サンドウィッチ、などを交替で手づかみの態で早食いのさま、いったいお腹の何処に入ったのかわからんしまつ、一方室内温度は急上昇し、全員汗だくの活躍ぶり、でも気持ちは爽やか、子供たちに交じってわいわいやっているうちにこちらも熱中し時の過ぎるのも気付かず、館の人が時間を告げに来るまで(3 時半)知らずに大奮闘……

終了後はまた一仕事、後片付け、掃除(飛ぶ鳥あとをにごさず)がありすっかり元の実験室の模様に戻せたのが 5 時頃となった。

「帰りも宜しく」と前畑さんに頼んでスタートしたものの、しばらく行くと道路標識に高速渋滞中 宝塚ICまで17Km余りと、思えば去年も同じだった。休日の夕刻は帰路を急ぐマイカー族が山陰、山陽、からも加わり大渋滞になる。

こんな中前畑さん運転は若者にも劣らないベテランぶり、宝塚 IC まではやむなく時間がかかったが、6 時 20 分に通過すると猛烈にスピードUP、前を走る車の右車線や左車線への移り変わりは幾回あったことか、ご本人は馴れたもの、またまた早い時間内で博物館に舞い戻ってしまいました。時は 7 時 35 分

なにわとも、先ずはお陰さまで無事家族の待つ我がスイートホームへ帰れましたこと、前畑さんどうも有り難うございました。

後述になってしまいましたが、私のまとめの感想は今回の参加出展行事はすべて上手く運び大成功裏に終了したとの一言であります。

皆さん大変ご苦労様でした。



コイヘルペスウイルス。

10月始めごろからこんな言葉が報道されるようになりました。

同じ環境に生息しながらコイだけが発症し死に至るそうですが、ほかの魚類や生物にも保菌や感染しても発症しないなどの可能性はないのでしょうか。

伝えられるところでは、今から5年ほど前の'97～'98年にイスラエルの養殖錦鯉で始めて見つかり、以後アメリカやヨーロッパの国など、アジアではインドネシアで確認され、そして今度は茨城県の霞ヶ浦で大量のコイヘルペスによる被害が発生しました。岡山県の自然の川や淀川などに生息するコイにもコイヘルペスの陽性反応が出たあと、11月27日には琵琶湖直結の瀬田川で死んだコイからも陽性反応が確認され、感染のスピードやその発生範囲は日ごとに拡大しています。予防の方法が早く分かってほしいものです。

輸出入の緩和により進入経路や感染経路は複雑な要素を含み、外来生物による自然や生態系の変化は、何でも何処でもになりつつある状況で、これから先わたしたちの生活の場である地球上はどんな変化をしていくのでしょうか。

蝶の親子関係

前号の「庭を訪れた蝶の調査終了」での正しい親子関係、おわかりいただけましたでしょうか？

モノクロ印刷で、おわかりにくかったと思います。正解は下記の通りです。

A-1・・・B-5・・・C-1・・・キアゲハ・・・・・・・・・・ ニンジン、パセリー等

A-2・・・B-4・・・C-5・・・アオスジアゲハ・・・・・・・・ クスノキ

A-3・・・B-1・・・C-4・・・クロアゲハ・・・・・・・・・・ ミカン類

A-4・・・B-3・・・C-2・・・ツマグロヒョウモン・・・・ スミレ

A-5・・・B-2・・・C-3・・・ナミアゲハ・・・・・・・・・・ ミカン類、サンショウ類

庭を訪れた蝶の調査 PR 森 擴之

今年もアッと云う間に過ぎた1年でした。

フィールドレポータースタッフも厚さを増して、みなさんは交流室の環境の充実とともに、この1年も和気藹々、新しい事にも熱心に取り組み活動をされてきました。たくさんの得た知識はまさしく知的財産ではないでしょうか。

また、このFR掲示板へたくさんの貴重な投稿をお寄せいただき有難うございました。引き続き来年もよろしくお願いいたします。それではよいお年を！！

平成15年12月6日

担当は古谷でした

フィールドレポーター

掲 示 板



2003 年度第 5 号通巻第 29 号(2 月)

今年もよろしくお願いいたします。

宮本 真二(琵琶湖博物館)

2004 年の最初の掲示板です。

暦のうえでは…という文言がでできますが、まだまだ寒い目が続いています。みなさま、いかがお過ごしでしょうか？ 私はバイクで通勤していますので、気合いを入れないと、数十分ながら、つらい日々です。

時間だけは早くすぎるもので、今年度最後の掲示板となります。今年度は、フィールドレポーターの活動においても、夏の交流会の開催など、すこし新しい活動を行いました。最近では、NP0 に代表されるように、市民活動が注目され、また活発化しています。

我がフィールドレポーターも、その活動のなかに含まれるのですが、常に「斬新さを心がけて活動したいと考えています。と、私だけが考えていてもしょうがありませんので、参加いただくみなさんに、よい知恵をいただいて、今年も活動したいと思っています。

来年度の活動については、一部をのぞいて未定です。これから議論する予定でいますので、何かございましたら、教えてください。

時期を逸していますが、みなさま、本年も琵琶湖博物館とフィールドレポーターの活動へのご協力、よろしくおねがいいたします。

フィールドレポーター2月・3月の予定をお知らせします。

- ◎ 2 月 13 日(金) 「パワフル交流市民 21」の参加出展準備:
於:草津市立まちづくりセンター14:00～
- ◎ 2 月 14 日(土) 「パワフル交流市民 21」 於:草津市立まちづくりセンター10～16:00
- ◎ 2 月 21 日(土) 定例会: 於:琵琶湖博物館交流室 13:30～
- ◎ 3 月 6 日(土) 定例会: 於:琵琶湖博物館交流室 13:30～
- ◎ 3 月 20 日(土) 定例会: 於:琵琶湖博物館交流室 13:30～

※稀に、予定が変更になる場合がありますのでご了承ください。

※「パワフル交流市民 21」の詳細は、この掲示板の最終ページに載せています。

野崎 信 宏 さん (河川工学)

前田雅子



琵琶湖には大小合わせて約 460 本の川が流れ込み、瀬田川と琵琶湖疎水の 2 本となって出て行きます。今回は、河川がご専門の野崎信宏さんにお話をうかがいました。

野崎さんは昭和 36 年、大津市富士見台のご出身。物理が得意だったので、大学は土木工学科に入り、自然に“土木”に就職されたそうです。

——琵琶湖博物館に 2 年前にこられたとか。ずっと、河川のお仕事でしたか？

「昭和 59 年に県庁の土木部に入って道路、都市計画、砂防、河川管理など、いろいろな部署で仕事をしました。6 年前、上司に『河川(かわ)をこれからやれ!』と言われ、大阪府に派遣されて、高潮対策やスーパー堤防づくりをしたのが、仕事での川との付き合いの始まりです。滋賀県の川を知らずして大阪に行ったのですよ。(笑)」

——滋賀県では、どの川に関わられましたか？

「県庁にいたので、県内のすべての河川を相手にすることになりますが、彦根市の犬上川・芹川の計画づくりが印象に残っています。地域の方々からゴミが多い、自然を残すなどの意見が出されましたが、近年、川の水が減ったという問題が出てきました。降水量が減ったから、山の保水力がなくなったから、農業用水を取るからなどが考えられましたが、原因ははっきりしませんでした。おそらくいろいろな要因が絡んでいるんだと思います。」

——博物館のお仕事を聞かせてください。

「いろいろな仕事がありますが、志津小学校と行なった『伯母川探検隊』の活動が印象に残ります。川の生き物調べは私自身の勉強にもなりました。子どもたちには、これから、昔の川と今の川の利用の仕方を知る、水害を経験された方の体験談を聞くなど、別の視点でも川を学習してもらえればと思っています。特に滋賀や京都はこの 30 年ほど大きな雨が降っていないくて、水害に対する危機意識が薄れていますから…」



——昔の川と、今の川は違いますか？

「私が小さい頃、母は溜池から流れる小川で洗濯をしていました。そこに大きな桃がどんぶらこ、どんぶらこ…(ウソです)。母についていた私は溺れそうになったこともあります。川を生活に利用していたから、昔は川に近づかざるをえなかった。おのずと川は身近な存在だったように思います。私を含め、昔は川でよく遊んでいましたが、今は川で子どもを見かけることが少なくなりました。それで最近、『子どもたちが遊べる川にしよう』という動きがありますが、少し違うのでは?と感じています。今の子どもはスポ少や塾で忙しいし、遊びも室内ゲームが主流です。社会自体が変わらないと子どもも川には帰ってこないでしょう。…だいたい仕事の話牟らはずれましたが。」

大きな目と、爽やかな笑顔が印象的な野崎さん。話に熱が入ると雄弁になられます。性格は丁寧で、まじめなタイプとお見受けしました。野崎さんをよく知る人によれば、「きさく」で、「仕事のできる人」とも。

次に、話題を変えてプライベート面をお尋ねしました。

——ご趣味は何でしょうか？

「実は私も生物系で、競馬が好きです。(笑) 趣味としてカヌーもしています。琵琶湖や瀬田川、保津川、木津川などで楽しんでいます。大学で友人に誘われて同好会に入ったのがきっかけで、社会人になってからは、大学の友人とクラブを作り、たくさんカヌーに乗るようになりました。博物館には趣味が仕事という人もいますが、私は仕事とプライベートを分けて考えたい方です。カヌーに乗っているとストレスも吹っ飛びますが、河川を仕事にしてからはどうもいけません。カヌーに乗っていても、『洪水の痕跡がここに残っている』とか……(笑)」



——カヌーの面白さは？

「陸上から見る川とはずいぶん景色が違います。カヌーの目線はせいぜい水面から 1m くらい。川面にのんびり浮かんでいると、まるで水鳥になった気分。流れの激しいところでは、水のパワーが肌で感じられ、川と一体になるような感覚が味わえます。」

——好きな川はありますか？ 反対に、いやだなあと思う川は？

「カヌーをやっているので、やはり水量豊かで、流れのある川が好きです。まわりは山の緑に囲まれ、川底まで透きとおって、魚影なんかも見えれば最高ですね。すべての条件をクリアする川はなかなか無いのですが、四万十川(高知)や北山川(和歌山)、吉野川(奈良)、黒部川(富山)あたりでしょうか。県内にもきれいな川はたくさんありますが、山が浅いので水量は少ないですね。」

不謹慎な話ですが、実は増水した川を眺めるのも好きですね。洗堰を全開したときの瀬田川は恐ろしいほどの迫力があります。特に鹿跳橋のあたりは猛り狂ったように流れていて、眺めていると時間を忘れてしまいます。

例えば大阪には、高さ4mものコンクリートの壁が堤防として築かれ、まちと川が完全に分断されたような川があります。水は黒ずみ、川底には自転車や家電製品なども沈んでいます。いやな川と言ってしまえばそれまでですが、重病の川ととらえてほしいですね。どうしたら川らしい川になるのか、地域の人も行政もいっしょになって考える必要があると思います。人びとが川に関心になることが川にとって最も良くないことかもしれません。」



――最後にフィールドレポーターの皆さんに是非見てほしい川がありますか？

「高月町の西野水道ですね。山をくりぬいた3つの穴が琵琶湖へ抜けています。北から順に初代、2代目、3代目です。初代の穴は江戸後期に掘られ、『近江の青の洞門』とも呼ばれており、硬い岩山を人力だけで5年余りかけて掘った先人の苦労が伝わってきます。中は暗くてせまいので、少々勇気がいりますが、懐中電灯と長靴も用意されていますから、ぜひとも中まで入ってほしいですね。」

「仕事の面白さは？」の問いには「モノを造って人に喜んでもらう時が嬉しい」。でも、「治水は進んでいるが、10年に1度の大雨に対する安全率は滋賀県の場合50%未満で、川は必ずしも安全ではない。危ないという認識も必要。」と、おっしゃいます。

インタビューを終えて、私も野崎さんをまねて川を眺めてみようと思いました。川は自然だけでなく、社会も反映しているのですね。急なインタビューにもかかわらず、たくさんのお話を聞かせていただいた野崎さん、ありがとうございました。

表 題 [今ならわかる、ガマの自生地]

投稿日 [03110i]

名 前 [彦根市 加 固 啓英]

ヨシの様な大形の単子葉植物(多くはイネ科植物)の葉の元気に茂っていた季節には、これらに紛れて、穂が見えない限り見つけにくかったガマの自生地が、秋の深まったこの季節(10/30 確認)には、はっきりと識別できることに気づいたのです。

☆☆☆これらの単子葉植物は秋が深まると、枯れるか黄ばみ、茎や葉も垂れさがり気味です。その中で暗い紺色掛かった緑色で、かなりしっかりと直立している、茂みは大体ガマの類(ガマ属)の様です、ガマ類の穂も見当たらない、水が深く近寄れない愛知川の中洲の、以前にガマの生えていた辺りに、この様な形と色の茂みを数カ所見つけ、別の僅かにガマの穂の残る宅地化を待つ放置した水田で見比べて確信が持てました。

* 済みませんが、皆さんも夏にガマを見かけたフィールドでも観察して頂けないでしょうか？ そしてこれからの季節に注意して見ておき、また夏に調べれば滋賀県、の確認されたガマの自生地がかなり増えるように思います。
と言うことは→継続調査になるのですが。

** モウコガマ(外来種・呉庫県には自生)についても調べてみませんか。フィールドレポーターから滋賀県での第一報告者が出れば一寸鼻が高いのではないのでしょうか。(虫の良い語ですが…花穂の一部を送付して布谷さんに調べて頂く。)



黒田 耕平（琵琶湖博物館資料整理職員）

○ 学名の言語

学名に使用される文字はラテンアルファベット26文字でなければならないと規定されています。言語に関しては規定されていませんが、ラテン語もしくはラテン語化したギリシャ語を元にするのが基本です。ギリシャ語のラテン文字への換字は以下のようなルールがあります。これがわかっているならばギリシャ語辞書を引くこともある程度簡単にできるでしょうし、ギリシャ語とラテン語がわかれば大抵の学名の意味はわかると思います。

Greek	Latin	Greek	Latin	Greek	Latin
α	a	ι H	i/j	τ	t
ά	ha	ι	hi	υ	y
β	b	κ	c	ύ	hy
γ	g	λ	l		ph
γγ	ng	μ	m	χ	ch
γκ	nc	ν	n	φ	ps
γζ	nx	ξ	x	ω	o
γχ	nch	ο	o	ώ	ho
δ	d	ό	ho	α ι	ae
ε	e	(final) ο ν	um	α ι	hae
ε	he	(final) ο σ	us	α υ	au
ζ	z	π	p	ε ι	i
η	e	ρ	r	ε υ	eu/ev
(final) η	a		rh	ε ύ	heu
ή	he	ρ ρ	rrh	ο ι	oe
θ	th	σ	s	ο υ	u

「・」で記したのは粗気音符で、ラテン文字では h を表します。本当は小文字の弩合は文率のすぐ上に来ます(二重母音では二文字目の直上)。

語尾の η、ο υ、ο σ がそれぞれ a、um、us になるのは、ギリシャ語の女性語尾・男艦吾尾・中性語尾をラテン語のそれと置き換える意味があります。

また、ここでは表示できませんでしたが、σ には書体が 2 個あり、語尾の σ は本当は別の形をしているのでお気をつけ下さい。

ツキノワグマの属名 Selenarctos が羅和辞典に載っていないのは、これがギリシャ語から作られた語のためであり、そして希和辞典にも載っていないのはこれが複合語だからです。ギリシャ語の

単語を組み合わせるやり方は、大まかなルールとしては「前の語を属格にして語幹を抜き出し、後ろの語の語頭が母音なら前の語の属格語幹語尾から母音を除くか子音のまま、そうでなければ前の語の属格語幹語尾が σ になって両者がくっつく」です。ラテン語の場合モほぼ同じルールで結合母音 σ が ι に代わるだけです。「属格」というのは英語で言う所有格に当たるもので、～の」という意味を表す形です。英語などでは人称代名詞ぐらいにしか格変化が残っていませんが、ラテン語やギリシャ語では基本的に全ての名詞についてこれがあり、格によって各単語が変化します。主格語幹の語尾と性によって変化が決まっていますが、書き出すと数ページを要するのでここでは省きます。もし詳しくお知りになりたい場合はおそらく辞書に載っていると思いますのでご参考になさってください。

ではあらためて、Selenarctos はどうかというと、ギリシャ語の $\sigma \epsilon \lambda \eta \nu \eta$ (selene:月)と $\alpha \rho \kappa \tau \sigma$ (arctos:クマ)の複合語です。

“ $\sigma \epsilon \lambda \eta \nu \eta$ ”は属格“ $\sigma \epsilon \lambda \eta \nu \eta \sigma$ ”[selenes]で、属格め語幹は文法上の語幹語尾 α がついて“ $\sigma \epsilon \lambda \eta \nu \alpha$ ”[selena]となります。次の語の“ $\alpha \rho \kappa \tau \sigma$ ”[arctos]の語頭が母音なので、前語の語幹末の α をはずしてそのまま“ $\sigma \epsilon \lambda \eta \nu \alpha \rho \kappa \tau \sigma$ ”[selenarctos]として結合し、「月の熊」という意味になります。

学名に使われる際は、元がギリシャ語であってもラテン文字化後は一応ラテン語として扱われます。

学名の構造として、属名はラテン語の名詞としてとして取り扱える言葉であることが求められますが、種小名は属名と同格の名詞か属名を修飾する言葉でなければなりません。

種小名でよく見られる“-ensis”や“-anus”などは、固有名詞を形容詞化したり属格化した際の接尾語なのです。

人名に由来する場合、形容詞化する場合は人名の後に“(i)anus”をつけます。

形容詞なので、属名の性に対応して[-anus/ana/anum](男性形/女性形/中性形)と変化しますが、意味としては同じ「～氏の」です。

また、人名を属格化する方法もあります。人名そのままの語幹に語尾をつけるのですが、その人名が男性か女性か、単数か複数かによって、つける語尾が異なります。男性単数の場合は[-i]、女性単数は[-(a)e]、男女混合または男性のみの複数[-orum]、女性だけの複数[-arum]をつけます。

人名に[-i]がついた形が多いのはこの方法で学名にしているからです。こちらのやり方でも日本語では「～氏の」という意味になりますが、元となる人の集団によって「～家の」「～夫妻の」「～兄弟の」と訳すこともあります。

ちなみに、名前をラテン語化してから学名につけることが欧米人でよくありますが、そうなるとラテン語の語尾の[-ius]が属格化で[-ii]になります。I が種複していても誤植ではありません。

地名に由来する場合、属格化する場合はラテン語に於ける地名の性にしたがって人名と同様にされます。ただし一般的には形容詞化されるのが普通です。

形容詞にする接尾語は“-icus”と-(i)ensis“です。それぞれ属名の性に対応して[-icus/ica/icum]、[-ensis/ensis/ense] (男性/女性/中性)と変化します。

つまり thibetanus も japonicus もそれぞれ「チベットの」「日本の」という意味になります。(Thibet は Tibet の別綴りです。英語の辞書でも少し大きな辞書なら載っています)

○学名の記号

ところで、学名を見ていると上で説明した命名者や記載年以外にも特殊字体になっていない語が入っていることがあります。多くの場合小文字だけでピリオドを伴う略語ですが、比較的よく見られる数語についての説明を書いてみたいと思います。

[sp.]

これは種を意味する species の略語です。「～属の一種」を意味し、具体的には「その属には属するけれどもどの種かわからない」「その属には属するけれども名前がまだない」ときなどに使われます。

例: *Canis* sp. *Canis* 属(イヌ属)の一種

「～属の数種をあらわすときには複数形として ssp.と書きます。

例: *Cervus* ssp. *Cervus* 属の数種

[cf./cfr.]

比較参照のこと、の意味で confer の略です。化石などではよくある事ですが、標本は必ずしも完全ではありません。「恐らくこの種だろうと思われる」と言う場合に属と種小名の間に挿入して使われます。

例: *Canis* cf. *lupus* オオカミと推測されるイヌ属の一種

ほぼ同じ意味で使われる[aff.] (類似する/affinis/の略)もあります。

[var./v.]

「変種」を意味する varietas の略です。変種というのは亜種のさらに下位の分類群です。現在の動物一命名規約では亜種よりも下の分類群は規約の条項から除外されることになっているので適用されませんが、植物では適用されます。そのため主に植物の学名の中でよく見られますが動物に対して使用しても違反だというわけではありません(命名規約で適用しないので命名上有効ではないというだけです)。

動物の場合は、家畜に時々見られます。これはかつてリンネの時代は家畜とその祖先種に同一関係があるとは考えず別々の名前を与えていたのですが、今では「家畜とはその祖先の野生種から人間が人為的に作り出した変種にすぎない」という考えによって、野生種の学名で呼ぶことが多くなってきたためです。あえて家畜としての学名を表現したいというときに下の例のように変種として扱いますが、そのような場合にはリンネ時代の学名 (*Sus domestica*) を書くこともよくあります。

例: *Sus scrofa* イノシシ

Sus scrofa var. *domestica* ブタ

[fom./f.]

「型」を意味す forma の略です。変種と同じく亜種より下位の段階です。動物ではやはり学名として適格性をもっていませんが、植物の場合は「品種」と同義で植物命名規約上は変種より下位の階級です。記述する場合は var. の時と同じように品種名の前に挿入します。

[ssp./subsp.]

上述の変種や型も種小名と同様の特殊書体にします。そのため、動物の場合はあまりあり得ないのですが、植物では種小名の後ろに来た名前が亜種名であっても変種や型との区別のためにはっきりとそれを明示することがあります。そのような場合に使われるのが「亜種」を意味するこれらの言葉です。

[var.]や[form]と同様の使われ方をするのが基本なので、[sp.]のように最後につけて「～の一亜種」を意味することは基本的にありません。

以上、学名についてご参考になるかもしれないと思うことを思いつくまま書いてみましたが、よく判らなかつたり不明である点がいくつもあると思います。その場合は遠慮なくご連絡/木さい。「生物学概論」(東京大学出版会)には私の説明よりもっとわかりやすく、かつ詳しく学各についての説明が書いてあります。また、私が典拠にしました「国際動物命名規約第4版」(日本動物分類学会連合会)も、各条項に例が載っている等、見た目よりずっと取っつきやすく、専門家の方でなくても充分面白い書物だと思うので、ご覧になってみてはいかがでしょうか。(ただし規約をお求めになる場合は、一般書店では取り扱っていないので出版元へ直接ご連絡ください)。

前号で、加固さんの質問「あなたのお名前何と言うの」について第1回回答を掲載しました。今回は3回連載の第2回目です。

フィールドレポータースタッフからの回答

前号で渡辺 康子さんから、「へちま栽培やへちま水の作り方を教えてください」との投稿がありましたのでお答えします。

へちまの栽培マニュアルをはじめ、へちまに関するあらゆることをまとめた、へちまクラブ「へちま栽培完全マニュアル」をフィールドレポーターだより2001年度第2号で特集していますので、お持ちでしたら参考にしてください。

残数少しあり、無ければお送りしますのでお知らせください。

表 題「どこにでもある風景の簡単な報告 その6」

投稿日 [03.11.14]

名 前 [今津町 角井 俊明]

滋賀県中期計画がスタートしたらしい、「自然と人間がともに輝くモデル創造立県・滋賀」が基本目標で滋賀県の特長や滋賀らしい発想を生かして、重点的・戦略的な取組みを進める。…らしい。

石田川に産卵のために遡上するビワマスにとって最悪の環境となった。

河口から 2km 上流では工事をしているし、それより下は川が丸裸になり河口付近では河床を平らにして生き物の生活環境を悪化させた。動物の産卵、出産の現場を目にすることはそんなになことだともうが、11 月 12 日の石田川ではビワマスの産卵を 2 箇所で見ることができたし、穴を掘って産卵まじかのペアも見掛けられた。動物の産卵、出産は密かに行われて人が目することはまれな事のはず。

考えるに河床を平らにしてしまう行為は漁協の意志があったのではないか(マスを簡単にとらえて、マスの卵を県水産センターに売って利益を得ようとする)

山、川、湖は誰のものか農民、林家、漁民だけの存在ではない。建設会社・役人なんか何の関係もありはしない。

琵琶湖条例の上に『自然破壊防止法』をつくって人間を監視しなくてはならない。



5336-0092



表 題 [ヒシの実を食べました]

投稿日 [031014]

名 前 [彦根市 加固 啓英]

「ゆとり教育」の言葉はあれど、どう進めるべきかについては世の中はいまだに霧の中なのでしょう。その余波からか暇を持て余していそうな年金生活者の年寄りのところに子供達の時間潰しの手伝いの様な語が持ち込まれます。

私の所にもこのところ市立図書館・最寄りの小学校・町の自治会・と、立て続けに、子供達の「切り紙細工」や「工作」の世語役・相談役(指導者・先生と呼ばれたくない)を努めており、まあまあの好評を得ています。

先日の町の自治会の小学生が対象の「工作」では、輪ゴム鉄砲・スティクトンボ(アイスクリームのスティックで作る「竹トンボ」)・ヒシの実のプローチを作りました。結果は以下の通りです。

《輪ゴム鉄砲》

完成したものでフィルムケースを的にして試し撃ち大会となったのですが、付き添いのはずのお父さんの方が夢中になり、子供よりも無邪気なパパ達になってしまいました。今後の父の威厳やいかに？

《スティクトンボ》

工具として板にサンドペーパーを貼り付けたもの、スティックにも中心に孔をあけたもの、を用意し刃物を使わず揚力の発生する形にヤスリ掛けをするだけの工作でしたので、右手利き・左手利き用の形さえ間違えなければ必ず飛ぶものが作れますので全参加者が楽しめました。竹を切り出し小刀で削り、もう少し重量とサイズの大きな物を作れば「自乗三乗の法則」「ベルヌイの定理」「空力の入門」「コマ(回転物体)の運動の不思議」等を説明し、実感させられるところでしたが、一寸残念に思われました。

《ヒシの実のプローチ》

端正な水面のロゼットといった風情の草の水面下に鬼か猫の顔の様な実を成らせるヒシ・オニビシ・ヒメビシの実。

その硬く黒くなったものの片面にグルーガンで安全ピンを接着したもの、琵琶湖岸で拾った野鳥の羽毛、数色のペイントマーカー、木工用接着剤、を用意し、子供達は実の、角・目・鼻・口・に似た表面の凹凸に・好き勝手に着色し、野鳥の羽毛を頭髮に見立てて切り揃え接着するのです。

少し前まではベッカムヘアーが人気でしたが、すっかり下火になってしまいました。

☆☆ヒシの実は塩茹でにすると、水の中で育ったとは思えない程、栗の実の様に緻密で美味しいものです。ちょっと実を指で押ただけで茎からポロリと取れる(離層があるのでしょうか)程度に熟した時が食べ頃の様です。

☆☆☆、この辺りの「ネィティブ悪餓鬼」であるべき子供達が温なし過ぎます。30歳を過ぎて他所から転入し、定年まであまり近所の耕地や山川に触れていなかった私よりも、この辺りの生き物や自然について知識も関心がないのも物足りなく感じます。この辺の子供達に悪たれ教育を実践し、「陽気で無邪気な腕白」を量産したいと思います。

表 題〔シマヘビに噛まれました〕

投稿日[031014]

名 前 [彦根市 加藤啓英]

彦根市の、湖岸道路と荒神山に挟まれた辺りにある県立曾根沼緑地は週に2～3回は行く所なのですが、10月7日に、そこでシマヘビに噛まれました。

《状況》

長さ1.3m程のシマヘビを見つけ、じっくりと観察することが出来ました。

逃げた先の、追い詰められた様な状態のユキヤナギの藪の元で、8の字を3重に重ねたような形にとぐろを巻き、頭と尻尾の先をこちらに向け、映像に見られるガラガラヘビの様に、尻尾の先を地面に擦り付けるのです。こちらの動きに対応して2～5秒ずつ激しく振り立てました。

握った手から先の長さが40cm程の枯れたススキの茎を、蛇の頭の方に差し出してみました。

同様の事を猫にすれば、多分ススキの茎の先端にじゃれ付き、犬にすれば手元近くをくわえて茎全体を奪おうとするでしょう。

シマヘビでしたら茎の先端を攻撃するものと予想したのですが、電光石火スプリングが弾ける様に、約40cmを飛び越えて、茎を持った私の手の親指の元に頭を打ち付け、次ぎの瞬間には元の、とぐろを巻いた態勢に戻っていました。この瞬間、シマヘビの前半身の、約50cmは空中に支えられていたことになります。

考えて見れば、草藪で枯れ枝と動物の区別が出来なければ、生餌が捕れない道理で、もっともな結果でした。

噛まれた痛みは全く感じなかったのですが、極僅かに血が出ていました。

歯型は非常に細かく、切手の切り取りのミシン目よりも微かな6個の点で、僅かに弧を描いた列となっており、差し渡しはちょうど1cmで、右上顎のものでした。血が出ているところを見ると、非常に細く長い歯が、皮膚を貫いていたのでしょう。

自宅付近の耕地で、数年前に見た、多分孵化したばかりと思われるミズ程のサイズのものも、その後のOct/16/2003に見た1.1m程のシマヘビも同様に尻尾を振り立てるのを見ておりますが、他の種類のヘビについては見たことが有りません。

☆ 私は生来の野次根性の固まりですから、始めに出会ったのがシマヘビで良かったと思います。これがマムシでしたらえらい目に合っていたことでしょう。



フィールドレポータースタッフからの一言

年が改まって早くも1ヶ月が過ぎ去りました。今年のエトはサルです。

フィールドレポーターの皆さんは、新たな誓い、目標を立てられたでしょうか。

昨今、日常の大きな関心ごとは、昨年暮から異常な拡大が続いている鳥インフルエンザでしょうか。BSE や SARS に続く食への影響は、アジアのみに止まらないグローバルな環境汚染に繋がり、鳥インフルエンザのウイルスが人に移るという変異を起こせば SARS よりも恐ろしいと云われています。

日本では農地が減少して、小麦、大豆、植物油の農産物国内生産量は、その消費量の13%~2%しかないそうで殆んどは輸入に頼り、食料の自給率は40年前の80%から、今は40%だそうです。お金を出せば何でも得られると云う現状への反省と警鐘かもしれませんね。食に対する安全対策には厳しい日本ですが、その問題に止まらず、全てにおいてグローバルな観点から人類の存亡は自然との共存にあると云ったら過言でしょうか。

さて、フィールドレポーター第3回の調査テーマは「わが家の年中行事」です。

ただいま、津田さんが資料を集めて調査項目を作成中です。

簡潔にして、興味のある設問と結果を出すべく日夜奮闘されていますので、お手元へは今しばらくの時間を頂きたいと思いますが、みなさんの「わが家」「わが地域」でどんな年中行事があるかを、今一度考えておいて頂ければよいのではないかと思います。

そして調査へ多数のご参加をお願いいたします。



『パワフル交流市民21』参加のおしらせ

草津市制50周年記念行事のひとつ、『第4回パワフル交流市民21』に琵琶湖博物館から、はしかけさんと共に参加する事が決定しております。フィールドレポーターは、ため池や蝶の調査などのパネルを展示します。市民レベルのいろいろなプログラムが組まれているそうですので、是非見に来てください。

と き：2月14日(土) 午前10時~午後4時

ところ：草津市立まちづくりセンター(JR草津駅西口から徒歩2~3分です)

※会場には車は置けませんので、駐車は野村グランドの駐車場をご利用ください。

展 示：はしかけ、フィールドレポーターの展示会場は3F308号室です。

※なお、前日の13日(金)午後2時から会場へ搬入、展示の作業をします。

平成16年2月7日

担当は古谷でした